鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(197)

北薩広域公園整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

虎居城跡

(とらいじょうあと)

(薩摩郡さつま町宮之城)

2018年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

虎居城跡全景（手前は宗功寺公園）

序　文

薩摩郡さつま町宮之城に所在する虎居城跡は，平成 20 ～ 21 年度に川内川激甚災害対策特別緊急事業として分水路建設に伴い約 60,000 ㎡が調査され，残りの 90,000 ㎡は県立北薩広域公園園地とされていました。

この度，北薩広域公園の整備計画作成のための確認調査を実施することとなり，この報告書は平成 26･28 年度に実施した確認調査の記録です。

調査の結果，溝状遺構，炉跡，柱穴等の遺構とともに，土師器や陶磁器，金属製品等が出土しました。また，曲輪や土塁・石塁の表面遺構の残存状況を確認し，中世山城の歴史を知る上で大きな成果を得ることができました。

虎居城跡は主郭とされる曲輪（松社城）を中心に，城内に虎口や土塁など多様な施設が良好な状態で残存しており，南九州山城の独自の特徴をもつ城であることがさらに明らかとなりました。

本報告書が，県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに，文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に，本県の埋蔵文化財保護のために御協力をいただいた，鹿児島県土木部都市計画課，北薩地域振興局，さつま町教育委員会，関係各機関及び発掘調査・整理作業に従事された方々に厚くお礼を申し上げます。

平成３０年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所　長　　堂込秀人

報　告　書　抄　録

ふりがな	とらいじょうあと
書名	虎居城跡
副書名	北薩広域公園整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	197
編著者名	黒木 梨絵　藤島 伸一郎
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号　TEL　0995-48-5811
発行年月日	2018年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積（㎡）	発掘原因
とらいじょうあと 虎居城跡	かごしまけん 鹿児島県 さつまぐん 薩摩郡 さつまちょう さつま町 みやのじょう 宮之城 やち 屋地	46392	392-9 （旧22-9）	130.44325	31.90508	確認調査 20141104 ～ 20150128, 20161201 ～ 20170224	2,300 600 （計2,900）	北薩広域公園整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
虎居城跡	散布地	縄文時代		押型文土器，縄文後期土器，石鏃，調整剥片，磨石	
	散布地	古墳時代～古代		成川式土器，土師器	
	山城	中世	土坑 ピット 溝状遺構 炉跡 石塁 土塁 集石 石塔	土師器，中国陶磁器（白磁，青磁，青花），李朝青磁，中国陶器，国産陶器，瓦質土器，瓦，滑石製品，鞴の羽口，砥石，鉄製品，鉄滓ほか	
	散布地 散布地	近世 近代	硬化面	陶磁器類，瓦，寛永通寶ほか 陶磁器，ガラス製品	

要約

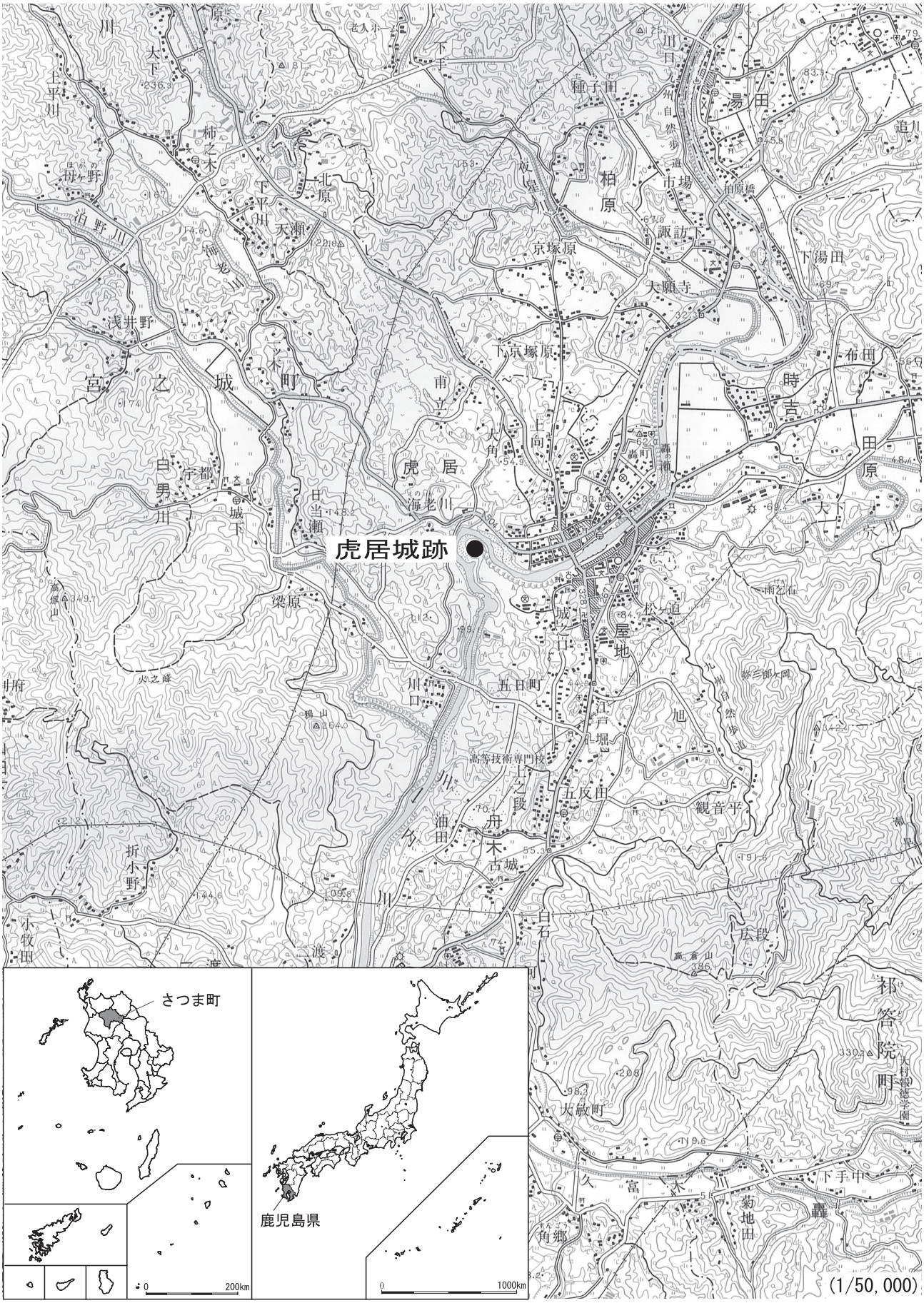
虎居城跡は，三方を川内川に囲まれた中世山城である。北薩広域公園整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（確認調査）では，中世～近世を中心とした遺物・遺構が発見された。また，表面精査の結果，曲輪や表面遺構（土塁や石塁・堀切など）が良好に残存していることが確認された。

遺構としては，曲輪，虎口，土塁，石塁，地形の微勾配（段差），窪地のほか，ピット（柱穴跡）や土坑，炉跡等が検出された。

虎居城の主郭といわれる松社城（S地区）では，土塁のほか，コの字形の石塁や窪地，庭石と思われる大石，コの字形遺構，区画溝等が検出された。また，他の曲輪にも，多彩な施設（炉跡や土塁・堀切など）があることが明らかとなった。

城北端部に位置する八女壇と呼ばれる曲輪（V地区）には，２つの堀切で仕切られた空間に宝徳２年（1450年）記銘の五輪塔と集石群（８基）があることが確認された。

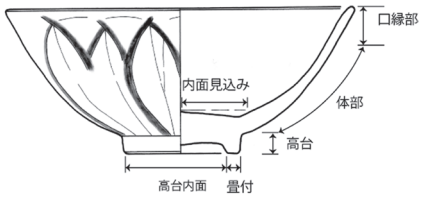
遺物は，中世土師器や中国陶磁器のほか，鉄製品や鉄滓等の中世・近世遺物が出土した。なお，一部だが，縄文時代の遺物も出土した。



虎居城跡位置図（Ｓ＝１：50,000）

例　言・凡　例

1　本書は北薩広域公園整備事業に伴う虎居城跡の発掘調査報告書である。
2　本遺跡は鹿児島県薩摩郡さつま町宮之城屋地に所在する。
3　発掘調査は，鹿児島県土木部都市計画課（事業主体）から鹿児島県教育委員会が受託し，鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。
4　発掘（確認）調査は平成 26･28 年度に実施し，整理･報告書作成作業は平成 29 年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターで実施した。
5　掲載遺物番号は通し番号とし，本文，挿図，表，図版の番号は一致する。
6　遺物注記等で用いた記号は「トライ２」である。
7　挿図の縮尺は，挿図ごとに示した。
8　本書で用いたレベル数値は海抜絶対高である。
9　本書で使用した方位はすべて真北である。
10　発掘調査における実測図作成及び写真撮影は，調査担当者が行った。また，空中写真の撮影は（有）ふじたに委託した。
11　石塔・集石の実測は（株）九州文化財研究所に，石塁の実測・トレースは一部（株）大福コンサルタントに委託した。
12　遺構図等の作成及びトレースは藤島伸一郎，黒木梨絵が整理作業員の協力を得て行った。
13　出土遺物の実測・トレースは，藤島，黒木が作業員の協力を得て行った。
14　出土遺物の写真撮影は，吉岡康弘が行った。
15　本書に係る自然科学分析は，炭素年代測定は（株）加速器分析研究所に委託し，赤色顔料の蛍光 X 線測定は，当センター南の縄文調査室の武安雅之が行った。
16　金属製品の保存処理は整理作業員の協力を得て武安が行った。
17　観察表の表記凡例は次のとおりである
⑴「法量」において，括弧内に記載している数値は復元径の値である。



⑵「胎土」における記号の表現は次のとおりである。
□…微量含む　　△…少量含む
○…含む　　◎…多量含む

18　本書で用いた陶磁器の表現は下図のとおりである。
19　陶磁器の分類および編年は以下の文献を参考にした。
上田秀夫 1982「14 ～ 16 世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁器研究』２，pp. 55-70
小野正敏 1982「15 ～ 16 世紀の染付碗，皿の分類とその年代」『貿易陶磁器研究』２，pp. 71-87
大宰府市教育委員会編 2000「大宰府条坊跡 XV －陶磁器分類編一』大宰府市の文化財第 49 集
森田勉 1982「14 ～ 16 世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁器研究』２，pp. 10-33
20　本書の編集は黒木・藤島が担当し，執筆の分担は次のとおりである。

第１・２章	藤島・黒木
第３章	黒木・藤島
第４章	（株）加速器分析研究所
第５章	黒木・藤島

21　虎居城跡は平成 20・21 年に川内川激甚災害対策特別緊急事業で発掘調査を実施し，平成 23 年に鹿児島県立埋蔵文化財センターが発掘調査報告書を刊行している。平成 26・28 年度の発掘調査では，調査区の地区割り・グリッドを平成 20・21 年度調査で使用したものを踏襲し，使用した（第３章参照）。
22　虎居城跡の地理的・歴史的環境については，鹿児島県立埋蔵文化財センター 2011『虎居城跡』に詳しい。参照にされたい。
23　本書に係る出土遺物及び実測図，写真等の記録は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し，展示活用を図る予定である。

目　次

巻頭図版
序文
報告書抄録
例言・凡例

第１章　発掘調査の経過 …… 1
　第１節　調査に至るまでの経緯 …… 1
　第２節　確認調査 …… 1
　第３節　整理・報告書作成 …… 2
第２章　遺跡の位置と環境 …… 4
　第１節　地理的環境 …… 4
　第２節　歴史的環境 …… 4
第３章　調査の方法と成果 …… 9
　第１節　調査の方法 …… 9
　第２節　層序 …… 11
　第３節　調査の成果 …… 11
　１　Ｎ地区 …… 11
　２　Ｏ地区 …… 12
　３　Ｐ地区 …… 12
　４　Ｑ地区（女中仮屋） …… 16
　５　Ｒ地区 …… 20
　６　Ｓ地区（松社城） …… 22
　７　Ｅ’地区（中の城） …… 39
　８　Ｔ地区 …… 44
　９　Ｕ地区 …… 45
　10　Ｖ地区（八女壇） …… 45
　11　Ｗ地区 …… 46
　12　Ｘ・Ｙ地区 …… 46
　観察表 …… 47
第４章　自然科学分析 …… 50
第５章　総　括 …… 54
写真図版

挿図目次

虎居城跡位置図(1:50000)
第１図　虎居城跡曲輪略図…… 2
第２図　虎居城跡調査地区割り図(1:4000)…… 3
第３図　虎居城跡古地図(1:50000) …… 4
第４図　虎居城跡曲輪図…… 5
第５図　周辺遺跡位置図(1:25000) …… 7
第６図　トレンチ配置図(1:2500)…… 10
第７図　Ｎ地区トレンチ配置図…… 11
第８図　Ｎ地区出土遺物…… 11
第９図　Ｏ・Ｐ・Ｑ地区トレンチ配置図…… 12
第10図　Ｐ地区９トレンチ遺構配置図 …… 13
第11図　Ｐ地区10トレンチ遺構配置図…… 13
第12図　Ｐ地区９・10トレンチ出土遺物 …… 13
第13図　Ｑ地区12トレンチ遺構配置図…… 14
第14図　Ｑ地区13トレンチ遺構配置図…… 14
第15図　Ｑ地区13トレンチ集石…… 14
第16図　Ｑ地区トレンチ出土遺物①…… 15
第17図　Ｑ地区トレンチ出土遺物②…… 16
第18図　Ｑ地区トレンチ出土遺物③…… 17
第19図　Ｑ地区31トレンチ遺構配置図…… 18
第20図　Ｒ地区16トレンチ遺構配置図…… 19
第21図　Ｒ地区トレンチ出土遺物…… 19
第22図　Ｓ地区トレンチ配置図…… 20
第23図　Ｓ地区19トレンチ遺構配置図…… 21
第24図　Ｓ地区21トレンチ遺構配置図…… 21
第25図　Ｓ地区72トレンチ遺構配置図・土層断面図 … 21
第26図　Ｓ地区18(土塁)・69(窪地)トレンチ土層断面図 …… 22
第27図　Ｓ地区石塁…… 23
第28図　Ｓ地区68トレンチ大石・かませ石 …… 24
第29図　Ｓ地区23トレンチ遺構配置図・溝状遺構断面図　24
第30図　Ｓ地区23トレンチ土層断面図…… 24
第31図　Ｓ地区71トレンチ遺構配置図…… 25
第32図　Ｓ地区66・67トレンチ遺構配置図 …… 26
第33図　Ｓ地区25トレンチ遺構配置図…… 26
第34図　Ｓ地区25トレンチ土坑出土土師器…… 26
第35図　Ｓ地区70トレンチ遺構配置図・土層断面図 … 27
第36図　Ｓ地区70トレンチ遺構内出土遺物…… 27
第37図　Ｓ地区トレンチ出土遺物①…… 28
第38図　Ｓ地区トレンチ出土遺物②…… 29
第39図　Ｅ’・Ｔ地区トレンチ配置図…… 30
第40図　Ｅ’地区出土縄文土器(34Ｔ) …… 30
第41図　Ｅ’地区34トレンチ配置図・遺構配置図・土層断面図 …… 31
第42図　Ｅ’地区35トレンチ遺構配置図 …… 32
第43図　Ｅ’地区トレンチ出土遺物 …… 32
第44図　Ｔ地区36トレンチ配置図・土層断面図 …… 33
第45図　Ｔ地区37～39トレンチ遺構配置図…… 33

第46図　Ｔ地区41・42トレンチ遺構配置図 …… 33
第47図　Ｅ’地区・Ｔ地区トレンチ出土遺物…… 34
第48図　Ｔ地区73トレンチ遺構配置図・土層断面図 … 35
第49図　Ｔ地区73トレンチ溝①出土遺物…… 35
第50図　Ｕ～Ｗ地区トレンチ配置図…… 36
第51図　Ｕ地区 43・44 トレンチ・Ｖ地区 49・50・65 トレンチ遺構配置図…… 36
第52図　Ｖ地区集石１～６号配置図…… 37
第53図　Ｖ地区集石１・２号 …… 38
第54図　Ｖ地区集石３・４号 …… 39
第55図　Ｖ地区集石５号…… 40
第56図　Ｖ地区集石６号…… 40
第57図　Ｖ地区集石７号…… 40
第58図　Ｖ地区集石７・８号配置図 …… 41
第59図　Ｖ地区集石８号…… 41
第60図　Ｖ地区54・57・58・59トレンチ土層断面図 …… 42
第61図　Ｖ地区55トレンチ土層断面図…… 43
第62図　Ｖ地区64トレンチ遺構配置図・土層断面図 … 43
第63図　Ｖ地区トレンチ出土遺物…… 44
第64図　倒壊前の石塔…… 46
第65図　石塔記銘…… 46
第66図　暦年較正年代グラフ…… 51
第67図　暦年較正年代グラフ…… 53
第68図　調査成果における遺構および縄張り…… 55
第69図　曲輪地形断面図…… 56
第70図　Ｓ地区曲輪（松社城）の縄張りと曲輪内の区画割り …… 57
第71図　トレンチ配置図…… 58

図版目次

巻頭図版　　虎居城跡全景
写真図版１　虎居城跡遠景・Ｓ地区石塁…… 61
写真図版２　Ｎ・Ｑ・Ｐ地区調査状況…… 62
写真図版３　Ｑ地区調査状況…… 63
写真図版４　Ｑ・Ｒ・Ｓ地区調査状況…… 64
写真図版５　Ｓ地区調査状況…… 65
写真図版６　Ｓ・Ｅ’地区調査状況 …… 66
写真図版７　Ｅ’・Ｔ・Ｕ・Ｖ地区調査状況…… 67
写真図版８　Ｖ・Ｗ地区調査状況 …… 68
写真図版９　中・近世遺物① …… 69
写真図版10　中・近世遺物② …… 70
写真図版11　中・近世遺物③・縄文土器 …… 71
写真図版12　中・近世遺物④ …… 72

表目次

第１表　虎居城跡関連年表…… 6
第２表　周辺遺跡地名表…… 8
第３表　基本土層…… 9
第４表　中・近世遺物観察表①…… 47
第５表　中・近世遺物観察表②…… 47・48
第６表　中・近世遺物観察表③…… 49
第７表　中・近世遺物観察表④…… 49
第８表　縄文・古墳時代遺物観察表 …… 49
第９表　石器観察表…… 49
第10表　放射性炭素年代測定結果…… 51
第11表　放射性炭素年代測定結果…… 51
第12表　放射性炭素年代測定結果…… 53
第13表　放射性炭素年代測定結果…… 53
第14表　各地区のトレンチ調査成果…… 59

第１章　発掘調査の経過

第１節　調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は，文化財の保護・活用を図るため，各開発関係機関との間で事業区域内における文化財の有無及びその取扱いについて協議し，諸開発との調整を図っている。

鹿児島県土木部都市計画課（以下，都市計画課）は北薩広域公園整備事業において，虎居城跡を歴史ゾーンとして公園整備を行う計画を立案し，都市計画課と鹿児島県教育庁文化財課（以下，県文化財課）はその取扱いについて協議を行った。

協議の結果，対象地域内の遺跡の範囲と性格を把握するために，県立埋蔵文化財センター（以下，埋文センター）が確認調査を実施することとなった。また，確認調査に際し，公園整備計画に必要な情報を得るため，城域90,000㎡における事業対象地5,700㎡に対し，事業対象地に72カ所のトレンチを設定し，調査を行う計画となった。

確認調査は，平成26・28年度に実施した。平成26年度は39カ所のトレンチを設定し（掘削面積：表面積1,800㎡・延面積2,300㎡），調査を実施した。調査期間は平成26年11月４日(火)から１月28日（水）である。

平成28年度は，31カ所のトレンチを設定し（掘削面積：表面積600㎡，延面積600㎡），調査を実施した。調査期間は平成28年12月１日（月）から平成29年２月24日（金）である。

平成26・28年度の調査を合わせて,計70トレンチ，延面積2,900㎡（表面積2,400㎡）の調査を行った。

第２節　確認調査

平成 26・28 年度に確認調査を実施した。調査体制及び調査の経過については，以下のとおりである。

１　調査体制

（１）平成26年度

事業主体	鹿児島県土木部都市計画課	
	北薩地域振興局	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所長	井ノ上秀文
調査企画	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	次長兼総務課長	中島　治
	調査課長兼南の縄文調査室長	前迫　亮一
	第一調査係長	大久保浩二
調査担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	文化財主事	永濵　功治
	文化財主事	浦　博司
事務担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	主幹兼総務係長	有馬　博文
	主査	草水美穂子
調査指導	鹿児島県文化財保護審議員	三木　靖
	鹿児島国際大学准教授	太田　秀春
	姶良市教育委員会	下鶴　弘
	南九州市教育委員会	上田　耕

（２）平成28年度

事業主体	鹿児島県土木部都市計画課	
	北薩地域振興局	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所長	福山　徳治
調査企画	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	次長兼調査課長	前迫　亮一
	総務課長	高田　浩
	第二調査係長	今村　敏照
調査担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	文化財主事	本髙　謙治
	文化財研究員	黒木　梨絵
事務担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	総務係長	脇野　幸一
	専門員	草水美穂子
調査指導	鹿児島国際大学准教授	太田　秀春

２　調査の経過

発掘調査の経過については，日誌抄を月ごとに集約して記載する。

（１）平成26年度（平成26年11月４日～１月28日）

10月　環境整備，トレンチ設定

11月　オリエンテーション，環境整備，調査前状況写真撮影，トレンチ調査，Ｎ地区３Ｔ周辺曲輪地形実測

12月　環境整備，集石・石塔１～８号実測委託（（株）九州文化財研究所），地形実測，トレンチ調査

１月　石垣清掃，石塁・窪地・北部礫集中区清掃，土塁測量，集石実測，トレンチ調査

調査指導　太田秀春（鹿児島国際大学准教授）
三木　靖（鹿児島県文化財保護審議員）
下鶴　弘（姶良市教育委員会）
上田　耕（南九州市教育委員会）

（２）平成28年度（平成28年11月14日～29年2月24日）

11月　分水路草木伐採，調査区内倒木撤去，調査済トレンチ位置確認，新トレンチ設置予定箇所確認

12月　オリエンテーション，環境整備，トレンチ調査

１月　環境整備，トレンチ調査，石塁・土塁平面実測，

土塁測量
2月　航空写真撮影，トレンチ調査，土塁実測，石塁実測委託（（株）大福コンサルタント）
調査指導　　太田秀春（鹿児島国際大学准教授）

第３節　整理・報告書作成

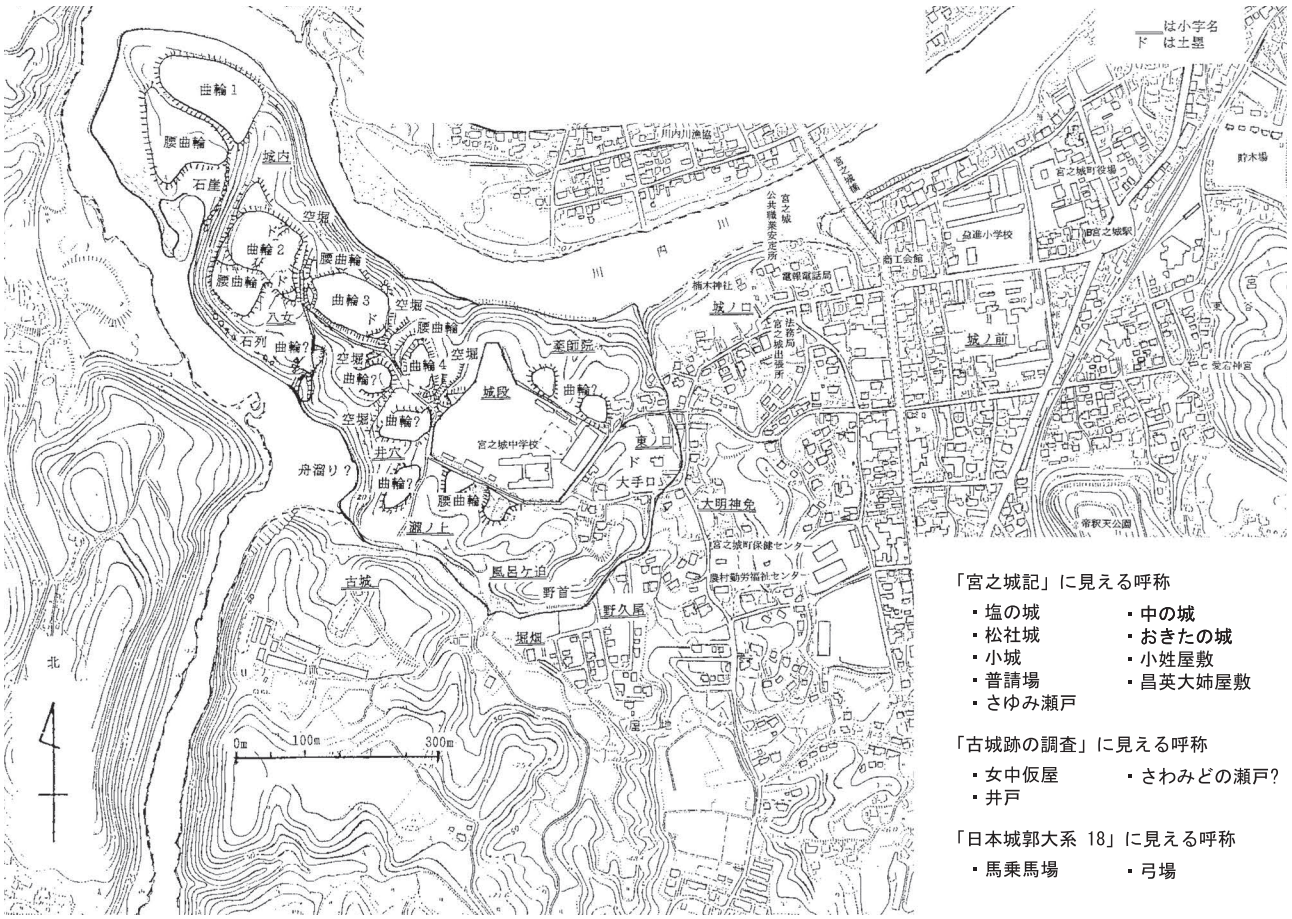
本報告書刊行に伴う整理・報告書作成作業は，平成29年４月３日～10月30日にかけて鹿児島県立埋蔵文化財センターで行った。整理・報告書作成作業に関する調査体制は以下のとおりである。

１　作成体制（平成29年度）

事業主体　鹿児島県土木部都市計画課
　　北薩地域振興局
作成主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
作成統括　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　　所長　　堂込　秀人
作成企画　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　　次長兼調査課長　　大久保浩二
　　総務課長　　高田　浩
　　調査第二係長　　宗岡　克英
作成担当　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　　文化財主事　　藤島伸一郎
　　文化財研究員　　黒木　梨絵
事務担当　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　　総務係長　　草水美穂子
　　主査　　新穂　秀一
調査指導　鹿児島大学名誉教授　　大木　公彦
　　(株)青楓緑化　取締役　　岸野　純一
　　南九州市教育委員会　　上田　耕

２　整理作業の経過

整理作業の経過は，月ごとに集約して記載する。
４～６月　図面整理，原稿執筆，放射性炭素年代測定委託
７月　遺物水洗い・注記，遺物実測・トレース，原稿執筆，レイアウト，観察表作成
　現地指導　　大木　公彦（鹿児島大学名誉教授）
　　岸野　純一（(株)青楓緑化取締役）
８月　遺物・遺構トレース，原稿執筆，レイアウト，遺物写真撮影
　整理指導　　上田　耕(南九州市教育委員会)
９月　レイアウト修正，原稿執筆，編集
10～11月　編集，入札，校正，遺物収納
２月　報告書印刷，納入

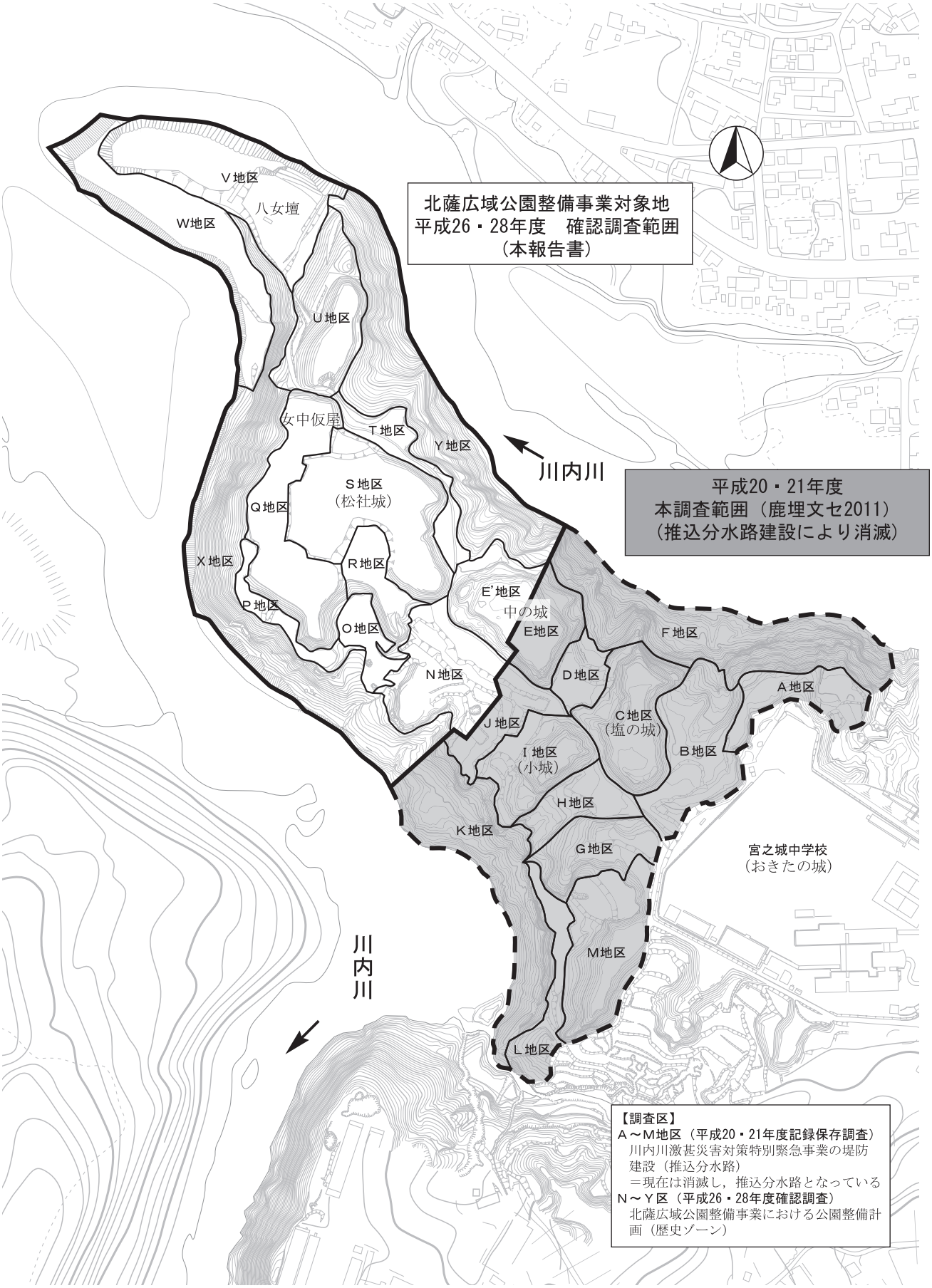


「宮之城記」に見える呼称
- 塩の城
- 中の城
- 松社城
- おきたの城
- 小城
- 小姓屋敷
- 普請場
- 昌英大姉屋敷
- さゆみ瀬戸

「古城跡の調査」に見える呼称
- 女中仮屋
- さわみどの瀬戸?
- 井戸

「日本城郭大系 18」に見える呼称
- 馬乗馬場
- 弓場

第１図　虎居城跡曲輪略図（鹿埋文セ 2011）



第２図　虎居城跡調査地区割り図（1：4000）

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

虎居城跡は，鹿児島県薩摩郡さつま町宮之城屋地に所在する。さつま町は鹿児島県の北西部に位置し，周囲を山地に囲まれ，川内盆地の一部となっている。

さつま町は，平成17年に旧薩摩郡の宮之城町・鶴田町・薩摩町が合併して誕生した，総面積303.9㎢の内陸部に位置する町である。

虎居城跡は，町の中心の屋地地区や虎居地区の西側に接しており，城の外周を川内川が囲むように流れ，川は半島状に突き出た城の先端の北西部で大きく屈曲し南側の下流に向かう。

河川沿いの多くは崖状となっており，内陸部は台地状の平坦部がみられる。対岸には北薩広域公園や宮之城島津家の菩提寺である宗功寺墓地（県指定史跡）が宗功寺公園として整備されている。東側には周囲の都市とつながる国道504号線や267号線などが整備されている。

1904年(明治37年)の5万分の１地形図(第３図）では，虎居城跡は桑畑や広葉樹林がみられる。地域の人々からの聞き取りによれば，虎居城跡は明治～昭和期には畑として利用されていたようである。

平成18年７月の鹿児島県北部豪雨災害において川内川で氾濫や洪水が発生し，さつま町市街地付近は甚大な被害を受けた。この被害を契機として，平成18年度から「川内川激甚災害対策特別緊急事業（激特事業）」の河川整備計画において堤防建設工事（推込分水路）が実施されることとなった。推込分水路の建設に先立って，埋蔵文化財包蔵地の有無について県文化財課が照会した結果，整備対象地が周知の埋蔵文化財包蔵地（虎居城跡）の一部であることが判明した。

これにより，埋文センターとさつま町教育委員会が平成20・21年度に工事対象地の記録保存調査を実施した。調査終了後は,推込分水路の建設により城跡の一部は失われ，現在の虎居城跡は，推込分水路を挟んだ北側の半島状に突き出た部分と宮之城中学校周辺部分に分断されている。

第２節　歴史的環境

１　周辺遺跡（第５図・第２表）

虎居城跡周辺には，縄文～古墳時代，中・近世を中心に多くの遺跡がある。

旧石器時代では，向井原遺跡で細石刃や細石刃核が，中津川城遺跡では細石刃核が１点出土している。

縄文早期では，甫立原遺跡･北方遺跡のほか，虎居城跡や松尾城・宗功寺跡で山型・楕円押型文土器等が出土している。縄文前期では，園田遺跡で５基の集石遺構や轟式土器が，通山遺跡では曽畑式土器が出土している。後期では宮ノ前遺跡で市来式土器や磨石,石皿等が出土している。晩期では田間田遺跡で入佐式土器の埋設土器が出土している。

古墳時代は，川内川流域に広く分布する地下式板石積石室墓も発見されている。湯田原古墳から１基，小松原古墳及び別府原古墳群から６基ずつ発見され，刀剣や鏃など多くの鉄器が出土している。

古代では，時吉北川遺跡で「新･来･神」などの文字が書かれた墨書土器や須恵器・土師器が出土している。

中世では，時吉北川遺跡で炉跡や青磁・白磁・紡錘車が，中津川城跡・寺屋敷遺跡で青磁や土師器が出土している。通山遺跡では約300基の土坑及び２基の方形竪穴遺構や鞴の羽口や鉄滓等が出土している。

宮ノ前遺跡では越州窯・龍泉窯系青磁のほか，鞴の羽口や多量の鉄滓が出土しており，鍛冶が行われていた可能性が指摘されている。

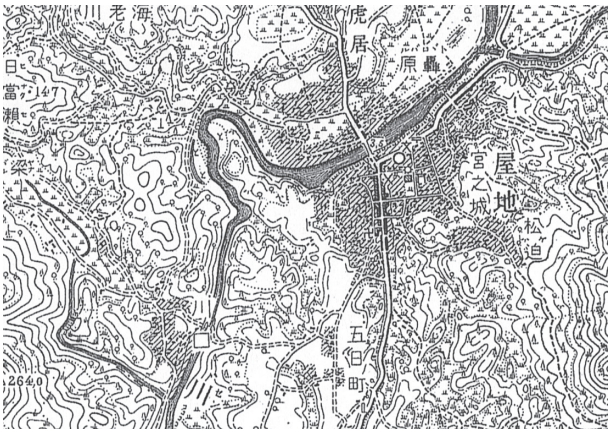
松尾城及び宗功寺跡でも鉄滓や鞴の羽口を伴った鍛冶関連の炉遺構や掘立柱建物跡等が検出されている。

近世では，松尾城及び宗功寺跡では宮之城島津家の墓地が現存しており，染付や瓦類が出土している。

２　虎居城の歴史的背景（第１表）

虎居城跡は川内川に三方を囲まれ，川との比高差約43ｍの尾根状に突き出た河岸段丘に築城された群郭式城郭である。城内は「塩の城」,「中の城」,「松社城」,「おきたの城」,「小城」,「小姓屋敷」,「普請場」,「昌英大姉屋敷」などの複数の曲輪から構成されている（第１・４図）。平成20・21年度調査では ,「おきたの城」,「塩の城」,「小城」,「近藤屋敷」と「中の城」の一部が調査された。

虎居城は，祁答院渋谷氏の隆盛時の居城である。虎居城跡に関する文献史料に江戸中期に編纂されたといわれ



第３図　虎居城跡古地図（1：50000）
（明治 37 年製版　大日本帝國陸地測量部）

る『宮之城記』（享保２年頃：1717年），『祁答院記』（享保14年頃：1729年）などがあるが，いずれも近世地誌類しかなく，同時代の史料が確認されていない。

それらの文献資料によれば，虎居城の謂れは「*昔，大前氏は虎に臥した形にこの城を執り始めた。よって虎居城と号していた*」（『宮之城記』）とされている。

虎居城は大前氏により康治年間（1142年頃）に築城され，宝治２年（1248年）に関東から下向した渋谷重保（渋谷五兄弟）が祁答院渋谷氏を名乗り，虎居城を祁答院氏の拠点とした。以降，永禄９年（1566年）に渋谷良重の代で，祁答院渋谷氏が滅亡するまでの約300年間祁答院渋谷氏の居城であったとされている。

この頃の出来事として，平川地区に残る「悪四郎石」と呼ばれる石塔に関する言い伝えによると，明徳４年(1393年)頃，出水の大重悪四郎が虎居城を攻めたが，城下の川の中に押し込まれて戦死した。その場所はE’地点（中の城）の北側にあたる川付近であり，後にその場所を「しごめ（推込）」と呼ぶようになったとされる。

また，虎居城跡の北端部分にある「八女瀬」という瀬で，長禄３年(1459年)に渋谷氏の息女と七人の侍女が溺死したとされる。その近くは「八女壇」とよばれる場所があり，この出来事が由来となっている。

祁答院渋谷氏の滅亡後は，天正８年（1580年）に島津歳久が領主となる。文禄元年（1592年）に島津歳久が自害した後は，一時領主が不在となるが，文禄４年（1595年）都城の北郷時久が所替えで領主となる。宮之城という地名の由来には，北郷氏の出身地から宮城と命名され，以降「宮之城」の地名に発展していったという説がある。

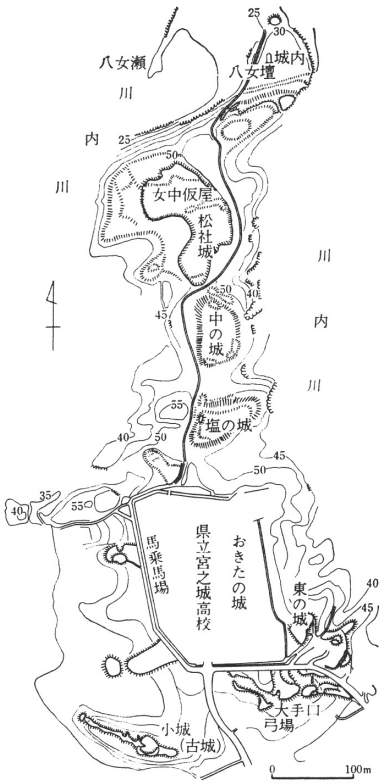
本郷氏は慶長４年(1599年)には都城へ戻り，慶長５年(1600年)，島津忠長が宮之城の地頭として移り，虎居城の対岸の松尾城跡に菩堤寺として宗功寺を建立し，宮之城島津家が始まる。

元和元年(1615年)の一国一城令が発布された後は，宮之城島津家の家臣の居住地となったようである。

３　推込分水路（平成20・21年度）発掘調査の成果

堤防建設工事（推込分水路）に先立っての調査では，C地区台地部の曲輪Ⅰ（塩の城），E地区台地部の曲輪Ⅱ（中の城），Ⅰ地区台地部の曲輪Ⅲ（小城），G地区台地部の曲輪Ⅳ（おきたの城），M地区台地部の曲輪Ⅴが調査された。

調査では，曲輪を取り巻く２つの大規模な空堀が検出された。空堀Ⅰは箱堀状を呈し，「曲輪Ⅰ(塩の城)」の東・南の外縁に沿って裾野部分から「曲輪Ⅳ(おきたの城)」の西側裾野部分に位置する。空堀Ⅱは曲輪Ⅱ(中の城)の東・南の裾野部分を廻り，虎居城の主郭と言われる「松社城」の南側外縁部分に延びるものと想定されている。　また，曲輪内で土塁を東・南からの進入を防ぐように築造している点は特徴として挙げられる。



第４図　虎居城跡曲輪図『日本城郭体系 18』（三木 1979）

曲輪群からは溝状遺構や炉跡のほか，夥しい数の柱穴が検出されている。柱痕には四角形，六角形，八角形（神社建築？），多角形，丸柱の多種多様なものを使用しており，多くの掘立柱建物跡があったことが窺える。

M地区は竪穴建物跡が２基のほか，炉跡も検出されており，製鉄及び錬銅の鍛冶炉の工房であった可能性が指摘されている。

出土遺物は，土師器・陶磁器のほか，多くの木製品が出土している。遺物の時期は，15～16世紀代のものが最も多い。祁答院渋谷氏の勢力が増し，島津氏との攻防が盛んに行われていた時期で，実質的に渋谷氏が虎居城跡に居住したとされる７代渋谷重茂から13代渋谷良重の頃と一致している。

主要参考文献

鹿児島県埋蔵文化財センター　2011『虎居城跡』
宮之城文化懇談会編　2001　『虎居城物語』　宮之城文化懇談会
宮之城町史編纂委員会　2000「宮之城記」「祁答院記」別冊資料編『宮之城町史』

第１表　虎居城跡関連年表

年代	統治・居住	氏族	城主	虎居城関係	主な歴史的事項
万寿5年 （1028年）	約100年？	大前氏 （虎居城築城）	大前氏 大前道助 大前道秀	万寿5年（1028年）大前道助　祁答院地方を支配 薩摩国国司として下向	
康治年間 （1142～43年）				**虎居城築城　（大前道秀）** *「宮城は，藺牟田・山崎・宮城・黒木・佐志・鶴田・長野・（※大村が脱か）の八郷の中間にあって，東南には鉾の尾峰，西北には上宮山（紫尾山）があり，自然の要害で堅固である」* *「昔，**大前氏は虎に臥した形にこの城を執り始めた**。よって**虎居城**と号していた。」* *「大河（川内川）が郭の外を環っていて，逆波が漲り敵の進入を遮断することができる。そして大前氏は世々居城とした～」*『宮之城記』	保元の乱（1156） 平治の乱（1159） 鎌倉幕府成立（1185） 壇ノ浦の合戦（1187）
宝治2年 （1248年）	約300年	祁答院渋谷氏 （虎居城居城）	渋谷氏 渋谷五族祁答院	関東から下向し院郡司となる →渋谷五兄弟が諸処の地頭となる その子孫が「**祁答院渋谷氏**」（祁答院氏祖（重保））を名乗る （13代続く（諸説あり）） **=祁答院氏の拠点（虎居城）とする**	承久の乱（1221） 文永の役（1274）
永仁年間 （1293年）			渋谷行重（4代）	松尾山興全寺を創建（松尾寺のちの興全寺）	弘安の役（1281）
貞治3・正平19年 （1364年）			渋谷公重（6代）	黄龍山大願寺を創建（一説に再建）	鎌倉幕府滅亡（1333） 室町幕府成立（1336）
明徳4年 （1393年）頃			大重悪四郎（出水）：虎居城攻め　「しごめ（推込）の瀬」		南北朝合体（1392）
宝徳2年 （1450年）			**八女壇石塔記銘：「宝徳二年　義先仁公座〇　二月二十二〇」**		応永の乱（1399）
長禄3年 （1459年）			渋谷徳重（9代）	渋谷徳重の娘と七女「八女の瀬」で水死 **=「八女壇」**	
文明17年 （1485年）			渋谷重慶（10代）	祁答院渋谷氏の勢力拡大 **文明の大合戦** 島津方の祁答院攻め （藺牟田城，大村城，久冨木城に侵攻。 虎居城までは侵攻できず）	応仁の乱（1467） 桜島文明の大噴火（1476）
享禄2年 （1529年）			渋谷重武（11代）	**重武の姶良攻め** ＝島津の勢力衰退 ＝祁答院渋谷氏の勢力拡大	鉄砲伝来（1543）
天文23年 （1554年）			渋谷良重（13代）	**岩剣城の合戦** 渋谷良重VS島津貴久 ＝渋谷氏の敗北	
永禄9年 （1566年）				渋谷良重，**松社城**で殺害される **＝祁答院渋谷氏の滅亡**	桶狭間の合戦（1560） 室町幕府滅亡（1573）
天正8年 （1580年）	12年	島津氏	島津歳久	島津歳久が領主となる	本能寺の変（1582）
天正15年 （1586年）				豊臣秀吉の薩摩入り	九州平定（1587） ＝島津義久の降伏
文禄元年 （1592年）				歳久自害	文禄の役（1592） ＝朝鮮出兵
文禄4年 （1595年）	4年	北郷氏	北郷時久	北郷氏が領主となる	
慶長4年 （1599年）				北郷氏:都城へ復帰	慶長の役（1597） ＝朝鮮出兵
慶長5年 （1600年）	―	島津氏	島津忠長	忠長，宮之城の地頭となる **宗功寺**を創建 **＝宮之城島津家**が始まる	関ヶ原の戦い（1600） 江戸幕府成立（1603）
元和元年 （1615年）			－	**一国一城令** ＝これ以降宮之城島津家家臣が居住	大阪夏の陣（1615）

第５図　周辺遺跡位置図（１：25000）

第２表　周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
1	政所C遺跡	柏原	台地	古墳	成川式	
2	長牟田遺跡	柏原字長牟田	台地	縄文，弥生，古墳	打製石斧・黒曜石剥片・弥生土器	
3	小松原古墳	柏原字小松原2374-3	台地	古墳	地下式板石積石室墓　7基	鶴田町教委1979『鶴田町史』
4	小松原B遺跡	柏原	台地	旧石器，縄文，古墳	細石核・細石刃・縄文土器・成川式	
5	小松原A遺跡	柏原	台地	縄文，古墳，中世	縄文土器・成川式・青磁	
6	原田後A遺跡	柏原	台地	古墳	成川式土器	
7	大願寺遺跡	柏原	河岸段丘	縄文，古墳，中世	黒曜石剥片・成川式・土師器・青磁	
8	大願寺跡墓石群	柏原字上大願寺2636	台地	中世（鎌倉～室町）	薬師堂跡・開山堂跡	
9	黄龍山大願寺跡	柏原字上大願寺2636	台地	白鳳	礎石・鐘楼跡・薬師堂・開山堂・土器片	
10	黄龍山興禅寺跡	柏原字興禅寺771	台地	不明		
11	甫立原遺跡	虎居字甫立原	台地	縄文	土器片・黒曜石	宮之城町教委1992『甫立原遺跡』
12	政所A遺跡	柏原	台地	縄文，古墳	石斧・磨石・縄文土器・成川式	
13	政所B遺跡	柏原	台地	縄文，古墳	黒曜石剥片・縄文土器・成川式	
14	樋山遺跡	柏原字樋山	台地	縄文	黒曜石剥片・石鏃・縄文土器	
15	原田後B遺跡	柏原	台地	古墳	黒曜石剥片・成川式	
16	原田B遺跡	柏原	台地	縄文，古墳	打製石斧・石鏃・縄文土器・成川式	
17	原田A遺跡	柏原	台地	古墳	成川式	
18	御手水遺跡	柏原	河岸段丘	古墳	成川式	
19	長岡遺跡	柏原字城ヶ迫2847の外	台地	中世（鎌倉）		大前氏築城
20	時吉北川遺跡	時吉・北川・焼米田他	台地	縄文～中世	成川式・土師器・須恵器・墨書土器・青磁	さつま町教委2006『時吉北川遺跡』
21	西ノ原遺跡	虎居甫立	台地	縄文，古墳	土器片（多数）・青磁・石鏃	
22	大角原遺跡	虎居大角・甫立	台地	縄文～古墳	石鏃・土器片	
23	北園遺跡	虎居甫立	台地	縄文，奈良，平安，中世	成川式	
24	登鹿倉遺跡	虎居上向	台地	縄文，古墳		
25	原田前遺跡	柏原	河岸段丘	古墳	成川式	
26	椿城跡	柏原字御手水	台地	中世（鎌倉）		大前氏築城
27	時吉瀬ノ上遺跡	時吉	河岸段丘	縄文（中・後）	阿高･南福寺･出水･指宿･市来･鐘ヶ崎式等	昭和46年出土
28	轟原城跡	虎居字原口	台地	中世		中世城館跡，一部消滅
29	平田遺跡	虎居平田	台地	縄文	塞ノ神式・平栫式	
30	菖蒲ヶ迫遺跡	虎居海老川	低地	古墳	成川式	
31	免田遺跡	虎居大角	台地	縄文，古墳	土器片・石鏃	
32	原口遺跡	虎居大角・原口・堂ノ前・椿ノ下	台地	古墳	土器片	
33	轟原瀬ノ上遺跡	虎居轟原	低地	縄文（後）		
34	松尾城跡	虎居海老川	台地	縄文，中世		
35	宗功寺跡	虎居5254・5255	台地	近世	宮之城島津家菩提寺「大徳山宗功寺」 県指定文化財	宮之城町教委1995･1997 『松尾城及び宗功寺跡2･3』
36	後川遺跡	虎居西手	台地	縄文，古墳	黒曜石・土器片	
37	曇秀寺	虎居旭町	台地	近世		
38	鼠ヶ城跡	田原	台地	平安		
39	**虎居城跡**	**宮之城屋地城之口**	**台地**	**縄文，古墳，中世，近世**	**中世山城跡**	**鹿児島県埋セ2011『虎居城跡』**
40	虎居町武家屋敷跡	虎居西新町	扇状地	近世，近代	薩摩焼・染付・瓦質土器	さつま町教委2011『虎居町武家屋敷跡』
41	宮之城窯跡	宮之城屋地愛宕	山麓緩斜面	近世	薩摩焼	一部消滅
42	多宝寺跡	宮之城屋地愛宕	台地	近世	石塔	
43	大道寺跡	宮之城屋地	台地	近世	僧侶墓・石塔	
44	深田遺跡	虎居川口	山麓緩斜面	古墳	成川式	
45	湯ノ原遺跡	虎居川口	山麓緩斜面	古墳？	土器片	
46	古城跡	宮之城屋地字古城	台地	中世		中世城館跡
47	巣山上段遺跡	宮之城屋地	台地	縄文，古墳，中世	土器片・石鏃・スクレイパー・磨製石鏃	平成5年分布調査
48	新堀遺跡	宮之城屋地	台地	縄文，古墳	石鏃、土器片	
49	三角堀遺跡	舟木西	台地	縄文，古墳～中世	成川式・石鏃・土器片・青磁	
50	枦木堀遺跡	宮之城屋地	台地	縄文，古墳	黒曜石剥片・成川式	
51	諏訪原遺跡	宮之城屋地	台地	縄文，古墳，近世	成川式	宮之城町教委1995『諏訪原遺跡』
52	柊崎遺跡	船木	台地	古墳，中世	成川式・土師器	
53	船木原遺跡	船木	台地	縄文，古墳	石鏃・土器片・成川式	
54	下原遺跡	船木	台地	縄文，古墳	成川式	
55	原畑遺跡	船木	台地	縄文，古墳	成川式	遺物多量採取
56	長松院跡	船木	台地	中世		
57	宮ノ後遺跡	船木東	低地	古墳		
58	北ヶ原遺跡	船木東	低地	古墳，中世	成川式	
59	於天城跡	船木	台地	中世		
60	坪井遺跡	船木	台地	縄文，古墳～中世		
61	坪井遺跡	船木	台地	縄文，古墳～中世		一部於天城跡
62	鷹ノ巣遺跡	船木	台地	古墳		
63	船木の古城跡	船木	台地	中世（室町）		中世山城跡
64	恋ノ巣城跡	船木字城ノ段	丘陵	中世		中世城館跡

第３章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法

１　発掘調査の方法

平成20・21年度の本調査時に設定したグリッドを採用した。グリッドは，平成20・21年度調査時に，国土公共座標値（−121,400，−525,400）を基準に，10m毎に基準杭を設置した（㈱親和技術コンサルタントへ委託）。

グリッド名は基準から北側へ10m毎にＡ，Ｂ，Ｃ…，南側に10m毎にａ，ｂ，ｃ…とし，東側へ10m毎に１，２，３…，西側へ10m毎にア，イ，ウ…と設定した。

平成26・28年度の確認調査範囲は推込分水路より北側部分で，グリッドはＩ～ＢＧ，10～マの範囲である（第６図）。

また，調査地区は平成20・21年度調査のＡ～Ｍ地区から連続して，平成26・28年度の調査区に新たにＮ～Ｙ地区を設定した。Ｅ地区は「中の城」とよばれる曲輪で，曲輪南部はＥ地区として調査済みで現在は残存しておらず，推込分水路となっている。今回の調査範囲となった北部は同じ曲輪であることから地区名を踏襲し，Ｅ’地区とした（Ｅ・Ｅ’地区＝中の城）。

なお，文献資料で記された曲輪名に相当する地区は，Ｓ地区＝松社城，Ｅ’地区＝中の城，Ｐ地区北部＝女中仮屋，Ｖ地区東部曲輪＝八女壇である。

自然地形を生かして築城された特性をもつ山城は，地形そのものが遺跡として重要な価値をもつ。特に虎居城跡は，現在に至るまで，地形の改変をあまり受けておらず，当時の城跡の地形を良好に残している。

このような特性を考慮し，公園整備計画に基づく確認調査では現状保存が前提とし，専門家の意見等を参考にトレンチ調査を実施した。調査では，遺構・遺物の有無や遺構の性格等の把握を行いつつ，地形や土塁等の表面遺構の把握・残存状況の確認を行った。

トレンチ調査は，Ｎ～Ｙ地区の各地区に公園化整備計画に基づく協議で計画した72カ所のトレンチの調査を行うこととした。

平成26年度調査では，39ヶ所のトレンチ，平成28年度調査では31ヶ所のトレンチを設定し，計70トレンチの調査を実施した。当初計画では72カ所のトレンチの調査を実施する予定であったが，調査工程上すべて実施することはできなかった。現状で調査済みは70トレンチで，残り２カ所のトレンチは未調査であるため，今後追加調査が必要である。

各トレンチの遺構・遺物の残存状況や整備計画に必要な層厚等の情報を確認し，遺構の広がりが予測される部分は，トレンチを拡張して遺構の性格を明らかにすることに努めた。

第３表　基本土層

層　位	色 調	内容等	層厚
Ⅰ　層	黒色	表土	10cm
Ⅱ　層	暗茶褐色		20cm
Ⅲ　層	黄橙色	アカホヤ火山灰	20cm+α
Ⅳ　層	灰白～黒色	砂礫層	−
Ⅴ　層	灰白～黒色	入戸火砕流堆積物	−
Ⅵ　層	灰白～黒色	礫混粘質土	−
Ⅶ　層	黒色	阿多火砕流堆積物	−
Ⅷ　層	灰白～黒色	砂礫層	−
Ⅸ　層	灰白～黒色	加久藤火砕流堆積物	−

調査前にはトレンチ設定と地形確認のため，杉や竹等の樹木の伐採，玉切り，運搬，集積の作業や落ち葉・倒木の除去，清掃作業を行った。これらの作業を行うことで新たな微地形が検出され，これまで未確認であった土塁，石塁，窪地，礫の広がり等を確認した。

表面精査後，トレンチを設定した。トレンチは１×10ｍまたは１×５ｍを基本とし，中世遺構面が検出されるまで掘り下げた。調査区内は，地形の起伏が激しく，重機（バックホウ）での表土除去が困難であったため，掘削は表土除去から遺構検出・精査まで人力で行った。

層堆積は地点によって土層堆積状況が異なっていた。そのため，一カ所ですべての基本層序を確認できなかったが，トレンチ毎の堆積状況や包含層の層厚，遺構検出面までの深さ等を記録した。

遺構検出は，基本的にⅢ層上面で行った。公園整備を目的とした現状保存が前提の調査であるため，遺構は基本的に検出までとした。一部の遺構に関しては一部半截，またはサブトレンチを設定して遺構の性格を確認したが，最小限に限った。そのため，すべての遺構の性格を把握するまでには至っていない。

検出された遺構は，写真撮影を行い，配置図の作成，埋土注記を行った。遺物はトレンチごとに出土状況の写真を撮影後，取り上げた。遺物の取り上げは，小破片は層ごとに一括での取り上げを行い，それ以外のものについてはトータルステーションでの点上げを行い，位置情報を記録した。

２　整理作業の方法

遺物の水洗作業は，平成29年度に行い，土器や陶磁器等はブラシで水洗いを行った。

注記は，注記記号「トライ２」を頭に，「トレンチ名」，「層」，「取り上げ番号」を記入した。遺物接合は，トレンチごとに行い，遺物の分類に関しては，時期ごとに選別した。陶磁器等の分類は凡例を参考にされたい。

第６図　トレンチ配置図（１：2500）

第２節　層序

虎居城跡は，中生代の四万十層をベースとした地形と想定され，その上部に約30万年前の加久藤カルデラ噴出物，その上位に阿多カルデラ噴出物，姶良カルデラ噴出物が堆積していることが平成20・21年度調査で確認されている。

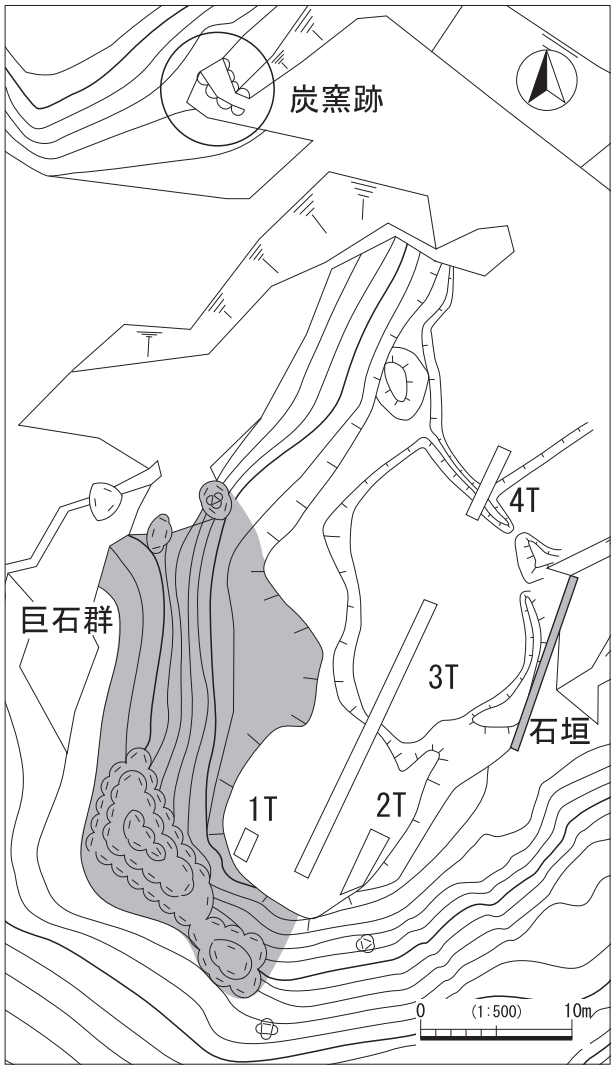
河岸段丘に立地し，多くの谷が入り組んでおり地形的な起伏が激しい。この地形を利用して，城郭内に複数の曲輪を形成している。

層堆積は前述したとおり，地形的な起伏や築城時の造成によって一様ではなく，層序は各曲輪や地点ごとに異なっており，一カ所ですべての層序を確認することができなかった。そのため，基本層位は各地点でみられた層序を参考に時系列的な層序を示す（第３表）。

表土は，基本的にどの地点も10㎝程度であった。現在も残る登路部分については表土が５㎝程度と薄く，表土下５㎝で硬化面やⅢ層，Ⅸ層が検出された。また，地点によって包含層の厚さにばらつき（表土から遺構検出面まで深さが５～180㎝）があることが確認された。 調査で得られた各トレンチの層堆積状況や層厚についての情報は第14表に示している。

なお，Ｑ地区北部・Ｓ地区の一部では，Ⅱ・Ⅲ層の間に砂礫層が確認されたが，自然堆積層ではなく持ち込まれた砂礫の広がりと考えられる（後述）。

表面の精査を行うと，城内の至るところで様々な大きさの円礫が表面に点在していることが明らかになった。平成20・21年度調査時にも円礫の敷石遺構や石列，土塁表面に円礫を張っている例が確認されていることから，点在する円礫は城内で利用されていた可能性が考えられる。



第７図　Ｎ地区トレンチ配置図

第３節　調査の成果

各地区ごとのトレンチ調査の成果を示す。トレンチでの調査成果と表面精査で確認された遺構についてもその詳細について報告する。

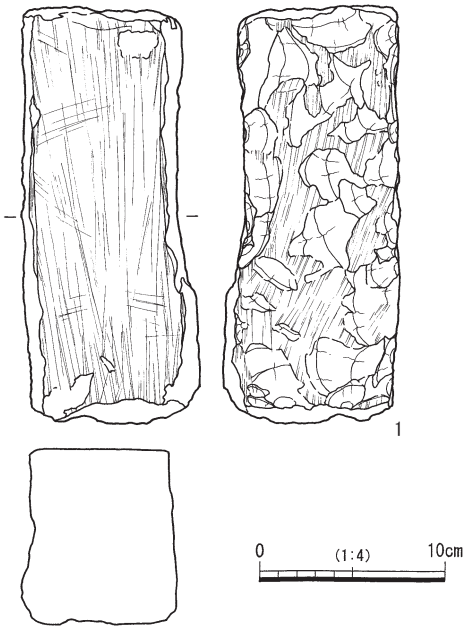
遺物は，調査で出土した中・近世の遺物を中心に報告する。中世遺物のほかには近世遺物や縄文時代早期土器や石器等が少量出土した。

１　Ｎ地区（第７・８図）

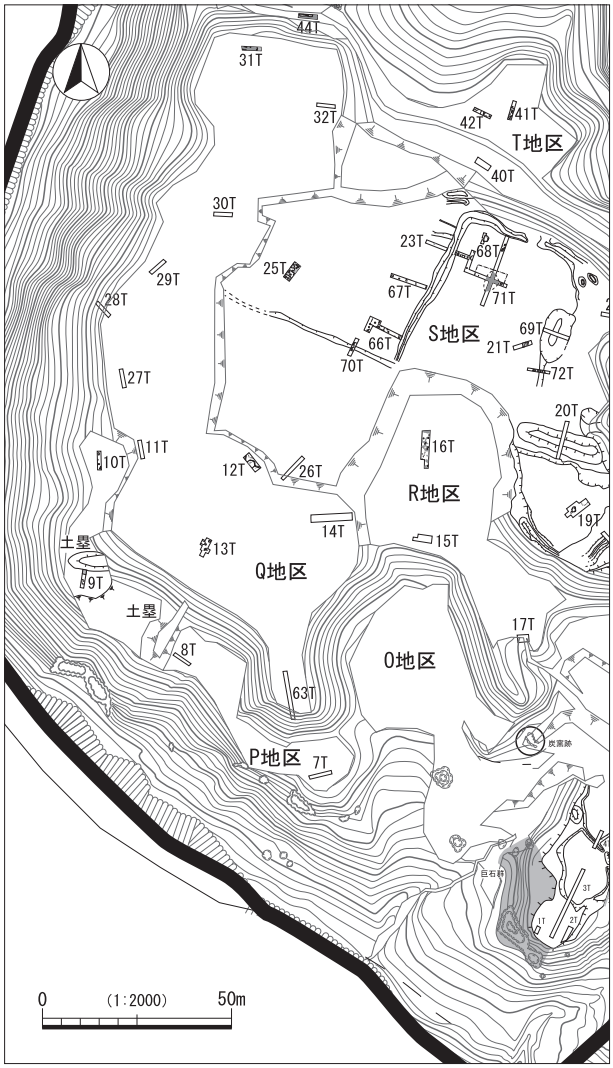
（１）遺構

Ｎ地区は城郭南西部の標高約40mに位置し，川内川に向かって舌状にのびた曲輪である。Ｊ地区と連続している場所でＥ’地点との境の帯曲輪には空堀が延びることが平成20・21年度調査時に想定されている。この帯曲輪から階段状になった細長い帯曲輪（４Ｔ北部）もあり，現在は沼地になっている。

今回の調査では，舌状に延びた曲輪を中心に調査を行った。表面精査したところ，土塁や切石の石垣，微勾



第８図　Ｎ地区出土遺物



第９図　Ｏ・Ｐ・Ｑ地区トレンチ配置図

配が確認された。表面精査後，１～４トレンチを設定した。１トレンチでは表土下40㎝，２・４トレンチでは表土下60㎝，３トレンチでは15㎝下で加久藤カルデラ堆積物（凝灰岩の岩盤層（Ⅸ層））が検出された。いずれのトレンチ内にも遺構は確認されず，遺物は土師器等の小片が少量出土した。

曲輪の側面は切岸で急峻な地形になっており，曲輪の下は登路がある。この登路は，Ｏ地区とＮ地区の曲輪で挟んだ西側から入る虎口となっている。

曲輪側面部には凝灰岩に水平方向に節理が入った巨石群があり，さながら巨石の積石状になっている。石の大きさにばらつきがあるが，一つの石のサイズは約2.3×2.5m，厚さ約１mの方形である。

この積石状になった巨石は，凝灰岩の弱溶結部にフローユニットの横方向の節理が入っている状態である。節理面は弱溶結合部のため脆く，板状の凝灰岩の角は丸く摩滅しているため積石状にみえる（大木氏の御教示による）。また，積石状になっている周辺では，板状になった凝灰岩の巨石が曲輪縁辺部から崩落している状況も確認された。崩落した箇所も考慮すると，この曲輪の側面は，存城時には凝灰岩の岩盤層が剥き出しになっており，自然の摂理によって巨大な積石状に見えていたと想定される。

以上のことから，この曲輪は露出した凝灰岩を意識して曲輪を形成されたと想定される。なお，Ｋ地区では凝灰岩の石切場（18～20世紀前半）が，Ｎ地区の標高とほぼ同レベルで（標高35～40m），３カ所検出されている。

また曲輪の東縁辺部には，凝灰岩の割石の石垣が確認された。石垣は５段組で幅6.8m，高さ1.6mが残存していた。現存箇所から北東部分は崩落しており，崩落部分も合わせると石垣は全長約15mで曲輪の縁辺部に沿っていたことが確認された。石垣の裏込の栗石は少量であり，割石の成形法や石積みの工法から近世段階のものと想定される。

（２）遺物（第８図）

１は表面精査時に発見された砥石（砂岩製）である。擦痕は上・下面の２面あるが，下面は擦痕面に複数の敲打痕と錆の付着がみられることから，金床石として再利用された可能性がある。側面は成形時の鑿跡がみられる。

２　Ｏ地区　（第９図）

標高約42mに位置する曲輪である。Ｎ地区とＯ地区の間は現在も登路となっており，登路のＯ地区側には石組みの炭窯跡（近代）がある。

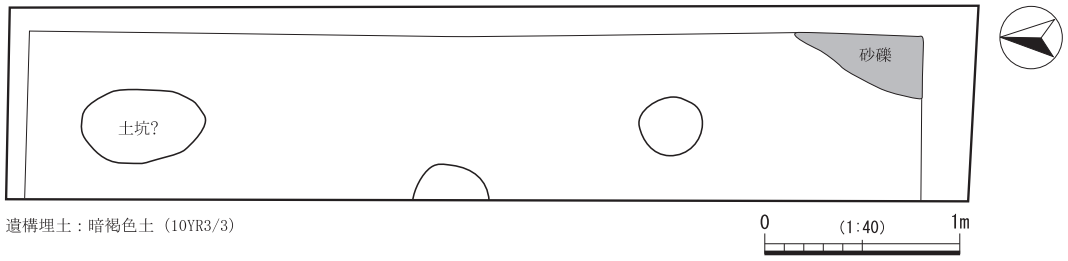
Ｏ地区は一部桝形を成しており，南側には川内川に向かって舌状の延びた空間が，北側には谷状地形に囲まれた半円形の平坦面が広がる。この半円形の平坦面は，谷状地形を利用してＳ地区～Ｒ地区～Ｏ地区と階段状に曲輪を形成されていることから，本地区はＳ地区の腰曲輪的役割をもつ曲輪であったと考えられる。なお，この地区には調査工程上，トレンチが設定できなかったため，追加調査が必要である。

３　Ｐ地区（第10 ～ 12図）

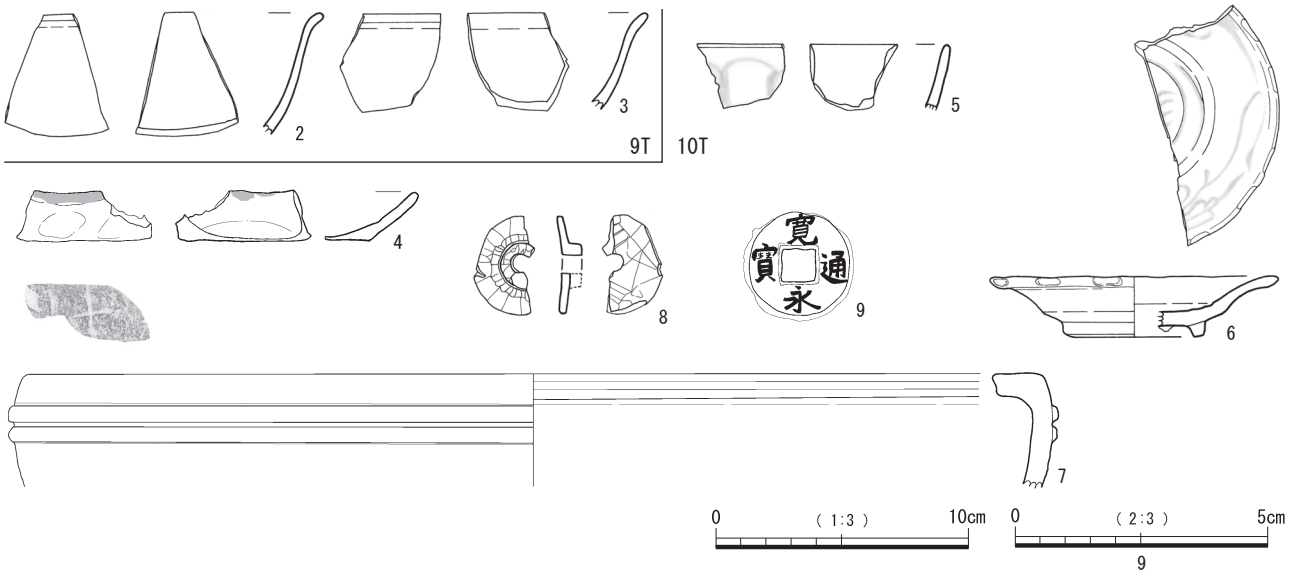
Ｐ地区は城域の中央西部端に位置する帯曲輪である。曲輪西側のＸ地区は自然の切岸になっており，北側に向かって（Ｑ地区）次第に標高が高くなる地形である。また，Ｏ地区から地形的に連続しており，大小の土塁が２つあり，平坦面が少なく起伏に富んでいる。

曲輪の中央部には曲輪を東西に仕切る大規模な土塁があり，南西側からの侵入を遮断している。土塁南側の標高は約44mで，土塁の北側は急峻な切岸（標高差約５m）になっている。切岸を上がると曲輪を仕切る小規模の土塁がある。

第 10 図　Ｐ地区９トレンチ遺構配置図



第 11 図　Ｐ地区 10 トレンチ遺構配置図



第 12 図　Ｐ地区９・10 トレンチ出土遺物

（１）遺構（第 10・11 図）

地形と土塁を考慮し，４カ所のトレンチ（７～10Ｔ）を設定した。大規模な土塁の南側には７・８トレンチを設定した。７トレンチでは，表土下約５㎝でⅢ層が検出されたが，遺物・遺構は確認されなかった。８トレンチでは表土から青花の小片等の遺物が少量出土したが，遺構は確認されなかった。

土塁北側の急岐な切岸を上がった先にある小規模の土塁に対して垂直方向に９トレンチを設定した。９トレンチでは，Ⅲ層上面で土塁に並行する溝状遺構と思われるプランと少量の散礫を検出した。

10トレンチは，最も標高が高いＱ地区との境に位置する狭い平坦面に設定した。Ⅱ層（包含層）が約160㎝と非常に厚く，遺構検出面（Ⅲ層）までは表土から約200㎝であった。Ⅲ層上面で土坑跡・ピット等のプランを検出した。また，砂層の広がりも一部確認した。Ⅱ層上面からは近世遺物が混在しているが，Ⅱ層中～下部は中世相当の遺物が出土した。

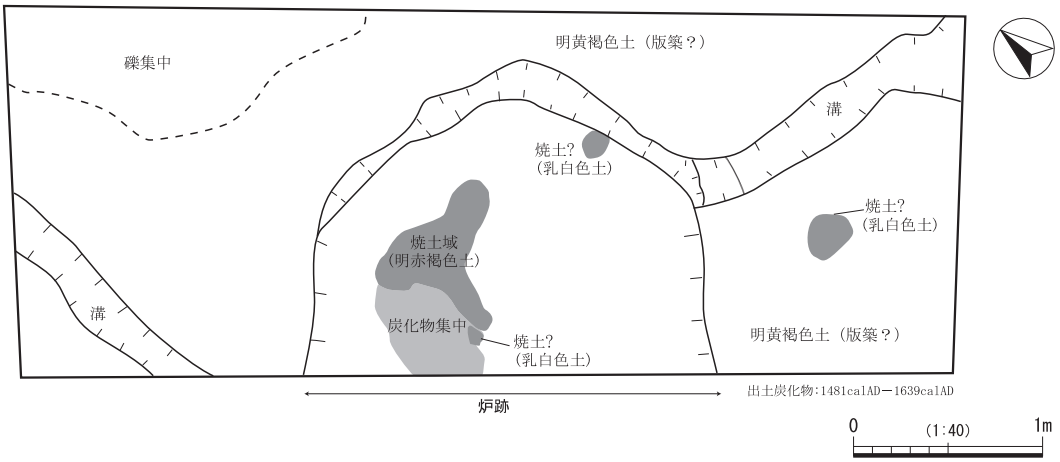
（２）遺物（第 12 図）

７・８トレンチの出土遺物は少量・小片のため，図化できなかった。

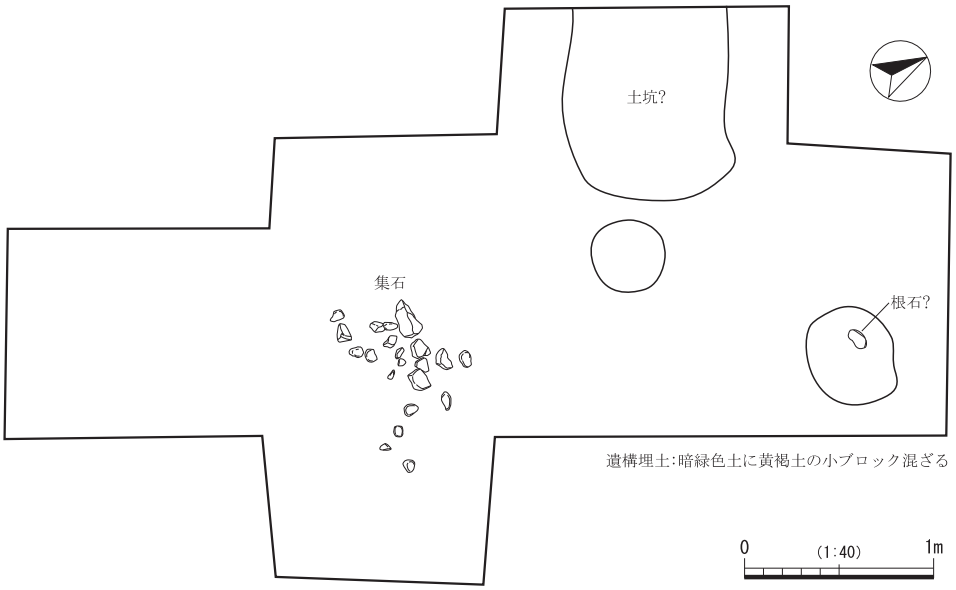
９Ｔ　２・３は口縁部が外反する上田Ｄ類に比定される青磁碗である。

10Ｔ　４は土師器の皿である。外面には指頭圧痕を残す。底部は薄く，糸切り底である。口唇部に縁状に煤が付着している（灯明皿か）。５・６は青磁である。５は線描蓮弁文をもつ上田Ｂ類に比定される碗である。

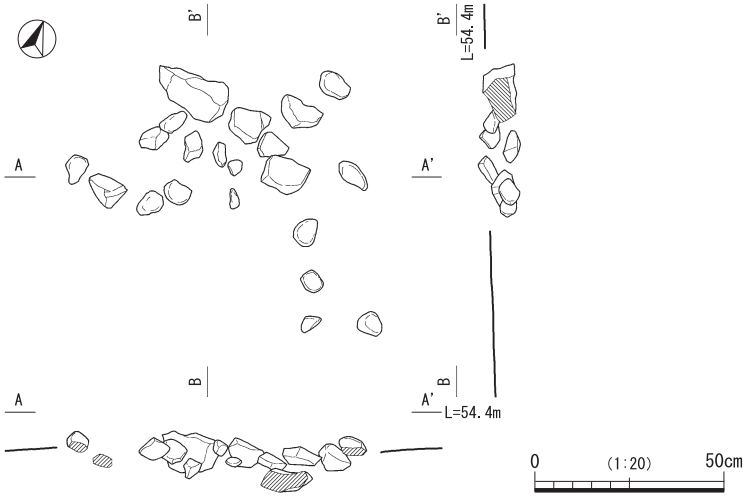
６は稜花皿で，内面にはヘラ描きの花文をもつ。



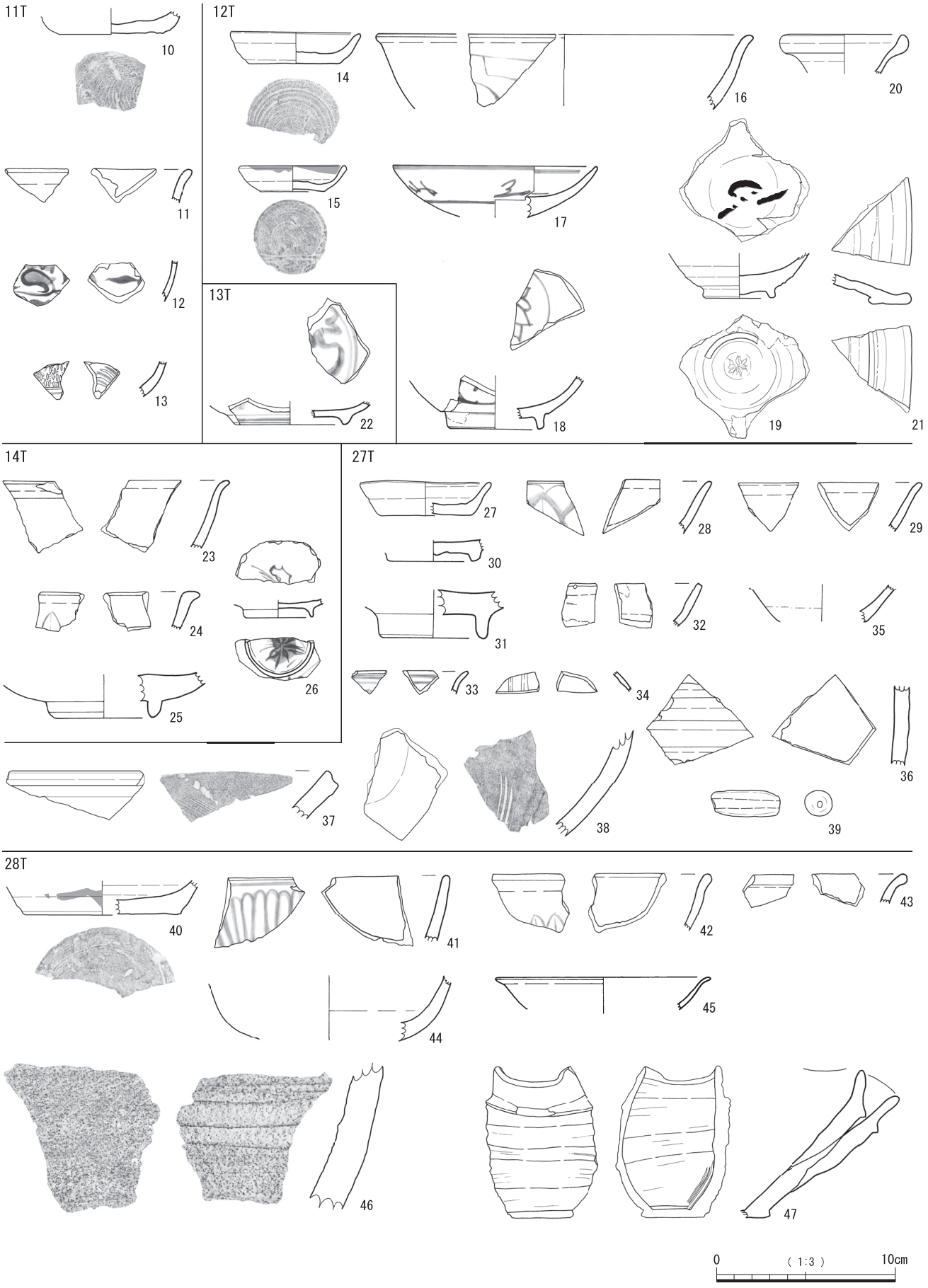
第 13 図　Q地区 12 トレンチ遺構配置図



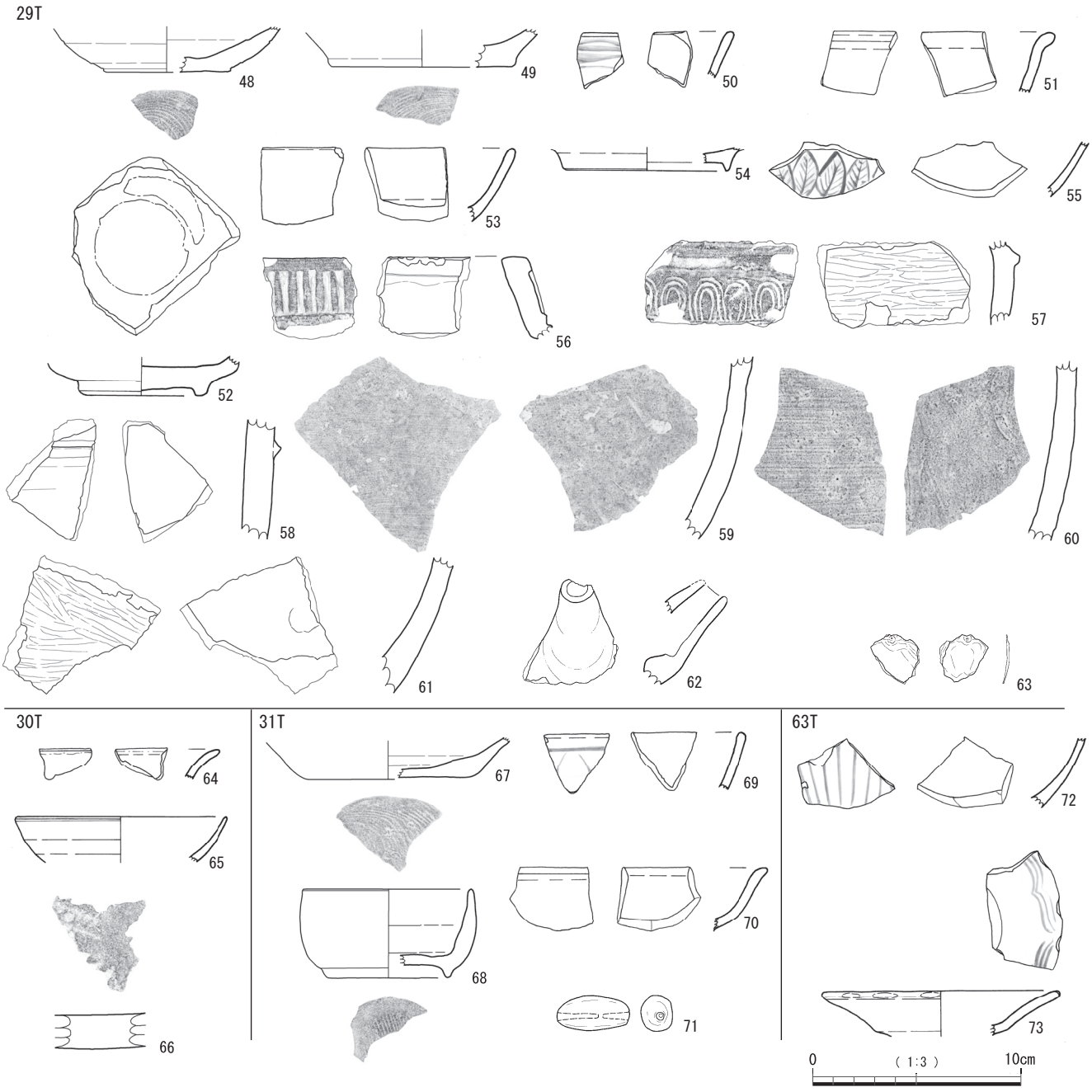
第 14 図　Q地区 13 トレンチ遺構配置図



第 15 図　Q地区 13 トレンチ集石



第 16 図　Q地区トレンチ出土遺物①（11 ～ 14・27・28 T）



第17図　Q地区トレンチ出土遺物②（29～31・63 T）

7は瓦質土器の火鉢である。口縁部は内面にL字状に曲がり，胴部上半に2条の突帯を持つ。焼成は甘く，色調は橙黄色を呈す。8は滑石製品で，紡錘車のように円形を成し，中央部には穿孔をもつ。9は寛永通宝で，表面の摩滅が著しい。背面は無文である。

4　Q地区（女中仮屋）（第 13 ～ 19 図）

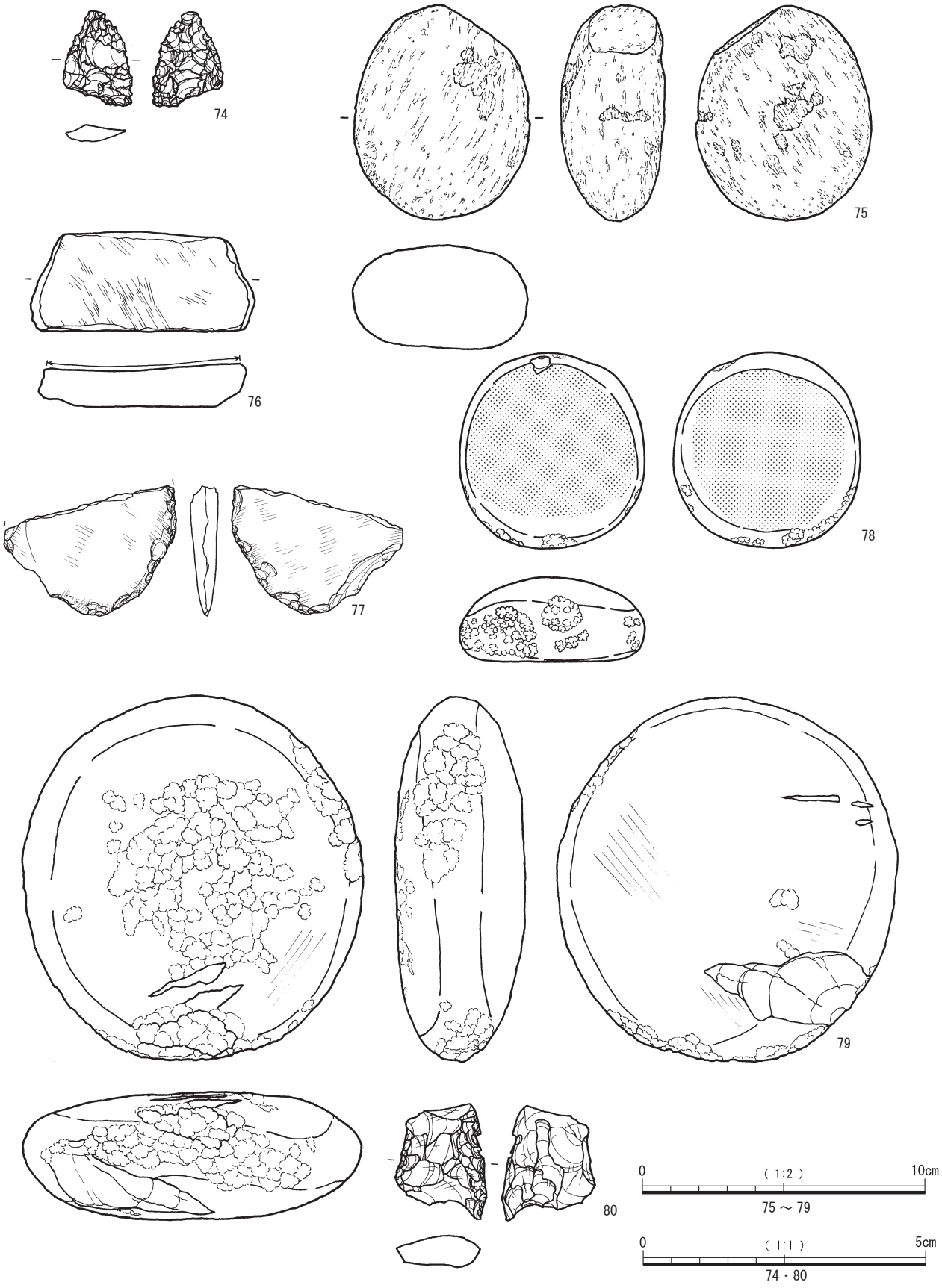
（1）遺構（第 13 ～ 15・19 図）

S地区（松社城）の西側を囲む曲輪である。S地区の腰曲輪で，平坦面が南北に続き，表面積約7300㎡の広大な面積をもつ。表面精査で曲輪内を分割するような微勾配を検出しており，少なくとも3カ所の空間が構成されたと考えられる。特に北側に位置する空間は「女中仮屋」に相当する場所である。

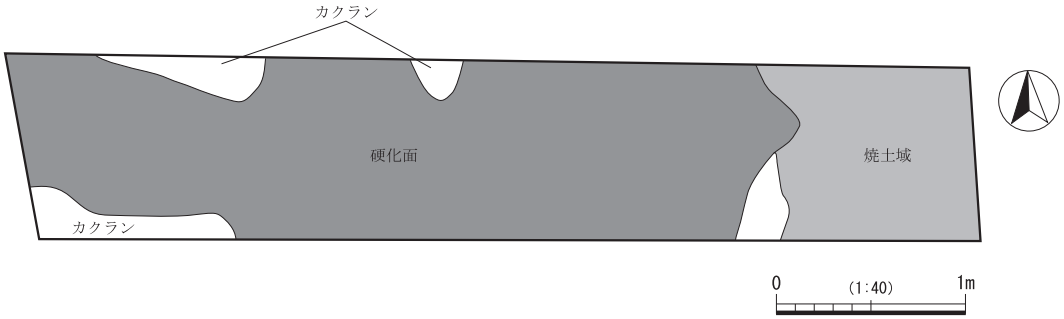
Q地区は標高約55mで，他の曲輪と比べ包含層が非常に厚く，遺物出土量が最も多い地区であった。

曲輪内の各空間に11カ所（11～14・27～32・63T）トレンチを設定した。曲輪南側は川内川に向かって舌状に延びる空間があり，この地点に63トレンチを設定した。Ⅲ層上面で遺構検出を試みたが，遺構は確認されなかった。また，63トレンチ東側の曲輪端部には表面に拳大の円礫を張った低い小規模の土塁が確認された。

曲輪南側に広がる空間には，11～14トレンチを設定し



第 18 図　Q地区トレンチ出土遺物③（石器）



第 19 図　Q地区 31 トレンチ遺構配置図

た。11トレンチでは遺構は確認されなかったが，遺物は多く出土した。12トレンチはＳ地区の境に並行するように設定した。Ⅲ層上面で楕円状の掘り込みをもつカマド状遺構（炉跡）と溝状遺構が検出された。

炉跡の上部の溝は壁帯溝のようになっており，礫が組まれていた可能性がある。炉跡内埋土には炭化物を多く含んでいた。炉跡の出土炭化物は「1481calAD-1639calAD」という年代測定結果が得られている　（第４章に詳細）。

炉跡はトレンチ外にも広がるため規模は不明だが，鉄滓や土師器皿を転用した坩堝が出土しており，小鍛冶関連遺構と考えられる。

13トレンチではⅢ層上面で集石や土坑・ピットが検出された。北側のピットには根石もしくは礎石と思われる礫が検出された。南側の集石は安山岩の礫で構成され，被熱痕がみられた。14トレンチではⅡ層から遺物が出土したが，遺構は確認されなかった。

27～30トレンチは曲輪中央部に設定した。いずれのトレンチもⅡ層が約150㎝と厚く，多量の遺物が出土した。Ⅱ層には焼土や炭化物がトレンチ全面に広がっていたが，範囲までは確認できなかった。炉跡等の可能性が想定される。出土炭化物の年代測定の結果は27トレンチが「1275cal－1307calAD」，28トレンチは「1436－1496calAD」であった（詳細は第４章）。

27トレンチでは15～16世紀代の遺物とともに，鎬蓮弁文の青磁碗（大宰府Ⅱ類）や口禿の白磁皿（大宰府Ⅸ類）が出土しており，他と比べやや古い傾向がみられた。

30トレンチ近くでは，Ｓ地区のコの字状の虎口と思われる場所を境に，僅かな段差が確認された。この段差は曲輪を分断するラインと想定される。北側が僅かに低くなり，この低くなった空間が「女中仮屋」と想定される。この地点に31・32トレンチを設定した。

31トレンチは他のトレンチと比べてⅡ層はやや薄く（約50㎝），Ⅲ層上面で硬化面と焼土域が検出された。

32トレンチでは遺物出土はなく，Ⅲ層上面に砂礫層が検出された。砂礫層の礫は，円礫の大きさにばらつきがみられた。この砂礫層は32トレンチとＳ地区の一部でしか確認されておらず，自然堆積層の可能性は低い。また32トレンチ周辺では，Ｓ地点の縁辺部に円礫の敷石の広がりを確認した。詳細な性格についてはさらなる調査が必要だが，人工的な敷石（装飾？）の可能性も指摘しておきたい。

なお，31・32トレンチ付近に相当する「女中仮屋」では銀の簪が出土したという記録がある（三木 1982）。

（２）遺物（第 16 ～ 18 図）

11Ｔ　10は土師器の皿，11は上田Ｄ類に比定される青磁碗である。12は赤絵の皿の胴部で緑釉の施文がみられる。13は李朝の朝鮮陶器で胎土が灰白色，内外面に白・黒象嵌の文様が描かれる。

12Ｔ　14･15は土師器の皿で，15は内面に煤が付着する。16は青磁碗である。端反で外面には雷文と蓮弁文と思われる文様をもつ。17・18は漳州窯系の青花である。いずれも胎土は淡黄色で黒色粒を含んでいる。17は小野Ｃ群に比定される皿であり，18は碗の高台で白濁した釉が施釉される。

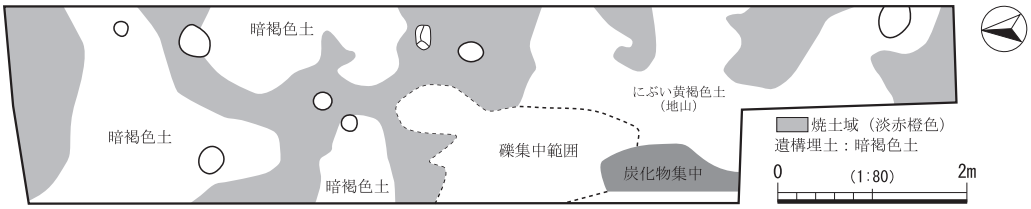
19～21は近世陶器である。19は唐津焼の碗で，腰部から高台は露胎し，施釉箇所には白濁した釉が厚くかかる。20は薩摩焼の小形の瓶（徳利）で鉄釉が内外面に施釉される。21は蓋で端部のみに褐釉が施釉され，残りは露胎する。

13Ｔ　22は小野Ｄ群に比定される青花の皿である。畳付には砂粒が付着している。

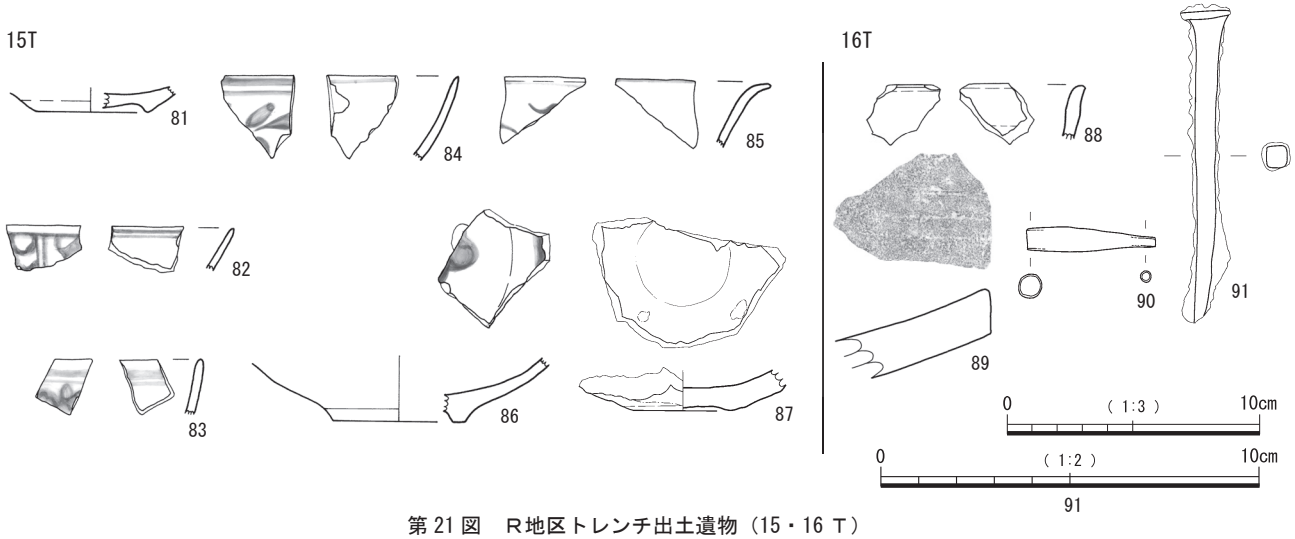
14Ｔ　23～25は青磁である。23・25は碗で，24は外面に蓮弁文をもつ坏である。内面見込みは輪状に掻き取られている。26は肥前系の皿で高台内面にも透明釉が施釉される。胎土には黒色粒を含む。

27Ｔ　27は土師器の皿である。28～31は青磁の碗である。28は鎬蓮弁文の碗（大宰府Ⅱ類）で，29は無文で口縁部が外反する。30・31は碗の高台であり，畳付から高台内面は露胎する。31は15世紀以降のもので，高台内面が輪状に露胎しており，露胎部分には赤色顔料の付着がみられる。

32は森田Ｄ群に比定される白磁の多角坏である。33は



第 20 図　R地区 16 トレンチ遺構配置図



第 21 図　R地区トレンチ出土遺物（15・16 T）

赤絵の皿である。34は型作りの瑠璃釉の蓋で，内面は露胎する。35は天目碗の腰部である。鉄釉が施釉され，腰部下面は露胎する。36は中国陶器の壺の胴部で，外面には褐釉が施釉される。全体的に摩滅している。

37・38は瓦質土器である。37は捏鉢または摺鉢の口縁部で，口唇部が凹む。灰白色を呈し，硬質である。内面には斜方向のハケメがみられるが，内面上面はハケメをナデ消す。38は肥前系の擂鉢の注口部である。淡黄橙色を呈し，やや硬質である。39は土錘である。

28Ｔ　40は土師器の坏で，外面胴部に煤が付着する。

41～44は青磁である。41は上田Ｂ類に比定される細描蓮弁文の碗である。42・43は坏である。42は丸彫の蓮弁文をもつ坏である。44は15Ｃ以降の碗の腰部で，内外面ともに無文である。釉は厚く施釉される。45は森田Ｅ群に比定される白磁の皿である。

46は中国陶器大甕の胴部である。外面には鉄釉，内面は露胎し，横方向のケズリ出し痕が明瞭に残る。胎土が非常に粗く，φ１～２㎜大の石英や黒色鉱物を多く含む。47は備前の擂鉢の注口部である。口縁部上半の内外面に自然釉がかかる。

29Ｔ　48・49は土師器の坏である。糸切り底で胎土には火山ガラスを多く含む。50～53は青磁で，50～52は碗，53は内湾する坏である。50は片彫の草花文をもち，51は上田Ｄ類に比定される外反する碗である。53は内面見込みの釉を輪状に掻きとっており，目跡が残る。

54は森田Ｄ群に比定される白磁皿で畳付の釉は掻きとられている。55は漳州窯系の青花碗で，芭蕉文が描かれる。56～59は瓦質土器の風炉または火鉢である。56は褐色を呈し，硬質で格子のスタンプ文をもつ。口唇部から外面はミガキが施される。57は蓮弁のスタンプ文の下に突帯を１条もつ。内面および割口にタール状の煤が付着している。58は火鉢である。59は内外面ともにイブシており，内面はナデ調整，外面はミガキで調整される。

60は中国陶器の壺である。φ１㎜大の石英などを多く含む。61は備前の甕である。外面にはヨコナデ痕を明瞭に残す。62は薩摩焼の水差の注口部である。

63はヤコウガイと思われる貝片である。

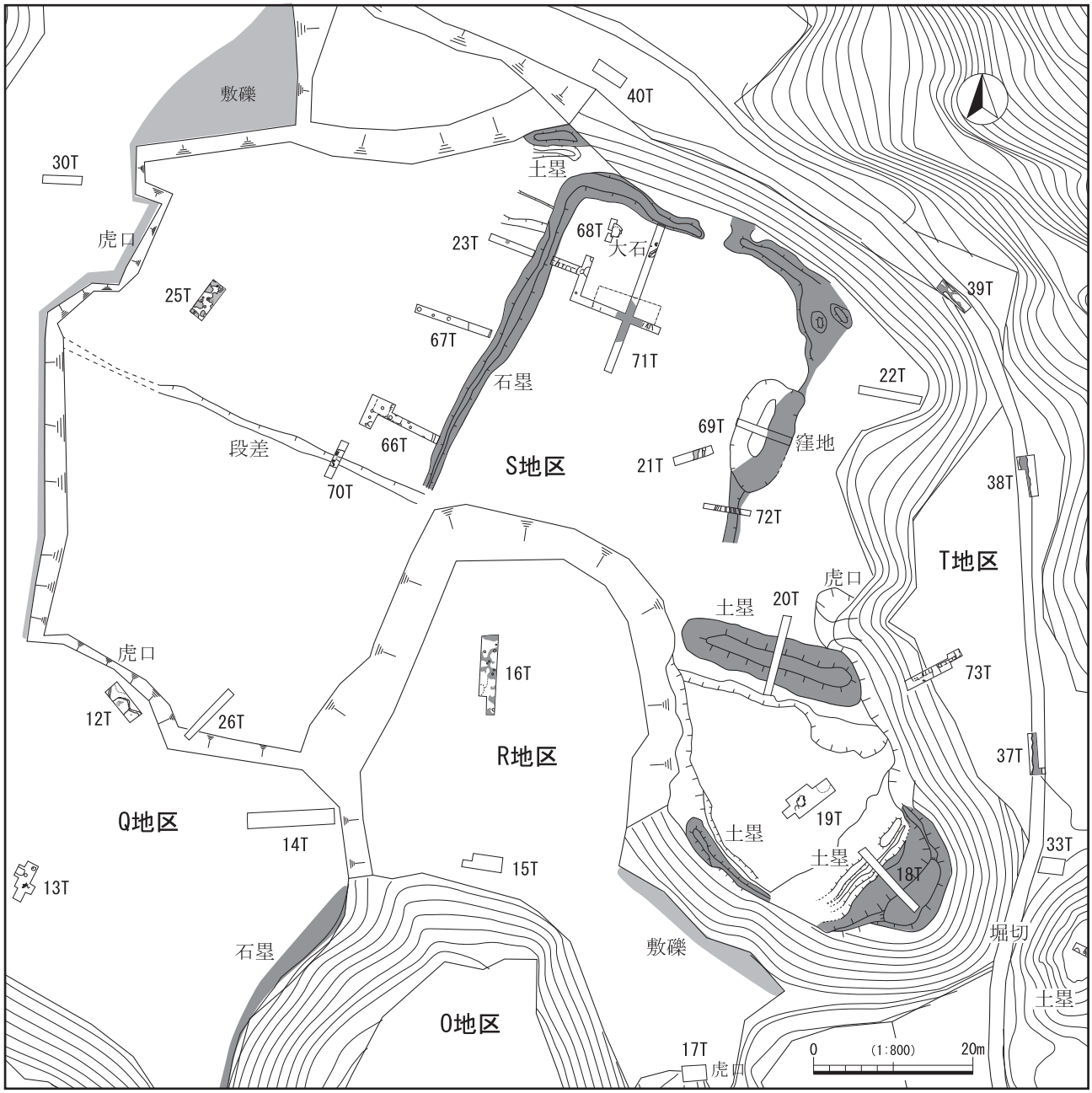
30Ｔ　64・65は白磁の皿である。64は口禿の皿（大宰府Ⅸ類）で，65は森田Ｅ群に比定される内湾する皿である。66 は平瓦である。ナデ調整で，焼成は甘く，やや土師質である。

31Ｔ　67は土師器の坏である。68は瓦質土器だが，やや土師質で高台をもち埦形を呈す。高台内面にはハケメ痕が残る。69・70は青磁である。69は線描蓮弁文をもつ上田Ｂ類に比定される碗である。70は坏である。71は土錘で，穿孔が貫通していない。

63Ｔ　72・73は青磁である。72は線描蓮弁文をもつ上田Ｂ類に比定される碗である。73は稜花皿である。

石器

74は11Ｔ出土の黒曜石製の打製石鏃である。75は12Ｔ出土の軽石製の磨石である。76・77は27Ｔから出土した。76は天草砥石で，磨面が使用により中央部が凹んでいる。



第 22 図　S 地区トレンチ配置図

77は打製石斧の刃部である。78は28トレンチ出土の凝灰岩製の磨石で，両面とも使用しており，側面には敲打痕がみられる。79・80は29トレンチから出土した。79は凝灰岩の叩石で，敲打痕が正面・側面にみられる。80は黒曜石製の調整剥片である。

5　R地区（第 20・21 図）

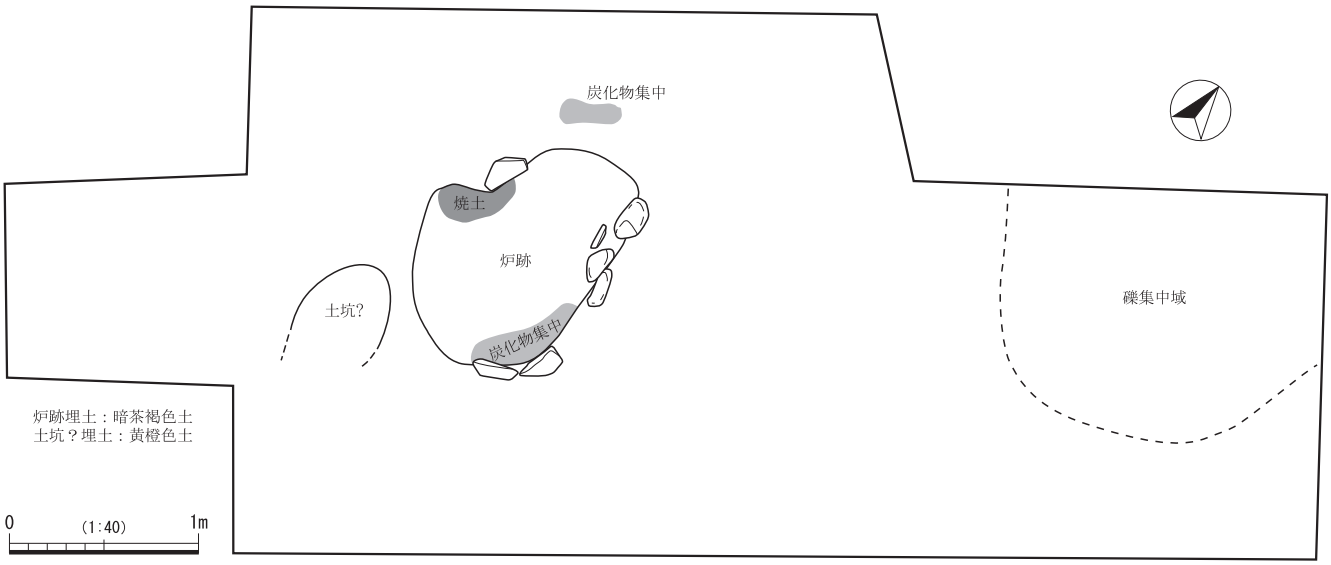
（1）遺構（第 20 図）

谷状地形を階段状に形成した半円形の曲輪で，S 地区（松社城）の腰曲輪に相当する曲輪である。

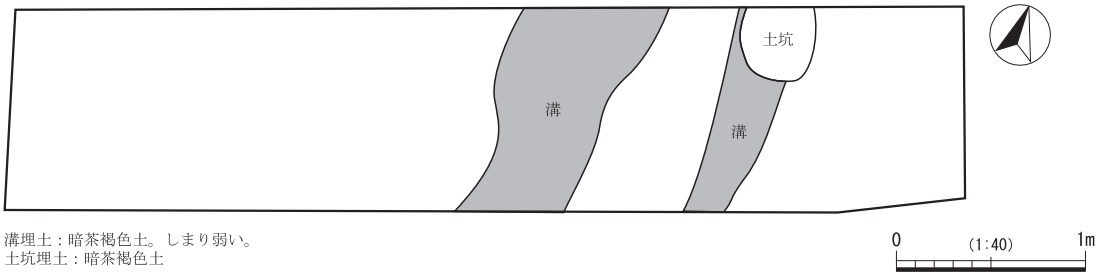
O地区との標高差は約９ｍ，S 地区との標高差は約５ｍである。

曲輪中央部が括れたひょうたん形を成しており，南側には虎口（枡形）がある。また虎口から曲輪に入って東側のS 地区曲輪側壁には表面に円礫の広がりが確認された。これは，曲輪縁辺部に敷石・張石をしていた，もしくは直上にあるS 地区の土塁の張石が崩落したものと想定される。この場所の全面精査は行えなかったため，今後調査が必要である。

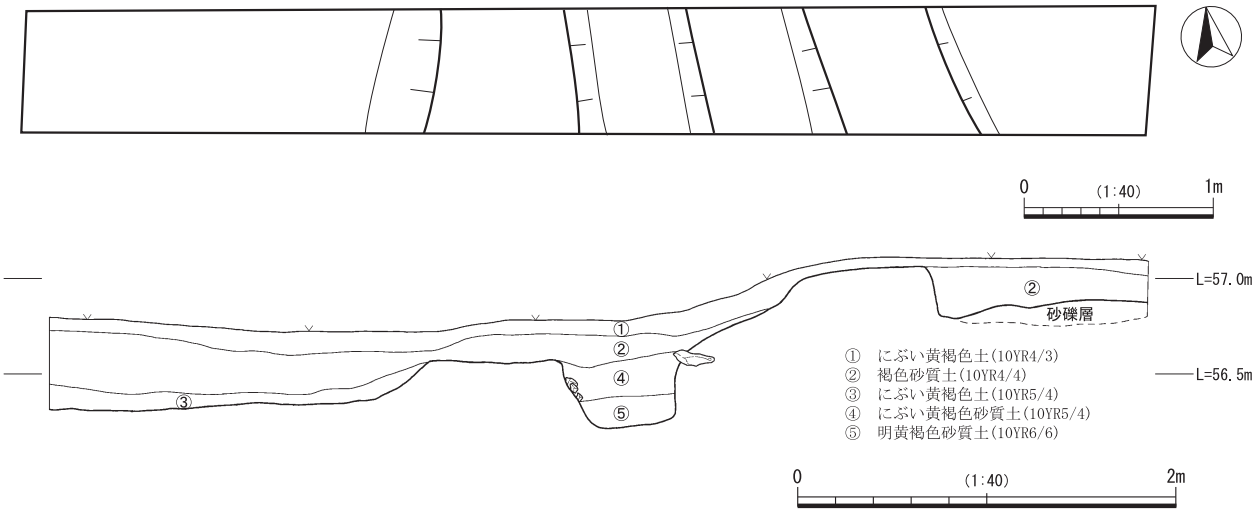
この地区には15～17トレンチを設定した。16トレンチでは，Ⅲ層上面で焼土域・炭化物の広がりを確認した。拳大の円礫が集中している場所もあり，炉跡の一部と考えられる。17トレンチは桝形の虎口に設定したが，遺構・遺物等は確認されなかった。



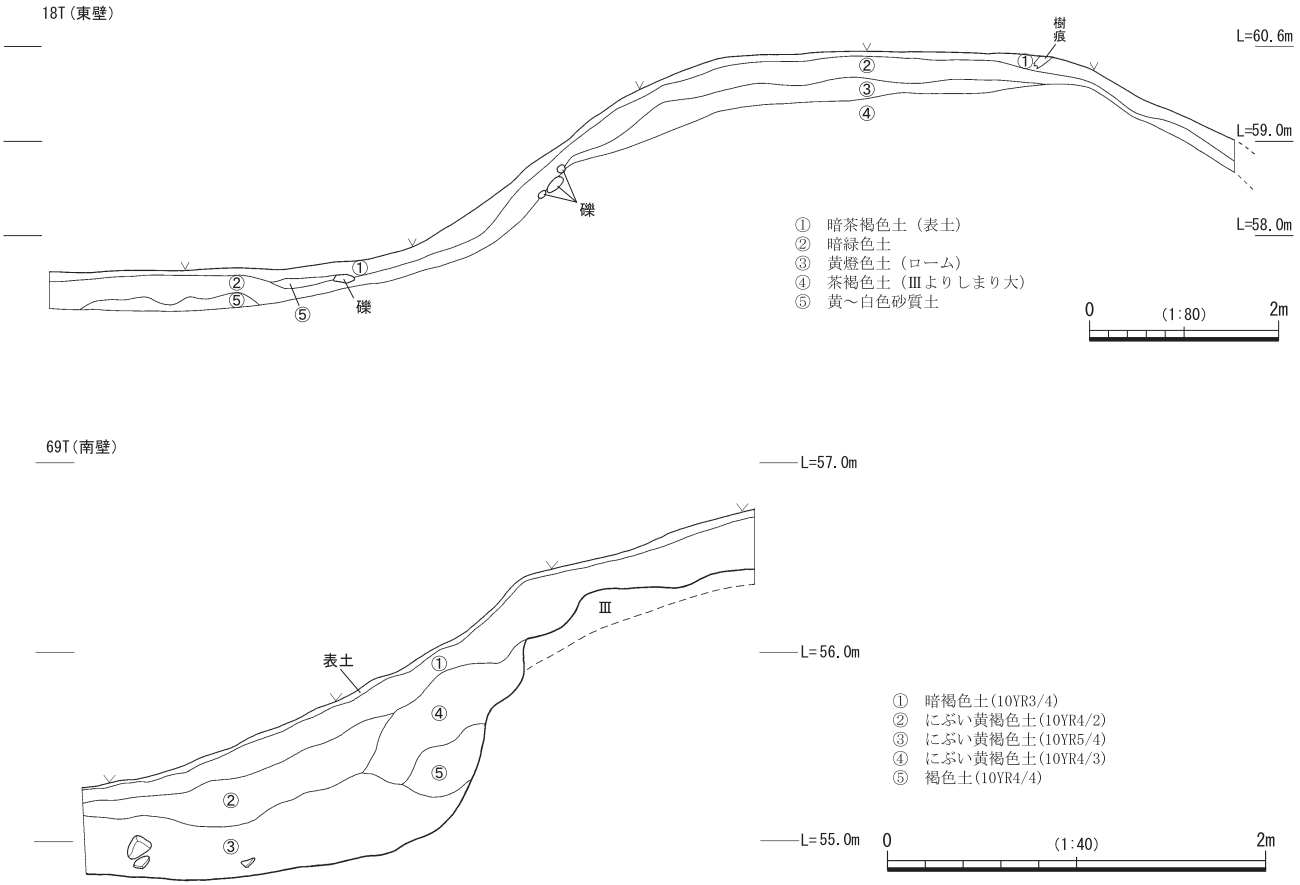
第 23 図　S 地区 19 トレンチ遺構配置図



第 24 図　S 地区 21 トレンチ遺構配置図



第 25 図　S 地区 72 トレンチ遺構配置図・土層断面図（北壁）



第 26 図　S地区 18（土塁）・69（窪地）トレンチ土層断面図

（２）遺物（第 21 図）

15Ｔ　81は碁笥底の青磁皿である。内面見込みは，赤色化している。また外面には釉薬膨れがみられる。82～86は青花である。82～84は，口縁部が直口する小野Ｃ・Ｄ群に比定される碗である。85は小野Ｂ群に比定される碗である。87は肥前系の碗で，透明釉が厚く施釉され，畳付は露胎する。

16Ｔ　88は青磁の碗である。釉が厚く施釉される。89は平瓦で，縄目が僅かに残る。表面は燻され，黒色を呈す。90は青銅製の煙管の吸口，91は鉄釘である。

６　S地区（松社城）（第 22 ～ 38 図）

（１）遺構（第 22 ～ 33，35 図）

Ｓ地区は標高約57ｍの虎居城跡の主郭とされる曲輪であり，『宮之城記』で記された「松社城」に相当する。馬蹄形を呈し，表面積約9000㎡と虎居城において最も広大な面積をもつ曲輪である。

Ｓ地区は全面精査を行い，15カ所のトレンチ（18～26，66～72Ｔ）を設定した。トレンチ調査に際し，Ｓ地区を全面精査したところ，表面の微勾配や土塁等の表面遺構を確認した。

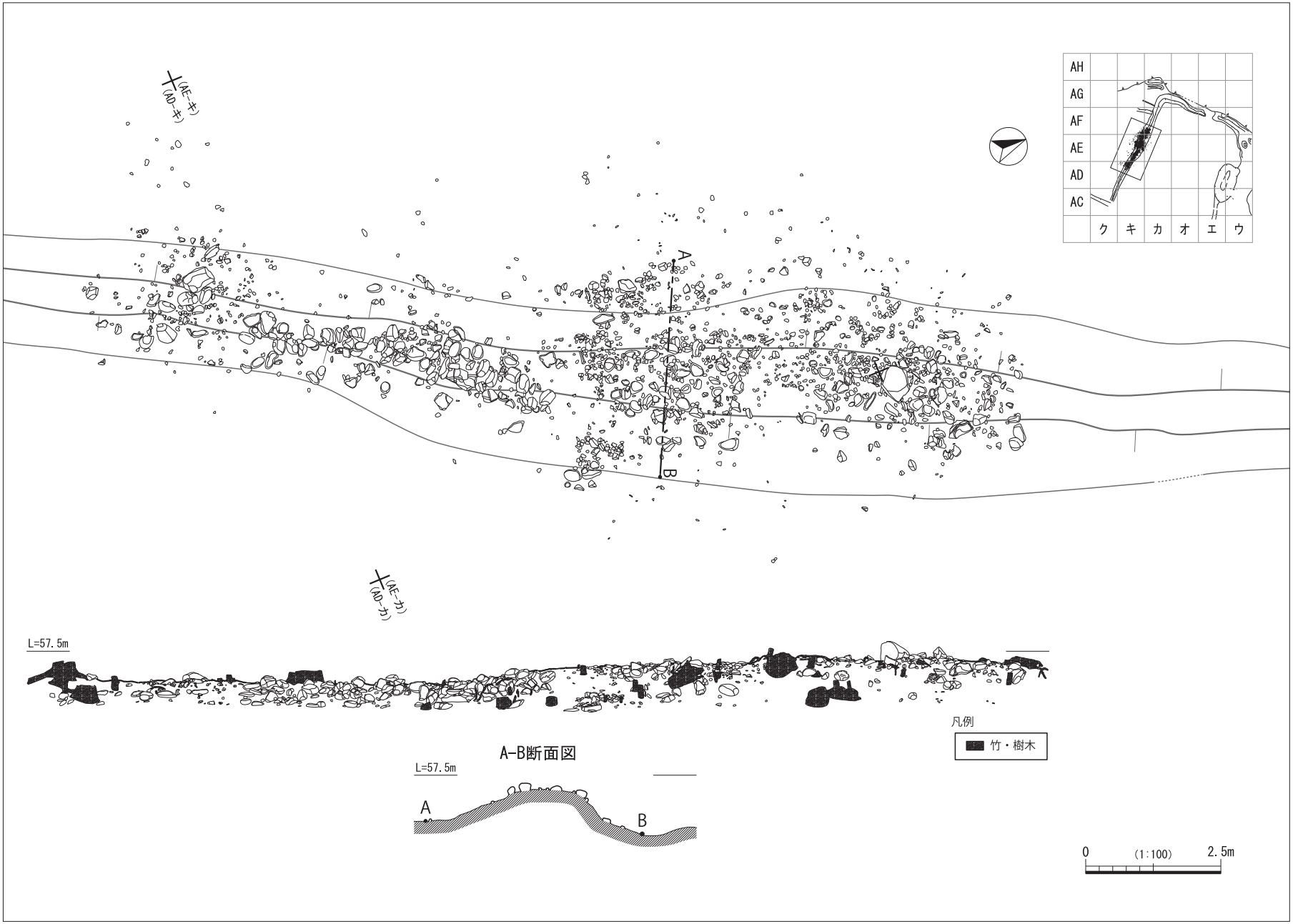
曲輪南部には南端部に大規模な土塁と曲輪西辺に沿った土塁（倒木により一部崩壊），桝形の虎口南側に曲輪を東西に分断する３つの土塁が確認された。さらに，馬蹄形の曲輪の中心にはコの字形の土塁の表面に円礫を葺いた石塁，北部には曲輪縁端部に小規模の土塁があり，曲輪内に土塁４基と石塁１基があることが明らかになった。

また，コの字形の石塁と石塁と一体化した窪地が確認された。これまでも石塁や窪地の存在自体は確認されていたが（三木 1982 ほか），全体像は未確認の状態であった。今回の調査で石塁はコの字形を呈すること，窪地は幅約10×５ｍ，深さ約1.5ｍの規模であることが明らかとなった。さらに，石塁の北角付近には約170×100㎝の大石と，その周辺に約60～80㎝大の石があることが確認された。

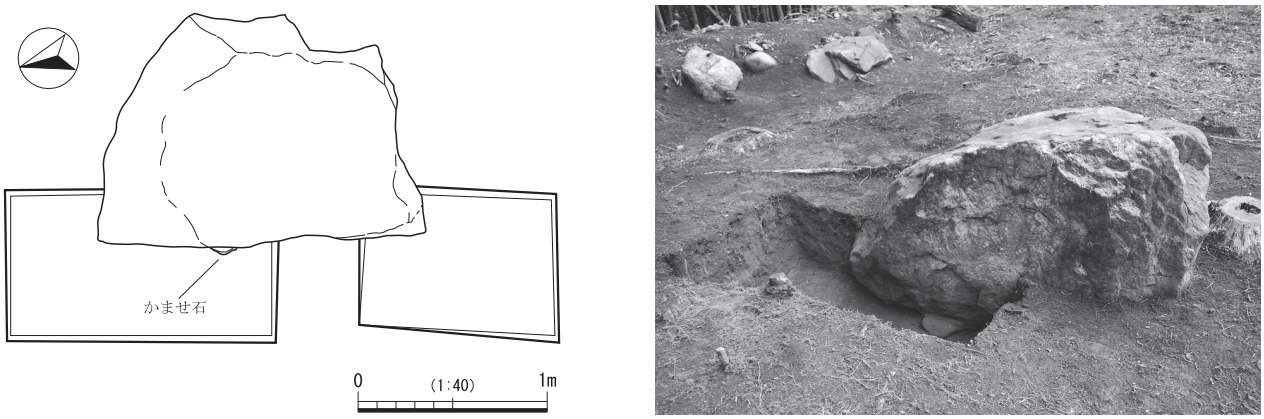
また，曲輪西側には曲輪を南北に区切るように微勾配（段差）があり，曲輪北部が他と比べ少し高くなっていた。この微勾配はコの字形の石塁や土塁の曲輪内の配置状況からみると，曲輪を仕切るものであった可能性が考えられる（後述）。

ア　土塁（第 23・26 図）

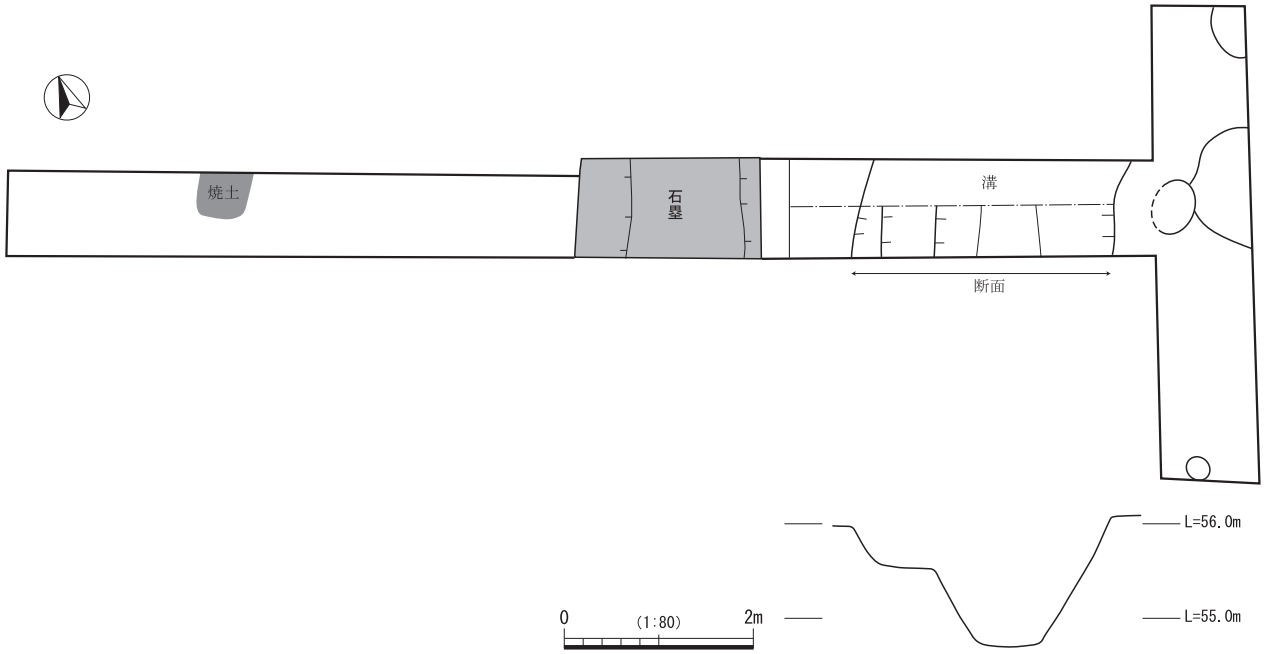
Ｃ地区（塩の城）やＥ地区（中の城）の曲輪南側にも土塁や空堀が配置されており，陸続きの東・南からの


(AE-キ)
(AD-キ)
A
B
(AE-カ)
(AD-カ)
AH
AG
AF
AE
AD
AC
ク
キ
カ
オ
エ
ウ
L=57.5m
凡例
竹・樹木
A-B断面図
L=57.5m
A
B
0
(1:100)
2.5m

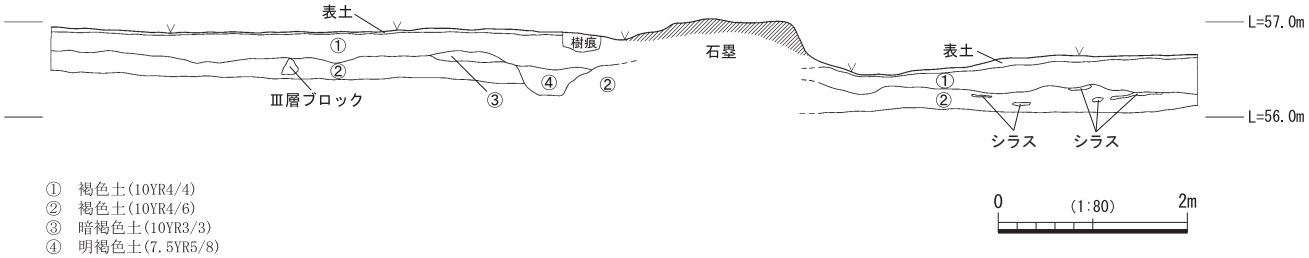
第 27 図　S 地区石塁



第 28 図　S地区 68 トレンチ大石・かませ石（右写真：大石奥にも石組がみられる）

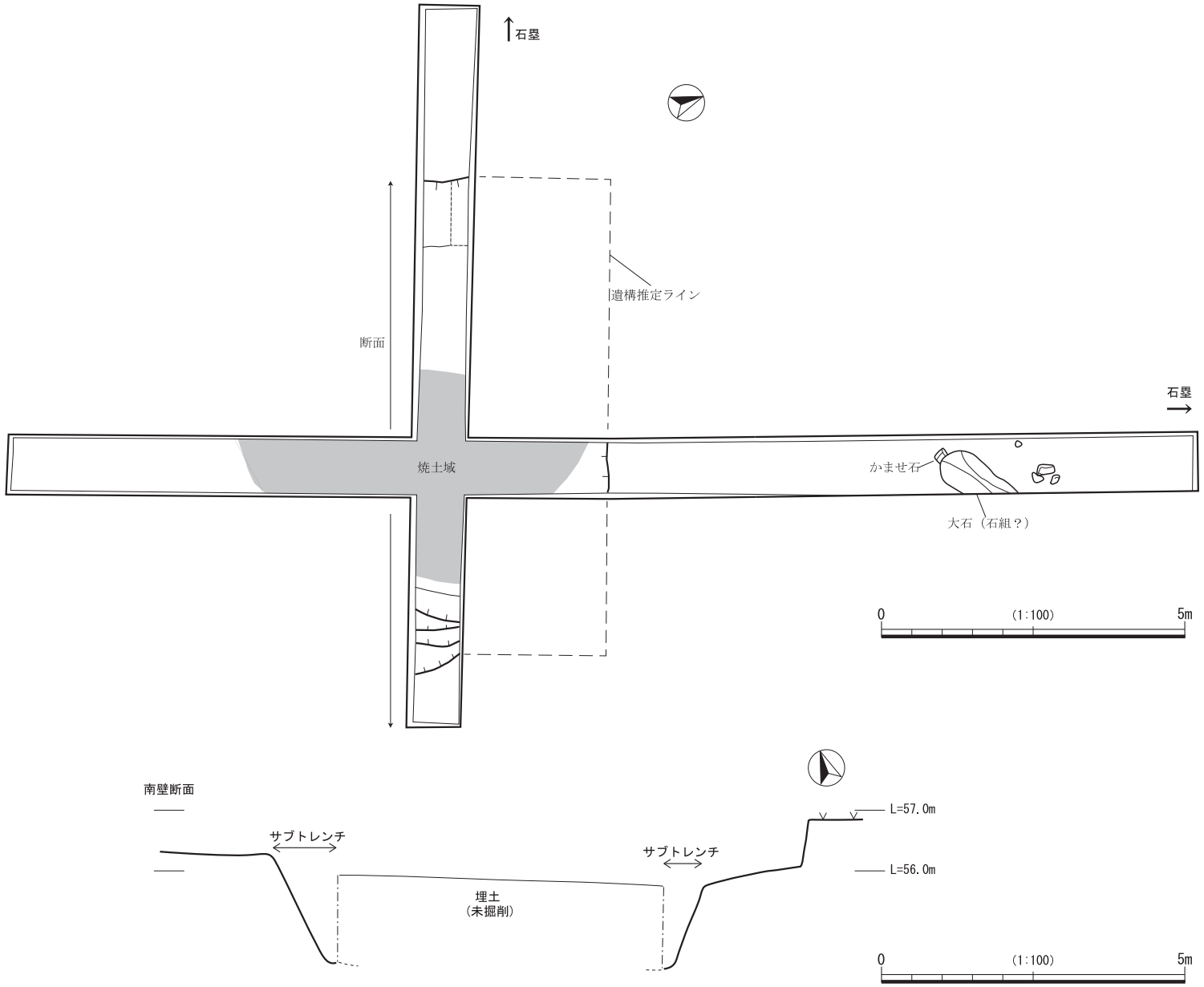


第 29 図　S地区 23 トレンチ遺構配置図・溝状遺構断面図

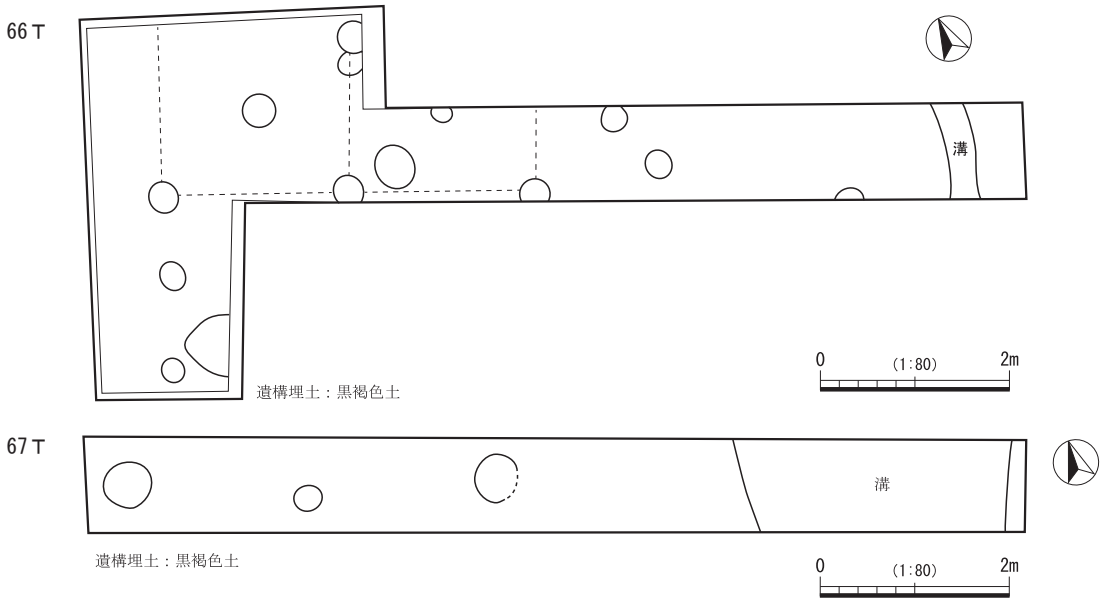


① 褐色土(10YR4/4)
② 褐色土(10YR4/6)
③ 暗褐色土(10YR3/3)
④ 明褐色土(7.5YR5/8)

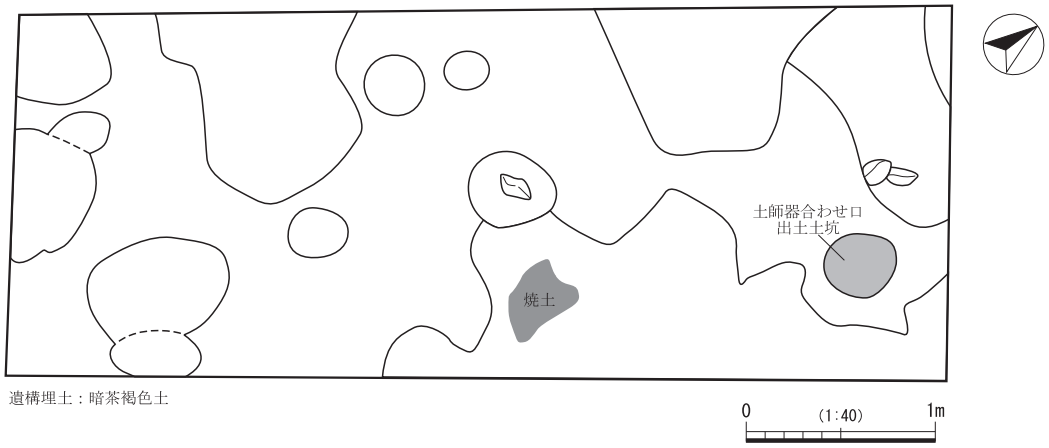
第 30 図　S地区 23 トレンチ土層断面図（北壁）



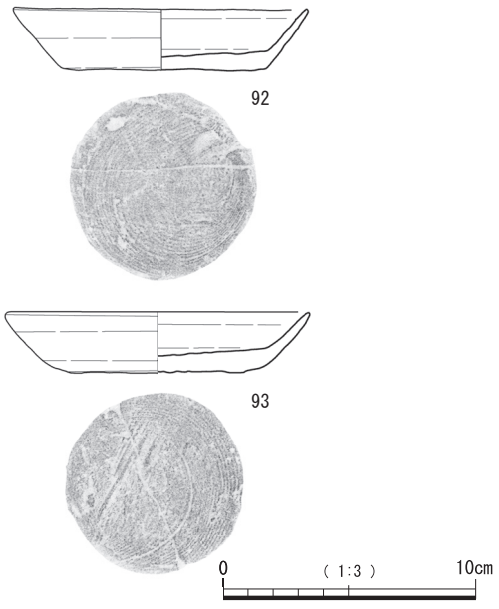
第 31 図　S地区 71 トレンチ遺構配置図



第 32 図　Ｓ地区 66・67 トレンチ遺構配置図



第 33 図　Ｓ地区 25 トレンチ遺構配置図



第 34 図　Ｓ地区 25 トレンチ土坑出土土師器

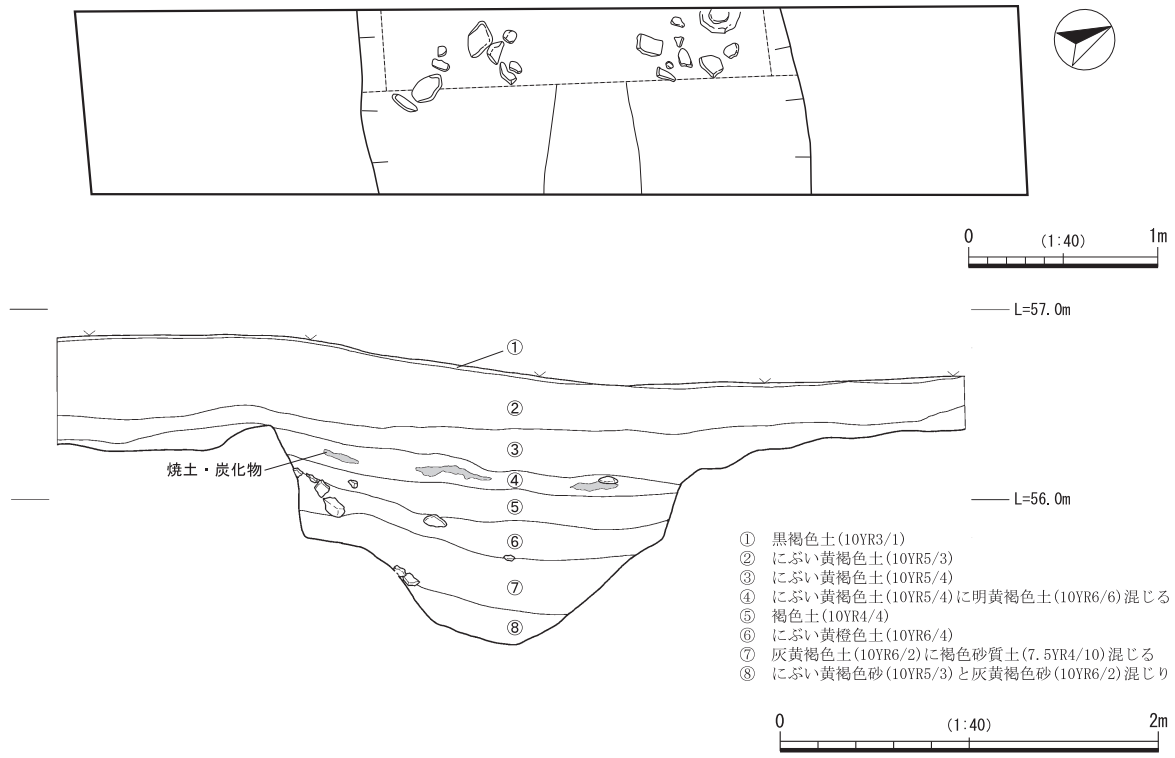
進入を防ぐように築造している。

Ｓ地区でも同様に曲輪東南部に土塁が集中しており，南側からの防御を意識した防御施設として，曲輪南側に集中して土塁を配置している。また，曲輪南側端部の大規模な土塁とＥ’地区（中の城）の境には，幅約５ｍの堀切がある。この堀切は，空堀があった可能性がある。

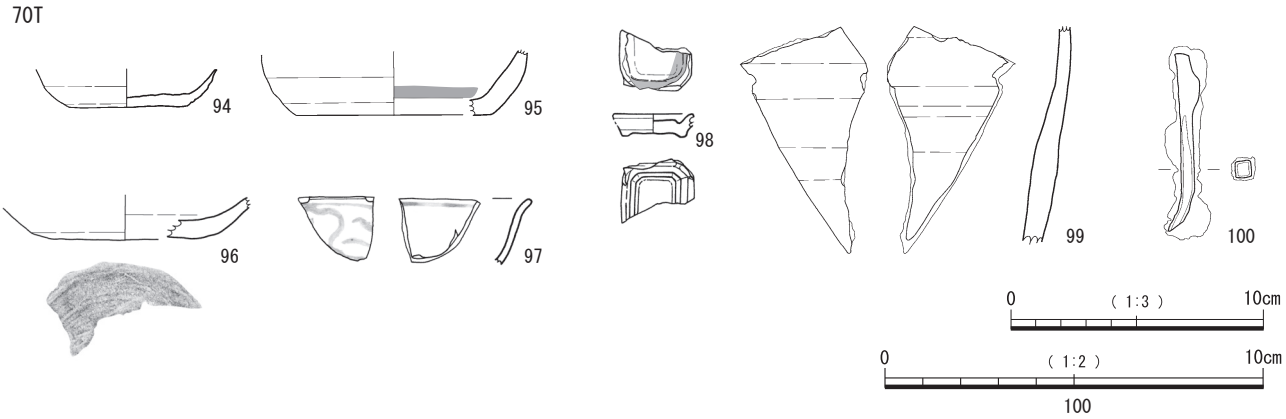
土塁が集中する曲輪南部に３カ所のトレンチを設定した。18，20トレンチは土塁に垂直方向に設定し，土塁に囲まれた空間には19トレンチを設定した。

18トレンチでは表土下約40㎝のⅢ層面で円礫が部分的に検出された（第26図）。20トレンチでもⅢ層上面に円礫が敷石状に広がりが検出された。いずれの土塁も土塁表面に円礫を張っていた可能性が考えられる。なお，20トレンチ近く横の桝形虎口では，円礫を円形に配置した状況が確認された。

19トレンチではⅢ層直上の黄褐色砂質土で約130×



第 35 図　S 地区 70 トレンチ遺構配置図・土層断面図（東壁）



第 36 図　S 地区 70 トレンチ遺構内出土遺物

100㎝の礫を配石した炉跡と礫集中，土坑と想定される遺構を検出した。炉跡は円礫で囲んでおり，埋土には焼土や炭化物を多く含んでいた。

イ　石塁（第 24・25・27 図）

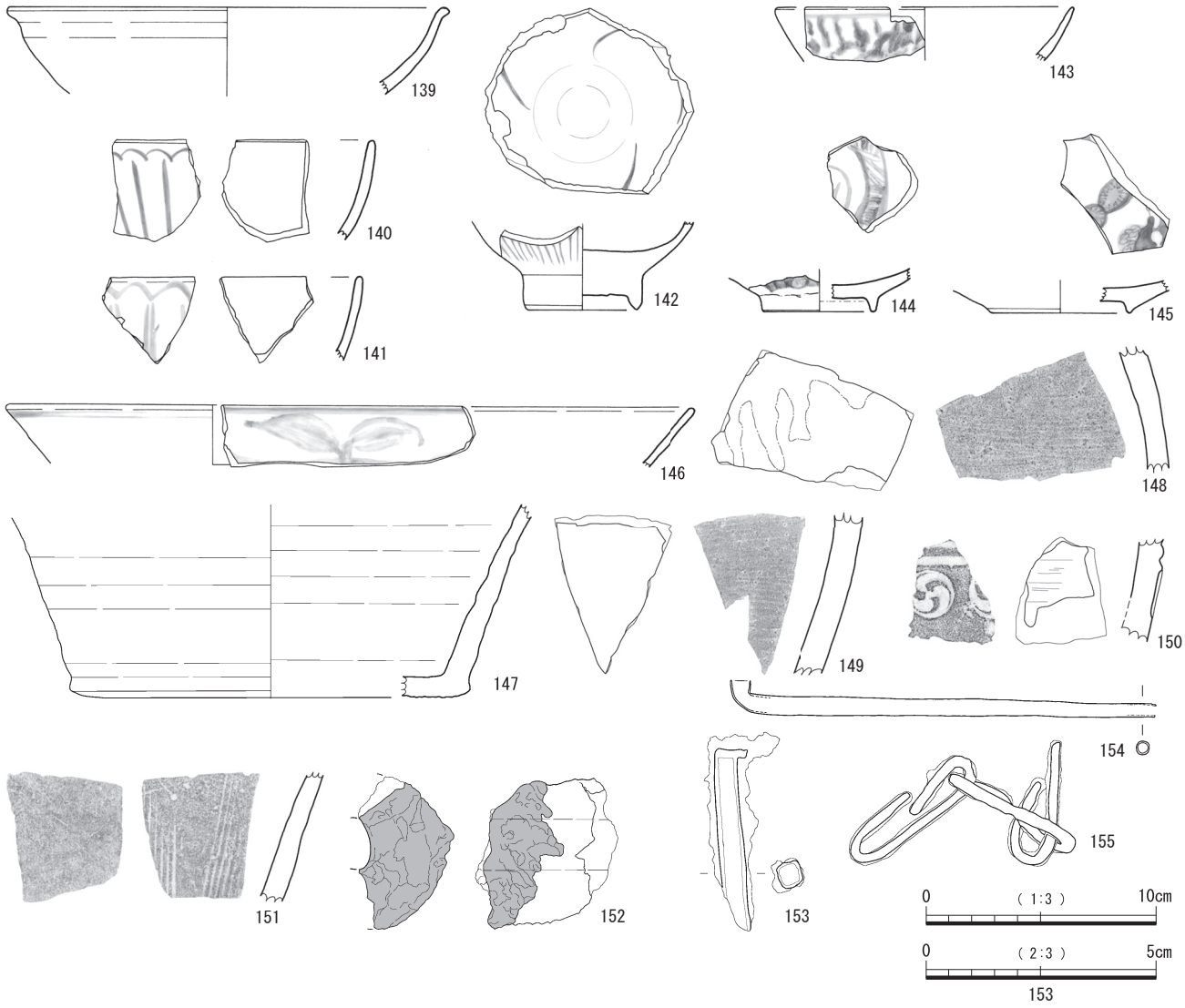
曲輪中央部のコの字形の石塁は，南側が開くコの字形を呈し，土塁の表面には拳大の礫で石を張りつけている。この石塁によって曲輪は大きく東西に仕切られる。石塁の規模は約30ｍで全長は105ｍで，高さは約30～50㎝だが，西辺には部分的に約80㎝の高さに盛られた箇所があり，幼児頭大の石が多くみられる（第27図）。石塁の断ち割りは行っていないため，詳細は不明だが，この箇所は他と比べ石塁の幅が広がっており，張石の大きさが大きいことから，一部改修されている可能性が考えられる。なお，北辺は曲輪の縁辺に沿っており，東辺の一部は窪地と一体化している。

全体的に石塁の高さは低く，防御用とは考えにくい。石垣の裏込が改修の結果，石塁という形で残存している可能性も考えられるが，石垣に使用されたと思われる石等はＳ地区では確認できていないため，今後調査が必要がある。

この石塁の周辺にトレンチを８カ所（21～23・66～69・71Ｔ）設定した。

22トレンチは石塁東側の縁辺部に設定した。遺物は出土せず，Ⅲ層上面で砂礫層を検出した。砂礫層はＱ地点の32トレンチで検出されたものと類似している。石塁南辺の窪地周辺には，21・72・69トレンチを設定した。21トレンチではⅢ層上面で溝状遺構２条と土坑を検出した。72トレンチは石塁に対して垂直に設定し，Ⅲ層上面

第 37 図　S 地区トレンチ出土遺物①（18 ～ 21・23・25・26・66・67・69・70 ～ 72 T）



第 38 図　S 地区トレンチ出土遺物②（石塁周辺精査時）

で石塁の段差と石塁に沿った溝状遺構，トレンチ南側には22トレンチで検出された砂礫層が検出された。22・72トレンチで検出された砂礫層は礫の大きさにばらつきがあり，Ⅲ層上に検出されていることから，自然堆積ではなく，曲輪内に部分的に砂礫を敷かれていた可能性が考えられる。

ウ　窪地（第 26 図）

窪地は幅約10×５ｍ，深さ約1.5ｍで東側面は石塁と一体化し，円礫が張られている。窪地に設定した69トレンチでは，Ⅲ層上面で西側に掘り込みが確認されたことから，窪地が人工的なものであることが明らかとなった。

出土遺物はごく僅かで，埋土に水溶堆積も見られなかったことから水溜や池などではなかったようである。この窪地の機能についてはさらなる調査が必要だが，曲輪内での配置を考慮すれば，何らかの特別な性格をもつ遺構・施設であったと考えられる。

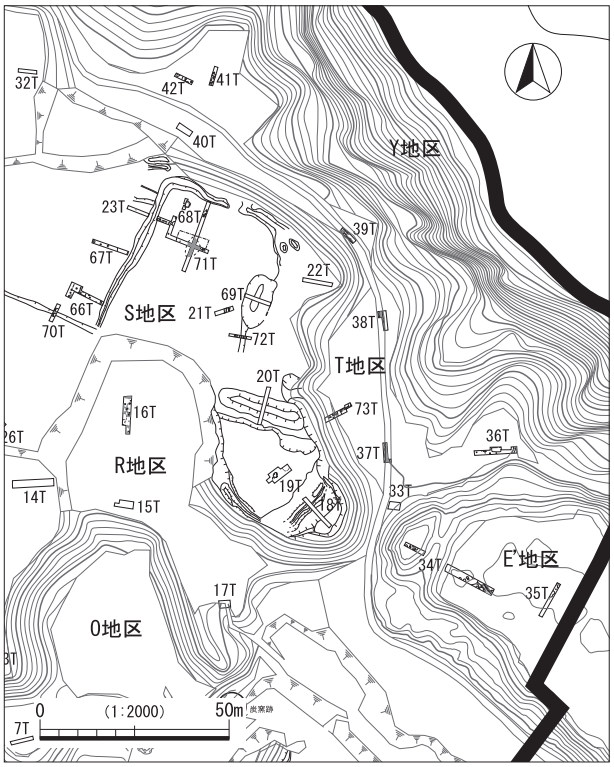
エ　庭園遺構（第 28・31 図）

全面精査により石塁の北角付近に角閃石安山岩の大きさ約170×100㎝の大石が存在することが明らかになった。

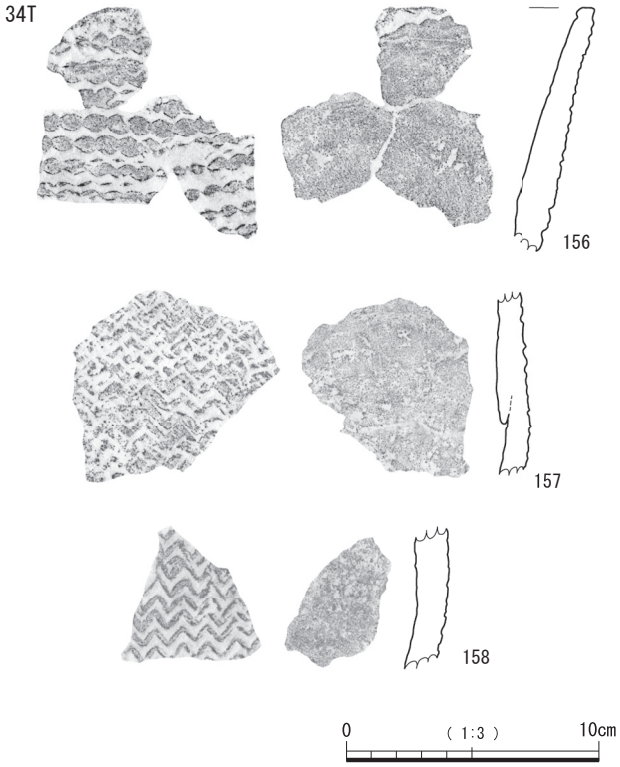
大石の状況を確認するために68トレンチを設定した。その結果，地表面に露出していた部分は約50㎝，全体の大石の高さは約100㎝であることが明らかになった。また，大石の下には円礫の「かませ石」が確認された。

68トレンチ周辺に設定した71トレンチの東側拡張部でも「かませ石」を敷いた凝灰岩の大石が検出されており，いずれも人為的な配石であることが確認された。

「かませ石」は，石組の下に石の高さを調整するための築庭の技法である。松社城には庭園があったという謂れもあり，大石は庭園の石組の可能性が考えられる。大石周辺には60㎝～80㎝大の複数の石が石塁と一体化して点在している。大石が庭石であれば，周辺の石や石塁も庭園の石組を構成する一部であった可能性が想定される。



第 39 図　E'・T 地区トレンチ配置図



第 40 図　E' 地区出土縄文土器（34 T）

また，大石を含むこれらの石は，安山岩や砂岩で虎居城近辺ではあまり採石できない石材であり，これらの石は運びこまれたものである可能性が高い（大木氏・岸野氏御教示による）。中世庭園に使用される石は，「厳選され取り寄せられた」という記録が多く残されており，これらの石も庭園の石組として持ち込まれたものと考えられる。

さらに，松社城にあった巨石が戦後に旧宮之城高校（現宮之城中学校）に運び出されたという古老からの聞き取りがある。実際に現在でも宮之城中学校のグランド脇には多くの安山岩の大石が点在しており，松社城の大石と非常によく似ている。これらの石はもともと松社城にあった可能性が高く（岸野氏・大木氏御教示による），運び込まれた石も含めると枯山水のような石組が構成されていた可能性が高い。

68トレンチ周辺は，表土下にまだ石が残存していると想定され，今後の調査で全体像を明らかにし，庭園遺構の可能性について探る必要がある。

オ　コの字形遺構　（第 31 図）

石塁に囲まれた中央部付近に71トレンチを設定した。当初，東西方向に設定したが，シラス混じりの埋土と，焼土域や多量の炭化物を含んだ埋土を検出したことから，埋土の広がりを確認するため南北方向に十字に拡張した。

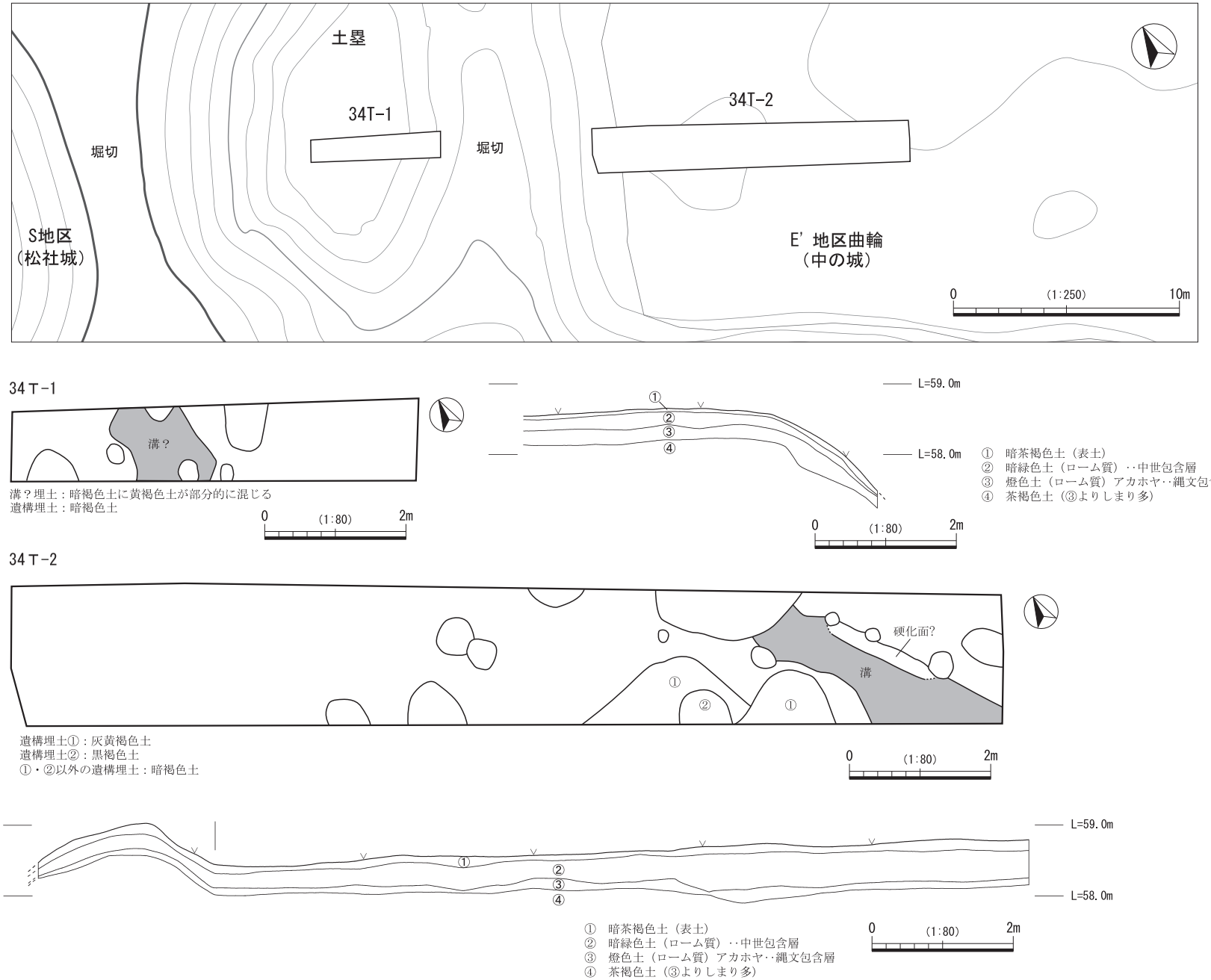
拡張部でⅢ層を掘り込んだプランが確認し，当初検出していた焼土やシラスを含んだ埋土は遺構内の埋土であることが明らかとなった。

Ⅲ層上面で，北・西・東の３方向に掘り込みを確認したが南側は確認されなかったことから，コの字形遺構と判断した。南側の掘り込みはトレンチ外にあり，方形の遺構の可能性も十分あり得るが，本報告書では「コの字形遺構」として報告する。

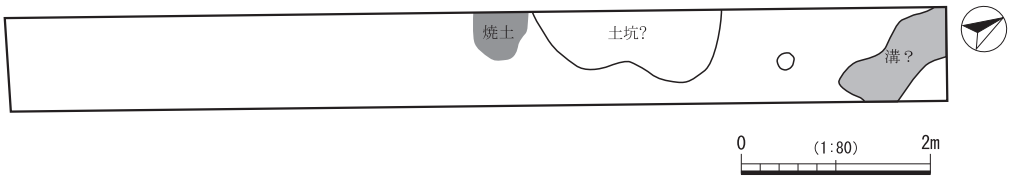
この遺構は，埋土中に多量の炭化物を含んでおり，シラス混じりの層が版築のように埋土が堆積している状況であった。焼土域を検出していた面で掘り下げを一旦止め，遺構の掘り込みと底面の確認のためプランが確認された箇所にサブトレンチを設定し，掘り込みの確認を行った。掘り込みはⅢ層を鋭角に掘り込んでおり，東側はステップ状になっていた。

サブトレンチ内の埋土中にも，焼土・炭化物が多く含まれており，埋土内の炭化物は「1464cal―1530cal（40%）・1541cal―1635cal（55%）」の年代測定結果で得られている。なお，トレンチ中央部の焼土域の出土炭化物は「1403cal－1439cal」であり，やや時期差があるが出土遺物・炭化物測定結果から15世紀前半～17世紀前半に帰属する遺構と考えられる。

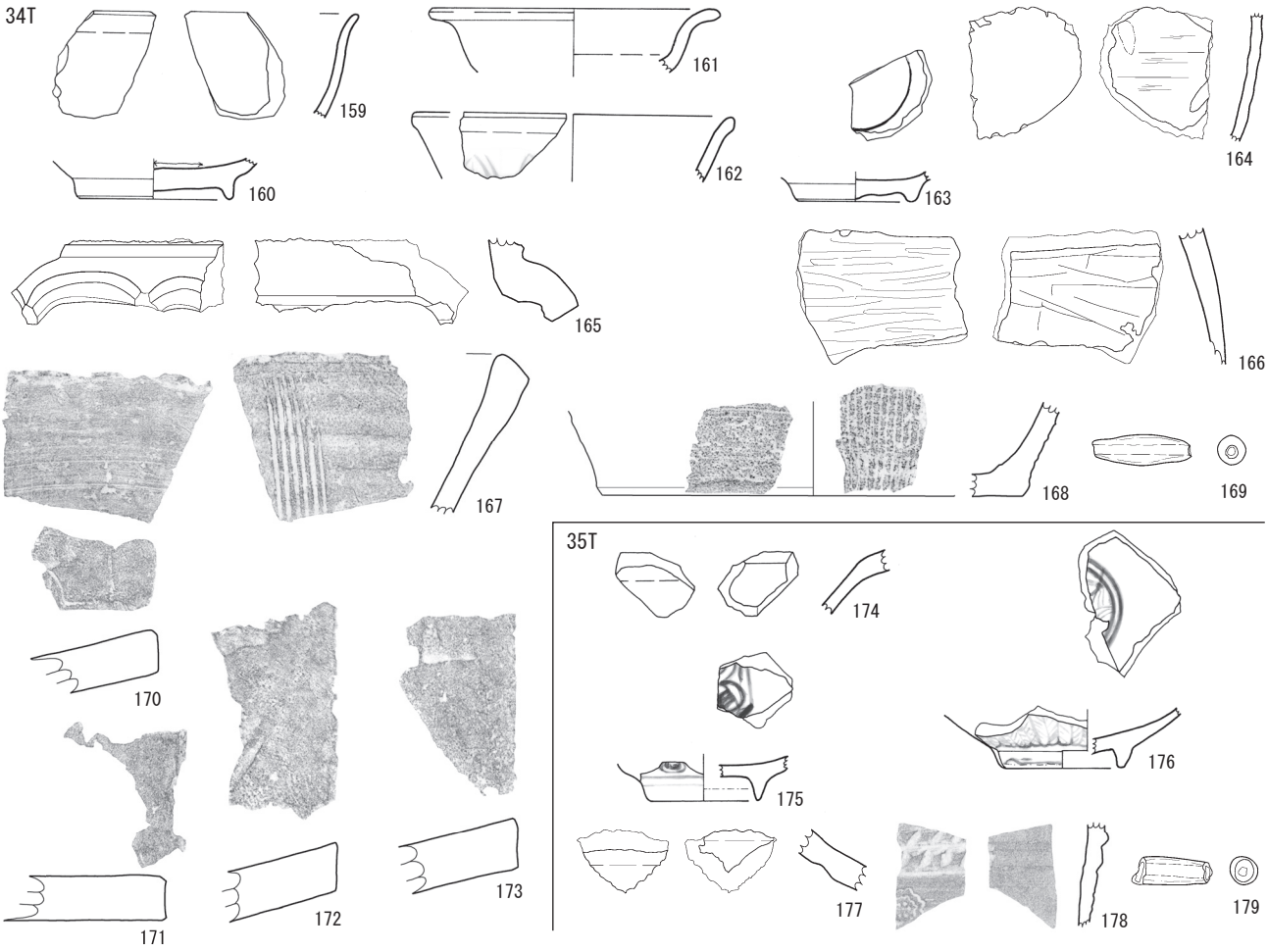
本遺構は，曲輪中央部に位置すること，焼土・炭化物を多量に含んだ埋土堆積であったことを考慮すると，修験道に関連する遺構（護摩行か）の可能性が考えられる。焼土域面で掘削を中止し，完掘までは至っていないため，遺構の全体像や性格の詳細については，今後の調



第 41 図　E′地区 71 トレンチ配置図・遺構配置図・土層断面図（北壁）



第 42 図　E’地区 35 トレンチ遺構配置図



第 43 図　E′地区トレンチ出土遺物（34・35 T）

査で明らかにしていく必要がある。

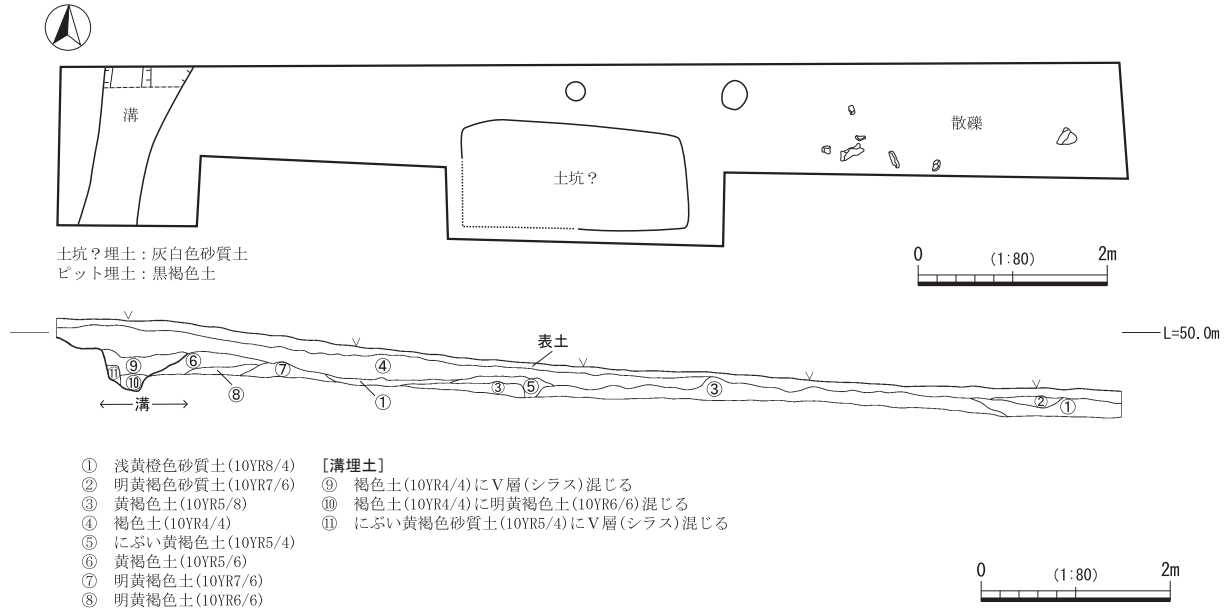
カ　区画溝（第 29・35・36 図）

71トレンチの西側には石塁に垂直方向にＴ字形の23トレンチを設定した。石塁内側部分では，ピットや土坑，石塁に並行する溝状遺構をⅢ層上面で検出した。

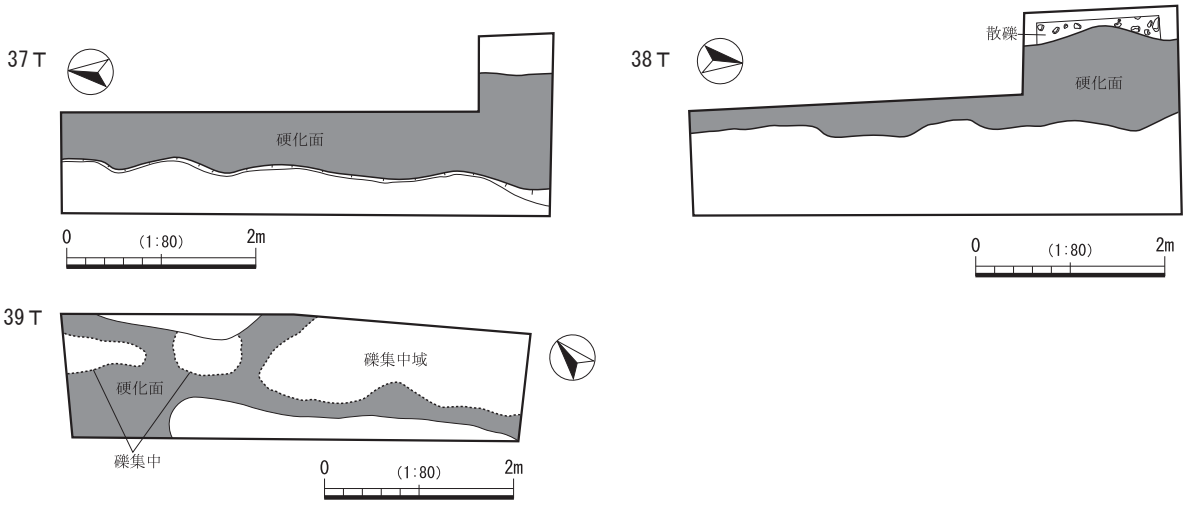
溝状遺構にはサブトレンチを設定し，遺構の確認を行ったところ，幅約270㎝，深さ170㎝のＶ字溝で，東側はステップ状になっていた。溝の検出面と石塁の頂点が約160㎝，溝底面から約330㎝の高低差がある。この溝は石塁に付随するものと考えられ，内側に並行して延びると想定される。

67トレンチからは23トレンチの溝と同規模の溝のプランが石塁の外側から検出されており，石塁の両側に２条の溝があることが確認された。

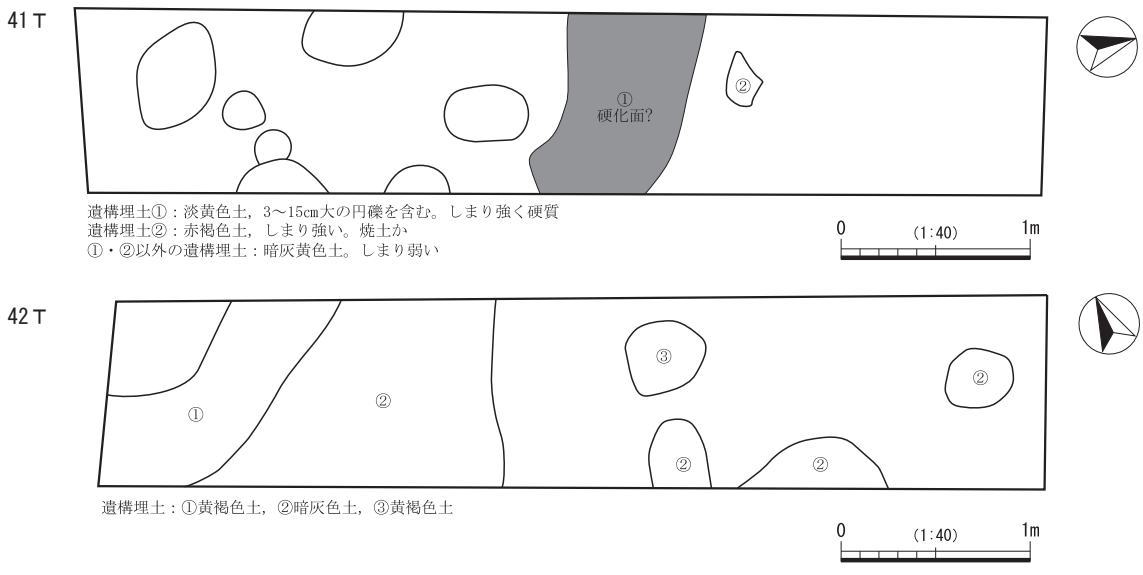
石塁と２条の溝は曲輪を区画するものであり，曲輪内に明確に仕切りがあったことが明らかとなった。さらに，曲輪西側には石塁に垂直した微勾配（段差）が確認され，その段差部分に設定した70トレンチでも幅約220㎝，深さ約110㎝のＶ字溝が検出された。この溝は段差も含めて曲輪を東西に分断する区画溝と考えられる。埋



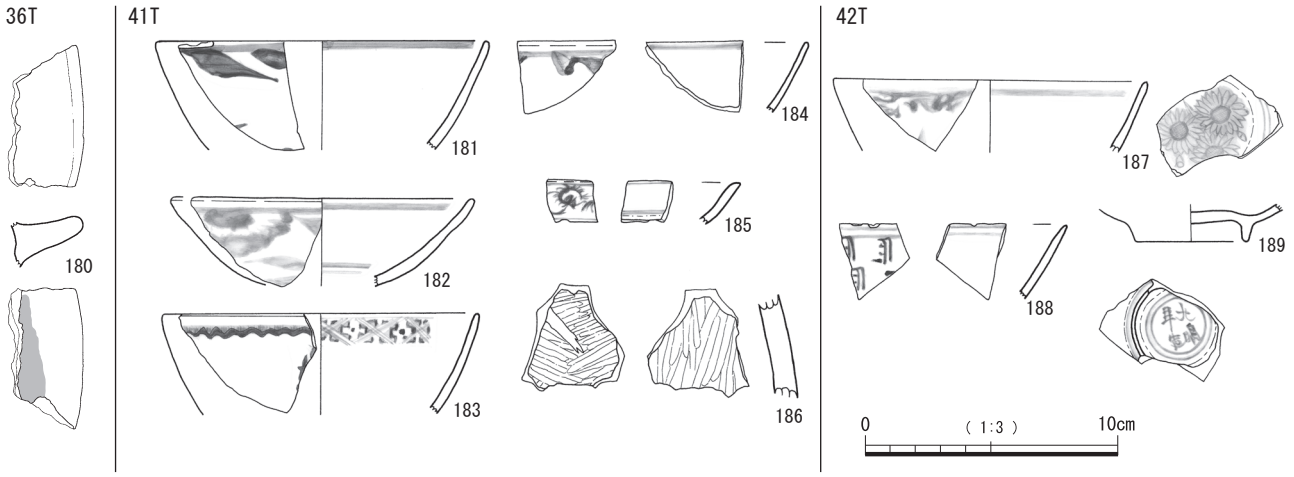
第 44 図　T地区 36 トレンチ遺構配置図・土層断面図（南壁）



第 45 図　T地区 37 ～ 39 トレンチ遺構配置図



第 46 図　T地区 41・42 トレンチ遺構配置図



第47図　E’地区（36Ｔ）・Ｔ地区（41・42Ｔ）トレンチ出土遺物

土内からは中世遺物とともに炭化物・焼土が出土しており，炭化物の年代測定では「1484calAD―1640calAD」の値が得られている（詳細は４章）。

以上の成果から，Ｓ地区（松社城）曲輪は，区画溝・段差・石塁・土塁等によって，少なくとも５つの空間に仕切られていたことが明らかになった。

キ　建物跡？（第 32・33 図）

石塁の北側は一段高くなっており，石塁に垂直方向にトレンチを３カ所設定した。66・67トレンチでは，柱穴と思われるピット群や土坑が検出された。66トレンチのピット群は東に広がるようで，掘立柱建物跡の可能性がある。

また25トレンチでは，合わせ口の土師器の坏が出土している。25トレンチ西側にはコの字形の虎口があり，石塁の北側の区画に入る入口付近にあたる位置に合わせ口の土師器が出土した（地鎮か）。

曲輪北側に位置する25トレンチ付近は石塁と溝で分断された一段高い北側の区画である。Ｓ地区曲輪で，ピット群が集中して検出されているのはこの区画のみであり，この場所に中心的な建物（居館？）があった可能性が推測される。

なお，『宮之城記』には渋谷良重が「松社之館」で妻に殺害されたという記述があり，松社城には城主居館があったと想定される。建物の配置等については曲輪構成や機能を考える上で重要な課題であり，今後調査で明らかにしていきたい。

曲輪西側区画には26トレンチを設定したが，遺構は確認されなかった。この区画の機能については，追加トレンチを設定して調査を行う必要がある。

ク　松社城における調査成果

Ｓ地区（松社城）では土塁や石塁，窪地，庭園遺構，区画溝，コの字形遺構の検出，掘立柱建物など多くの成果が得られた。

各遺構の成果はいずれも重要であるが，各遺構の性格や，曲輪の評価については全体像が不明瞭な部分が多い。Ｓ地区曲輪の成果は，虎居城跡の歴史的評価・価値に大きく関わるものであり，今後の調査では慎重に調査を進めていく必要がある。

（２）遺物

遺構内出土遺物（第 34・36 図）

25Ｔ（第 34 図）

92・93は土師器坏で合わせ口の状態で出土した。93が92に被さった状態で検出された。92・93いずれも糸切底で緻密な胎土で薄手なつくりである。93の内外面はやや摩滅しており，薄く黒色の有機物が付着している。

70Ｔ（第 36 図）

94～96は土師器の皿である。いずれも強い被熱によって，全体的に赤色化がみられる。97は小野Ｂ群に比定される青花の皿である。釉がやや白濁する。98は，紅皿と思われる合子の身である。方形を呈し，受け部は欠損する。胎土は灰白色で全面露胎である。内面には赤色顔料が付着している。蛍光Ｘ線分析ではFe値が高かったことから，ベンガラの可能性が高いという分析結果が得られている。（県埋セで分析を実施）。

99は中国陶器の壺である。内外面ともに褐釉が施釉される。100は鉄釘である。

トレンチ内出土遺物（第 37・38 図）

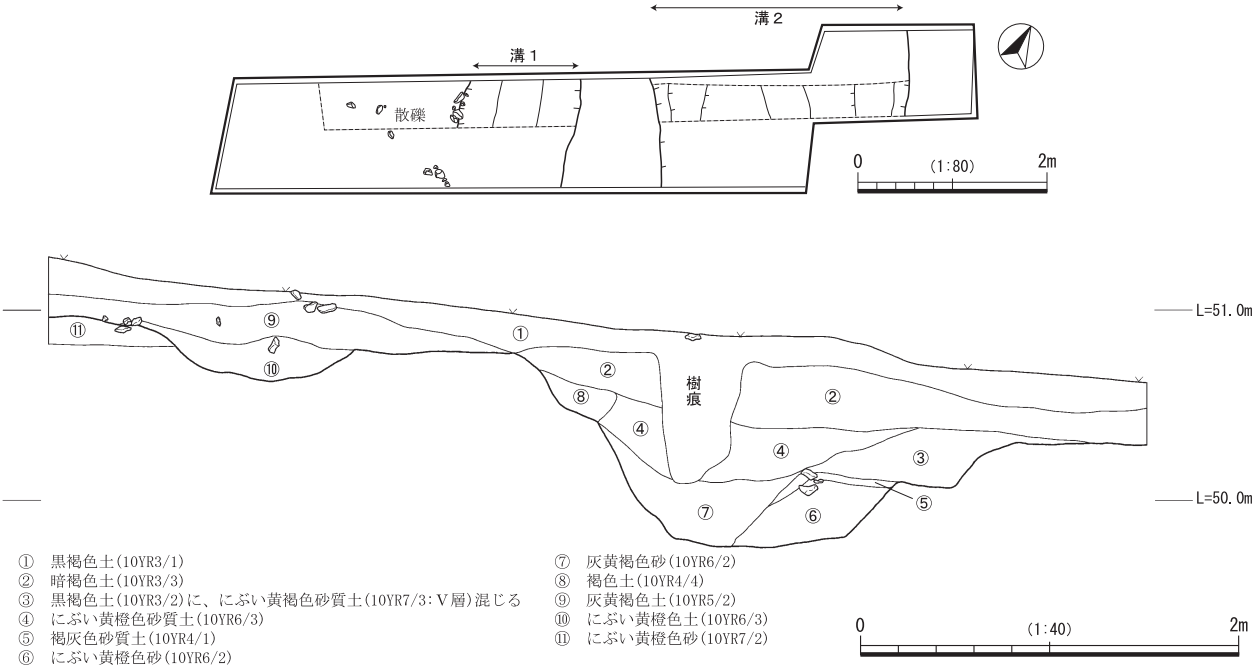
18Ｔ　101は瓦質土器の擂鉢で，表面は摩滅し，擂目が僅かに残る。表面はイブシがみられる。

19Ｔ　102は鉄釘である。

20Ｔ　103は森田Ｄ類に比定される白磁皿である。切り出しの高台で，白濁した釉がかかる。104は肥前系磁器の筒形碗で，外面に草花が描かれる。

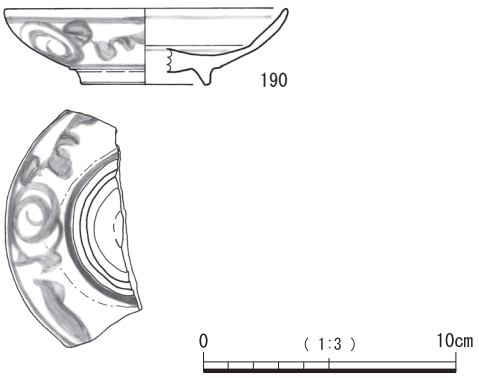
21Ｔ　105は平瓦と思われる。

69Ｔ　106は平瓦である。表はイブシがみられるが，裏



① 黒褐色土(10YR3/1)
② 暗褐色土(10YR3/3)
③ 黒褐色土(10YR3/2)に、にぶい黄褐色砂質土(10YR7/3:Ｖ層)混じる
④ にぶい黄橙色砂質土(10YR6/3)
⑤ 褐灰色砂質土(10YR4/1)
⑥ にぶい黄橙色砂(10YR6/2)
⑦ 灰黄褐色砂(10YR6/2)
⑧ 褐色土(10YR4/4)
⑨ 灰黄褐色土(10YR5/2)
⑩ にぶい黄橙色土(10YR6/3)
⑪ にぶい黄橙色砂(10YR7/2)

第 48 図　Ｔ地区 73 トレンチ遺構配置図・土層断面図（北壁）



第 49 図　73 トレンチ溝①出土遺物

はにぶい黄橙色を呈す。胎土には長石が目立つ。

72Ｔ　107は薩摩焼苗代川産の蓋である。外面には鉄釉がかかる。

66Ｔ　108・109は青磁の碗である。108は線描蓮弁文をもつ。109は，高台で高台内面の釉を輪状に掻きとる。110は鉄釉の天目碗である。

23Ｔ　111は森田Ｅ群に比定される端反の白磁皿である。112は青花の皿である。内面見込みには玉取獅子が描かれ，畳付は露胎する。113･114は備前焼の壺である。113は口縁部に粘土の折り返し痕がみられ，玉縁状を成す。114は胴部で，外面は赤褐色を呈す。

71Ｔ　115～118は土師器である。116は坏，115・117・118は皿で，115は胴部下半を削りだし，二次焼成を受け，赤褐色を呈している。116は瓦質に近く，胎土が緻密である。119～122は青磁である。119は上田Ｄ類に比定される碗である。口唇部の釉を掻きとっている。120・121は坏である。120は削りだしの蓮弁文をもつ。高台内面の釉を輪状に掻きとる。121は胎土が黄色味を帯び，粗雑である。122は盤で，内面にはヘラ彫りで花文を施す。123は備前焼の擂鉢である。５条の擂目がみられる。

124は鉄釘である。125は土師器の底部を打ち欠き，メンコ形にしたものである。

67Ｔ　126は土師器皿である。内面には煤が薄く付着している。127・128は瓦質土器である。127は捏鉢で，灰白色を呈す。128は焜炉である。内面には方形の突起をもち，内面全面に煤が厚く付着している。土師質で胎土には金雲母が目立つ。

70Ｔ　129は鉄製の轡の一部と思われる。

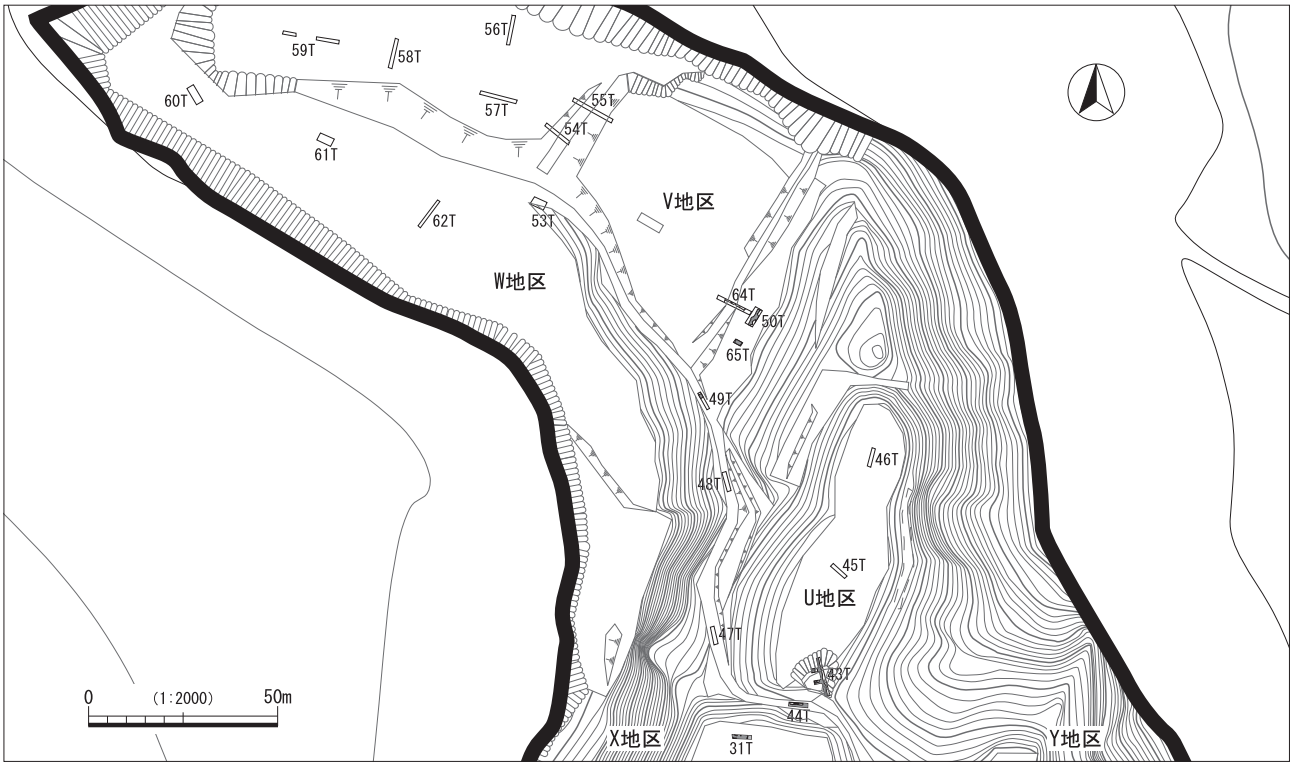
25Ｔ　130・131は青花である。130は碗の胴部で，唐草文が描かれる。131は皿で，畳付は露胎し，砂目が付着する。132は平瓦で，表はイブシで丁寧に磨かれるが，裏は灰白色を呈す。133は瓦質土器の火鉢である。突帯をもち，胎土には長石・石英が多く含まれる。

26Ｔ　134は青磁碗の胴部である。135・136は中国陶器の壺である。135は外面に褐色釉が施釉される。

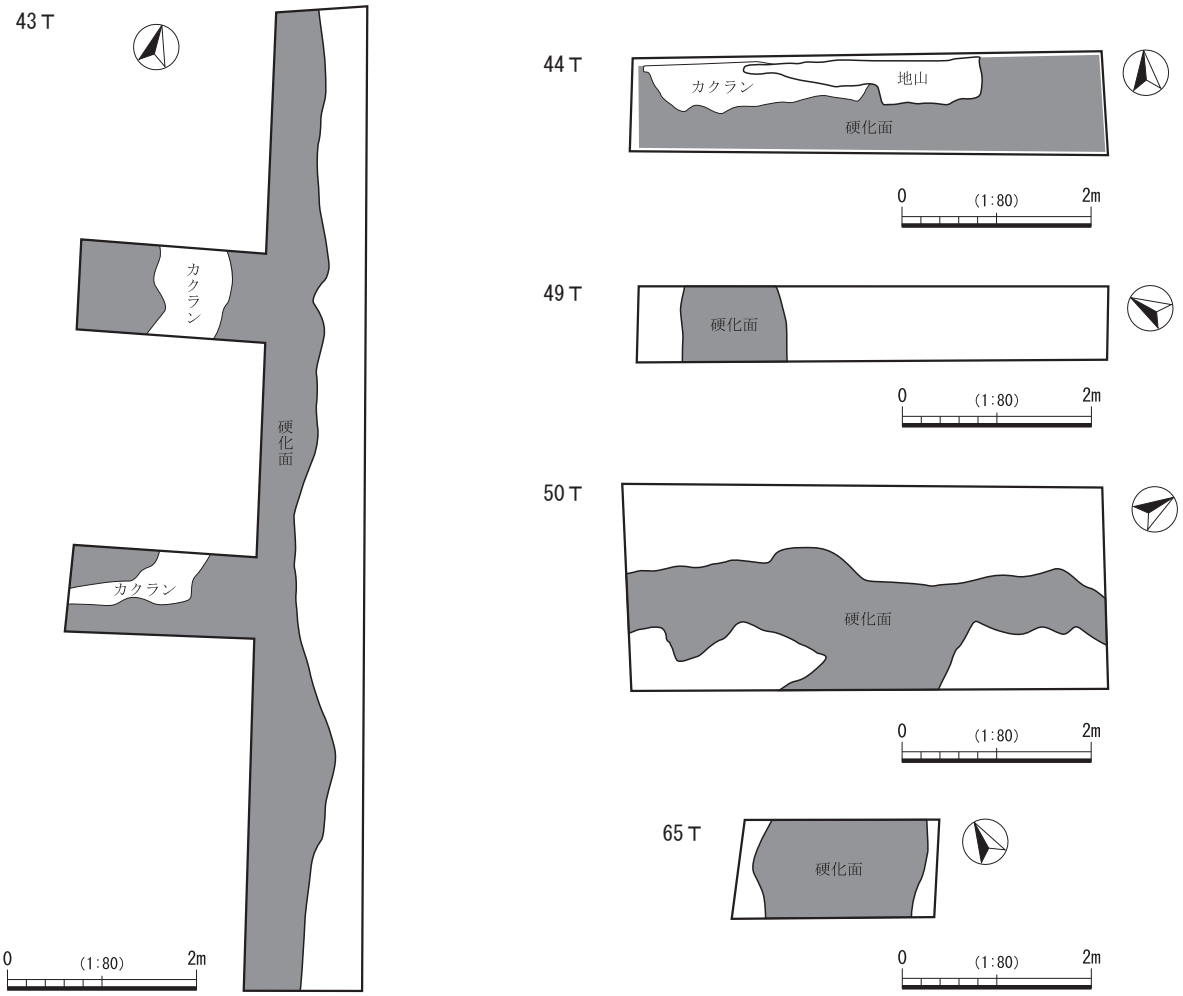
136は外面に褐色釉がみられるが，釉の剥落が著しい。137は瓦質土器の捏鉢または擂鉢で，黒色を呈す。138は肥前系の碗で外面に菊が描かれる。

石塁周辺精査時

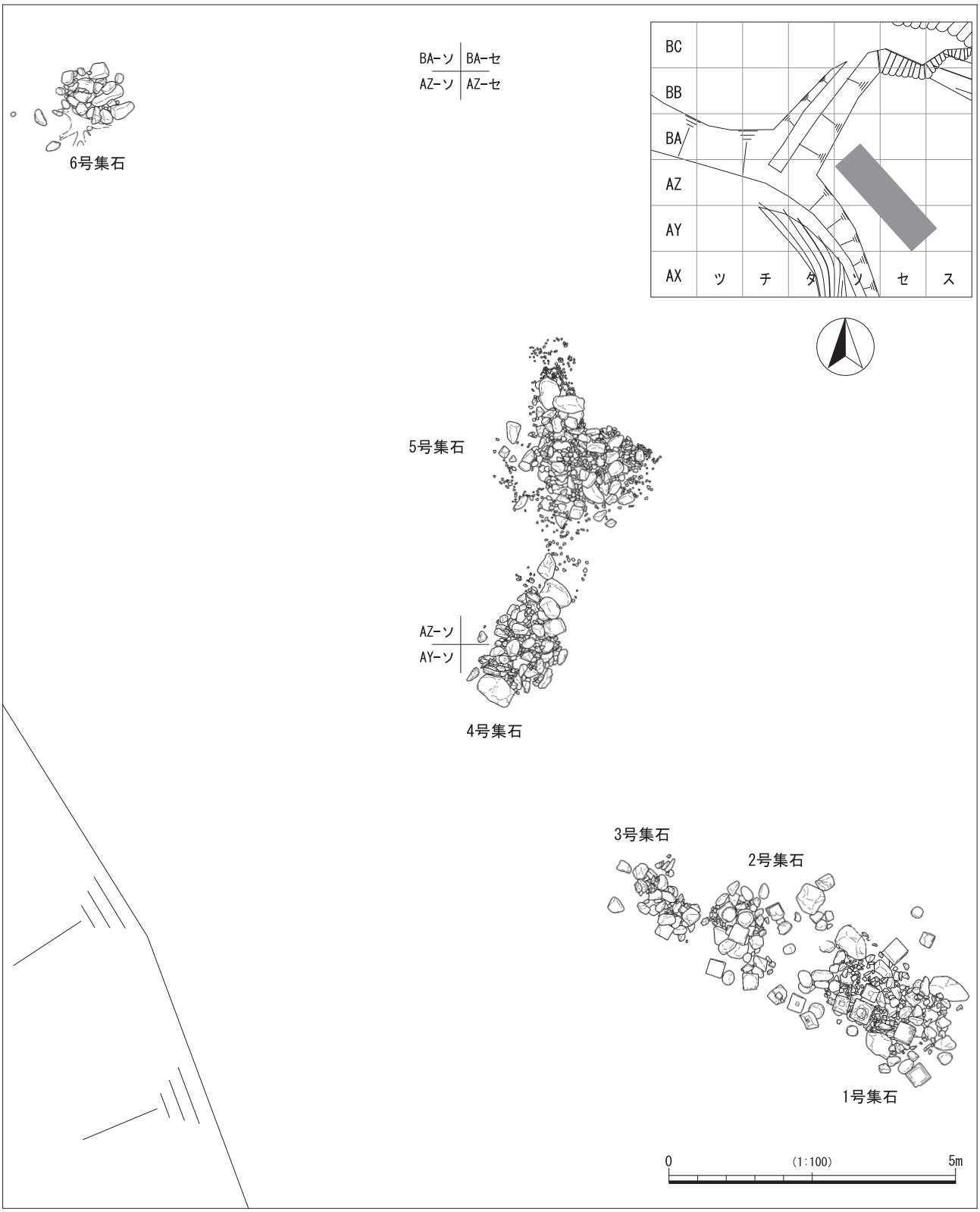
139～142は青磁である。139は坏で，透明感の強い釉が施釉され，体部のヘラ削り痕が確認できる。140～142は上田Ｂ類に比定される碗で，外面に細線蓮弁文，



第 50 図　U～W地区トレンチ遺構配置図



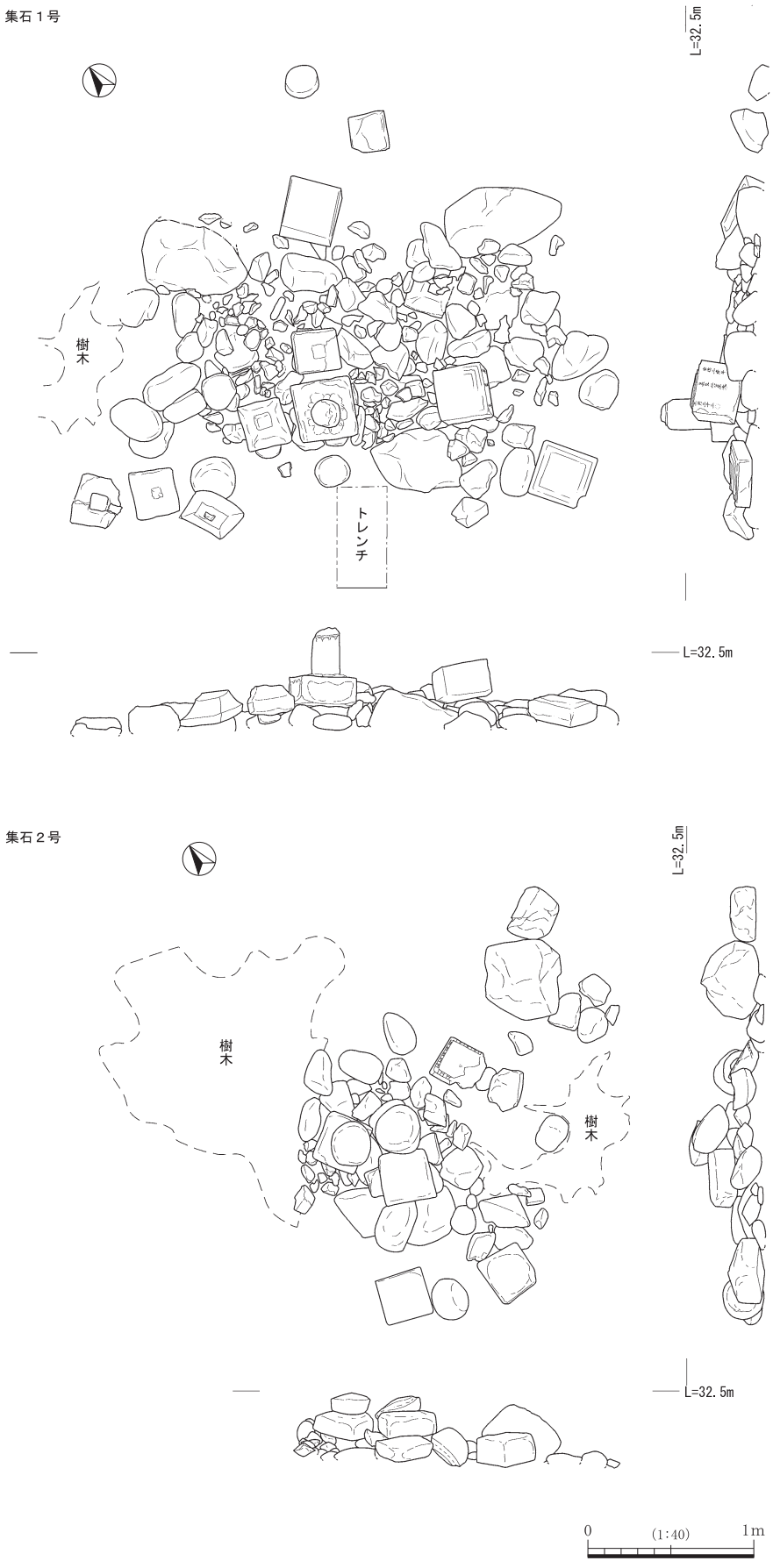
第 51 図　U地区 43・44 トレンチ・V地区 49・50・65 トレンチ遺構配置図



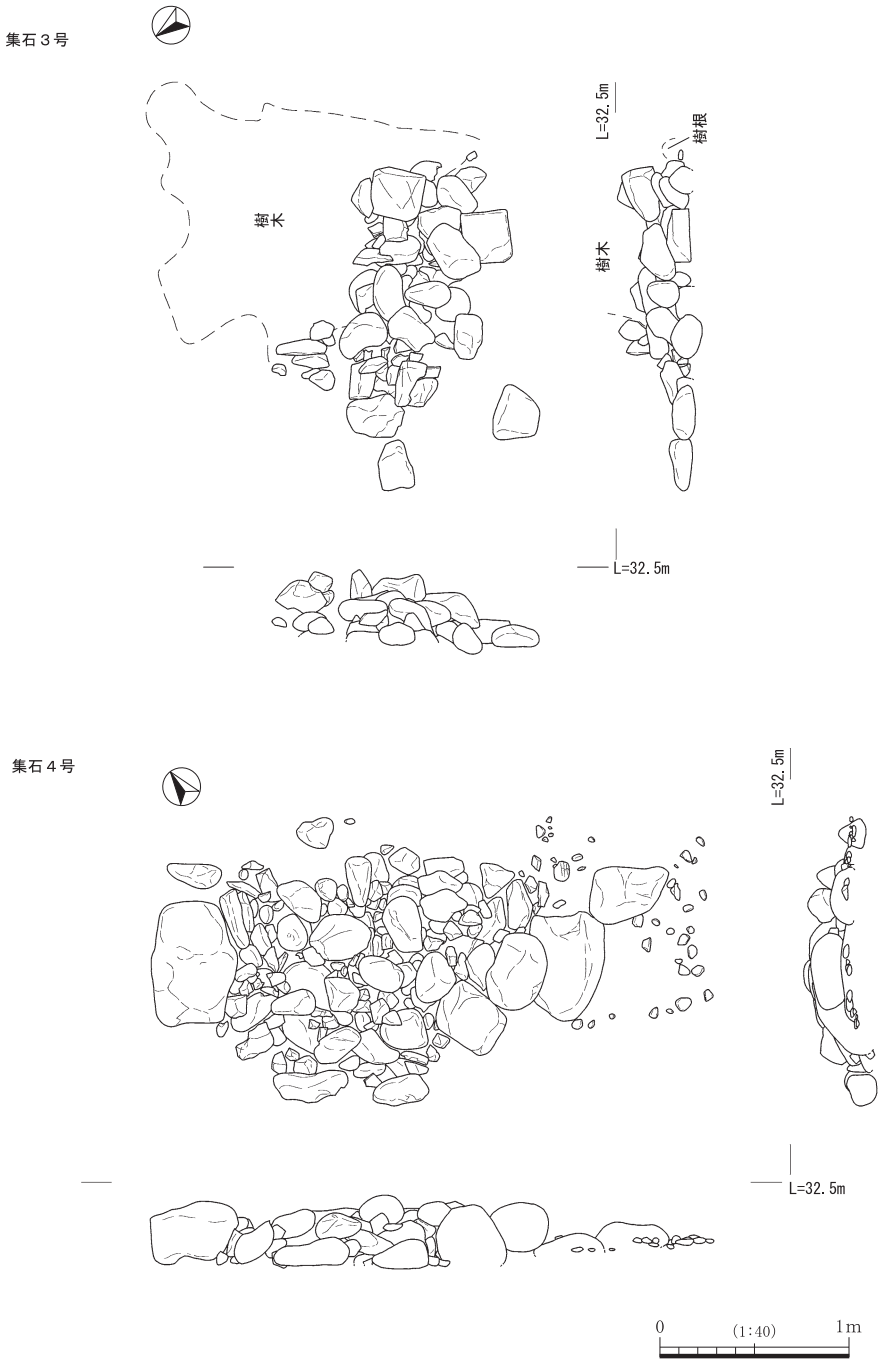
第 52 図　Ⅴ地区１～６号集石配置図

内面に片彫りの文様が四方に入る。高台内面は輪状に釉を掻き取っており，赤色化がみられる。

143～146は青花である。143は外面に花文が描かれる碗である。144は外面に芭蕉葉文が，見込みに櫛文が描かれた皿である。145は碁笥底状の高台で，畳付は釉を掻き取る。146は大型の皿である。146はコバルトの発色が悪く緑色味を帯びる。147は中国陶器の壺もしくは甕である。147は外面に褐釉が施釉され，胎土にはφ１㎜



第 53 図　Ｖ地区集石１・２号



第 54 図　Ｖ地区集石３・４号

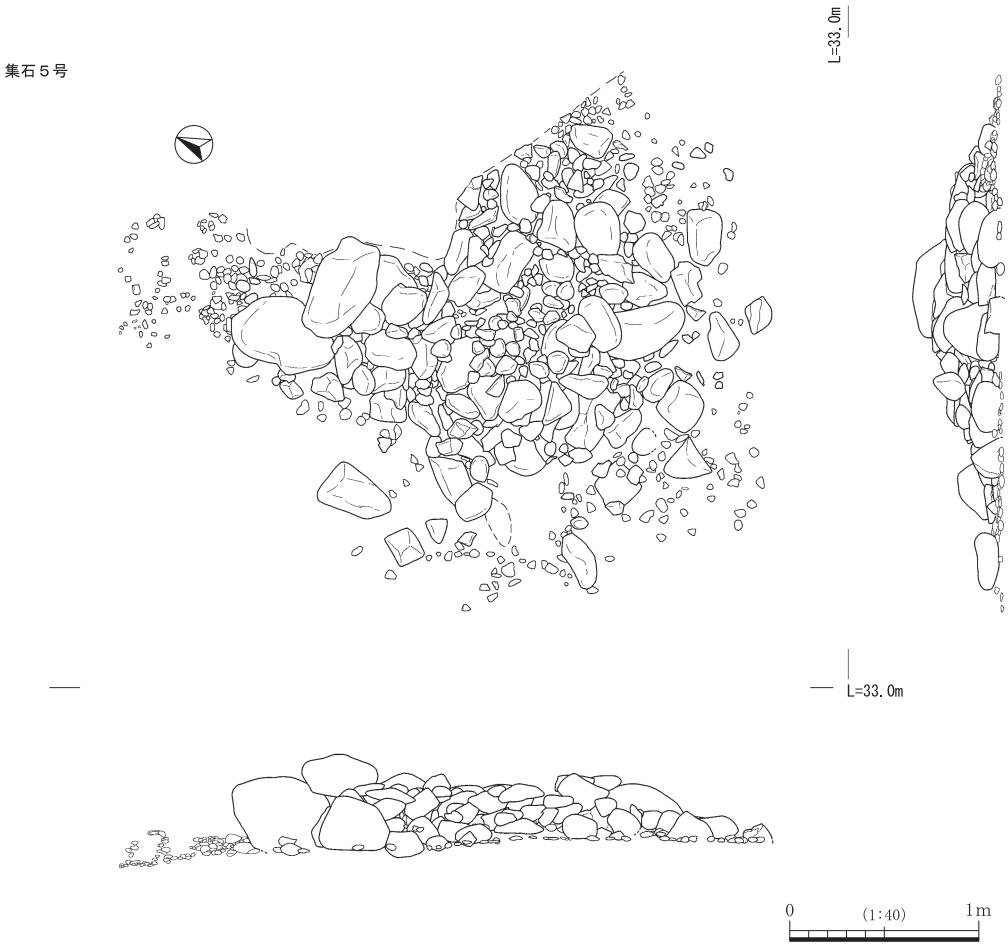
大の白色鉱物を多く含む。

148・149は備前焼の甕の胴部で，外面には自然釉がかかる。150・151は瓦質土器である。150は巴文のスタンプ文をもつ火鉢，151は土師質の擂鉢である。152は鞴の羽口で，先端に鉄滓が付着する。153は鉄釘である。154は青銅製の煙管である。155は鉄製の轡と思われる。

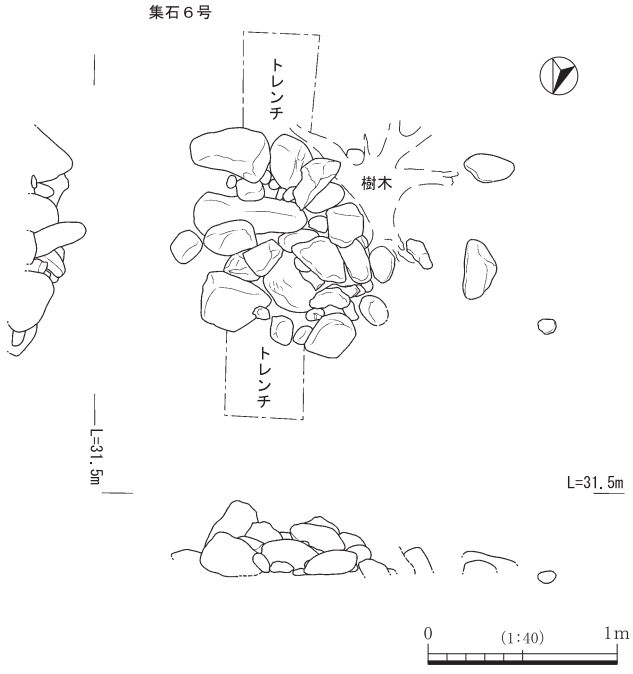
7　E’地区（中の城）（第 39 ～ 43 図）

（１）遺構（第 41・42 図）

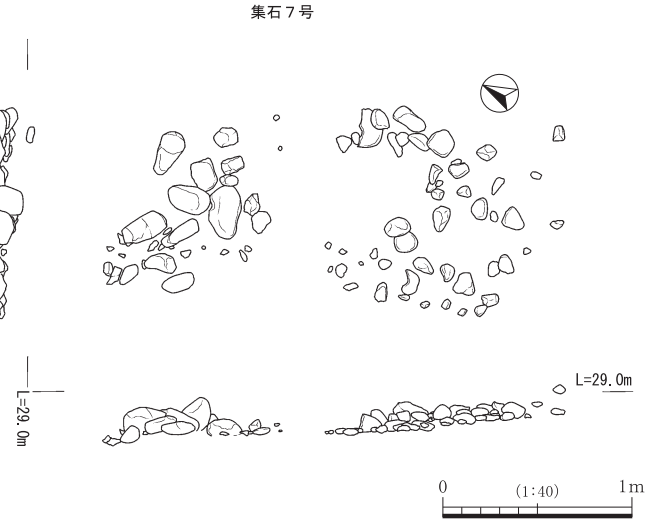
Ｓ地区南側の曲輪のＥ’地区は「中の城」に相当する曲輪である。平成20・21年度の調査で曲輪南側の３分の２（Ｅ地区）が調査され，調査後は推込分水路建設により消滅している。Ｅ地点の調査では，曲輪南端に土塁や炉跡，溝状遺構等が検出されている。現在残存する北側３分の１をＥ’地点とし，調査を行った。曲輪北側には幅約３ｍの堀切とその北側にＳ地区（松社城）南側の



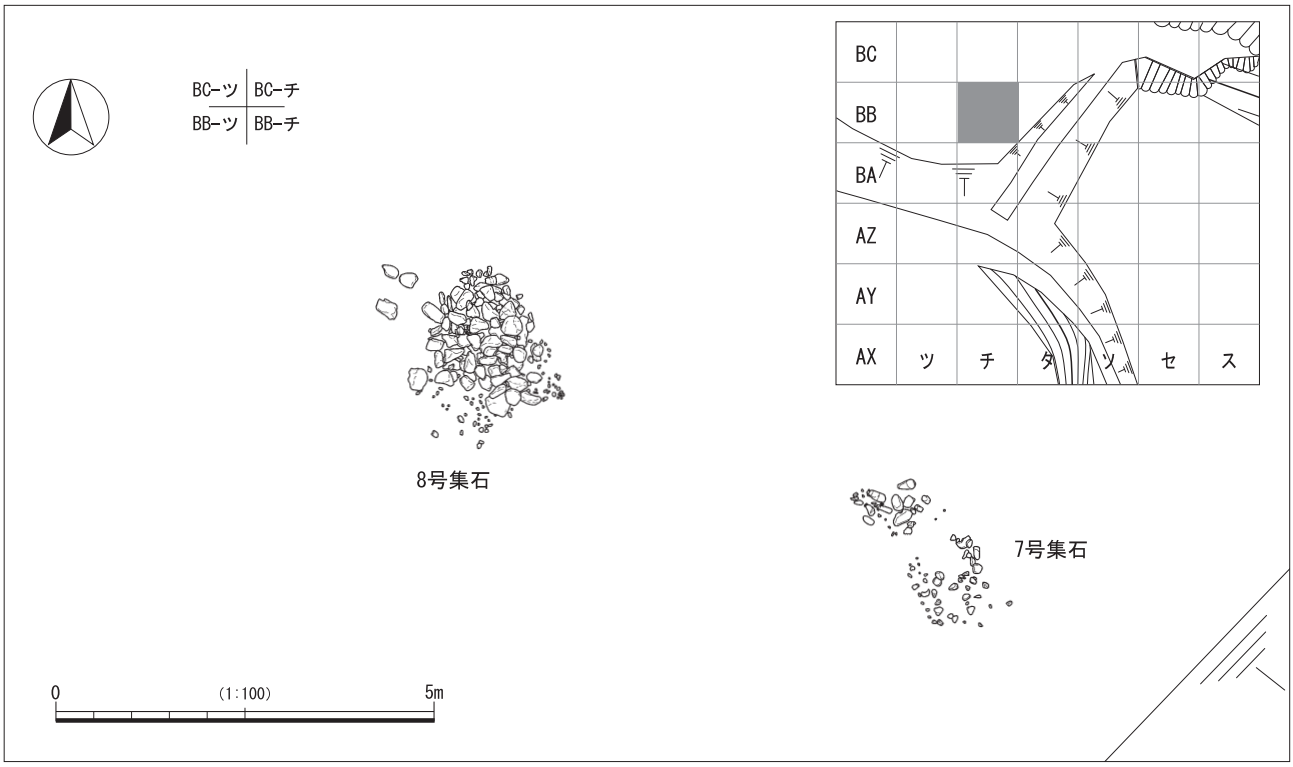
第 55 図　Ⅴ地区集石５号



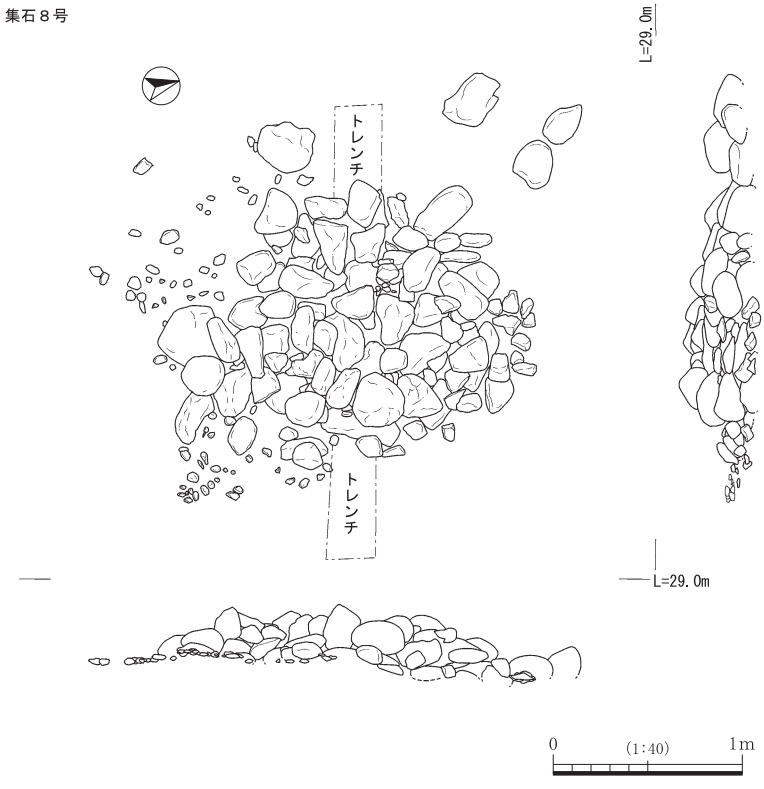
第 56 図　Ⅴ地区集石６号



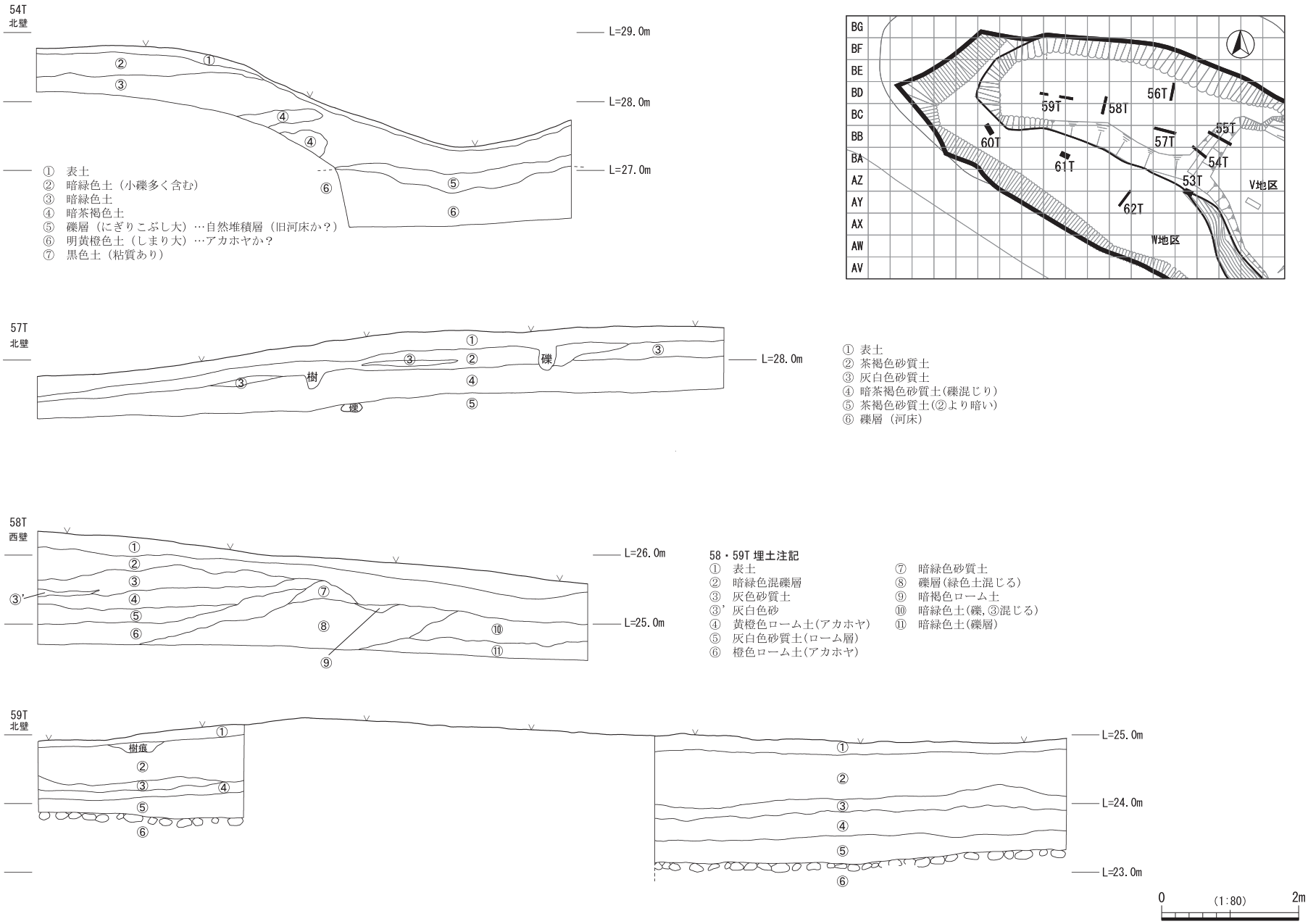
第 57 図　Ⅴ地区集石７号



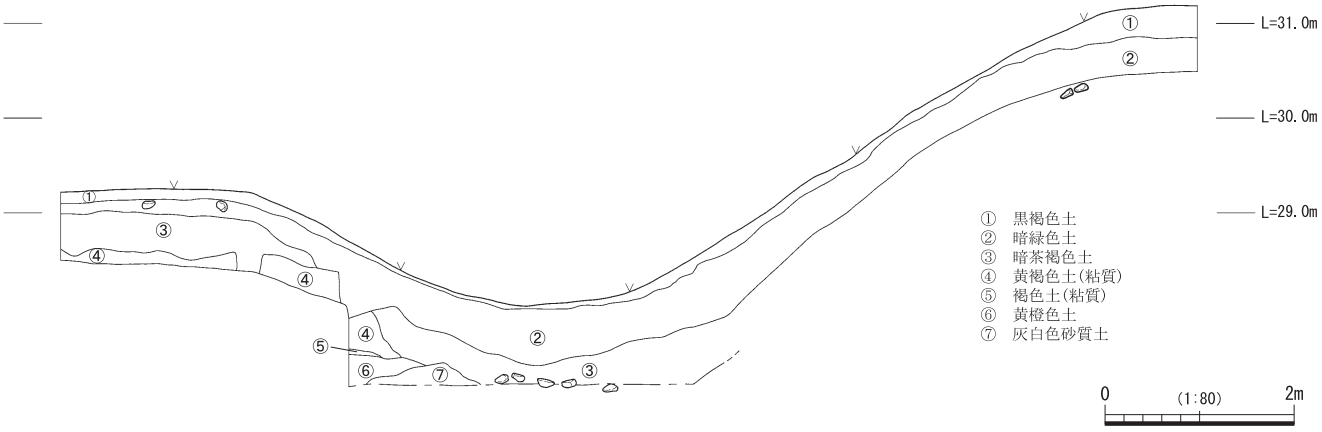
第 58 図　Ⅴ地区集石７・８号配置図



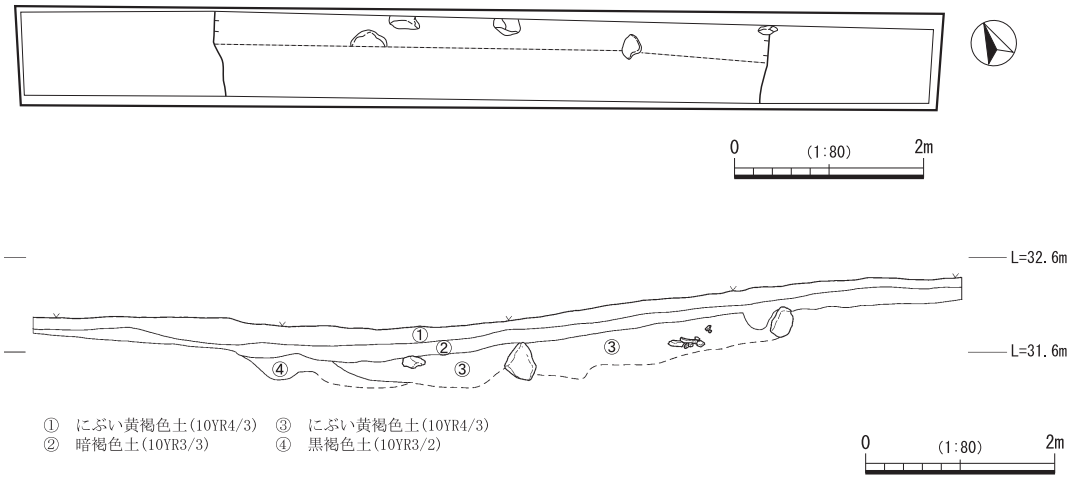
第 59 図　Ⅴ地区集石８号



第 60 図　Ⅴ地区 54・57・58・59 トレンチ土層断面図



第 61 図　Ⅴ地区 55 トレンチ土層断面図（北壁）



第 62 図　Ⅴ地区 64 トレンチ遺構配置図・土層断面図（北壁）

土塁と対になる独立した土塁（土居） がある。土塁間には堀切があり，Ｓ地区（松社城）と中の城（Ｅ’地区）を分断している。

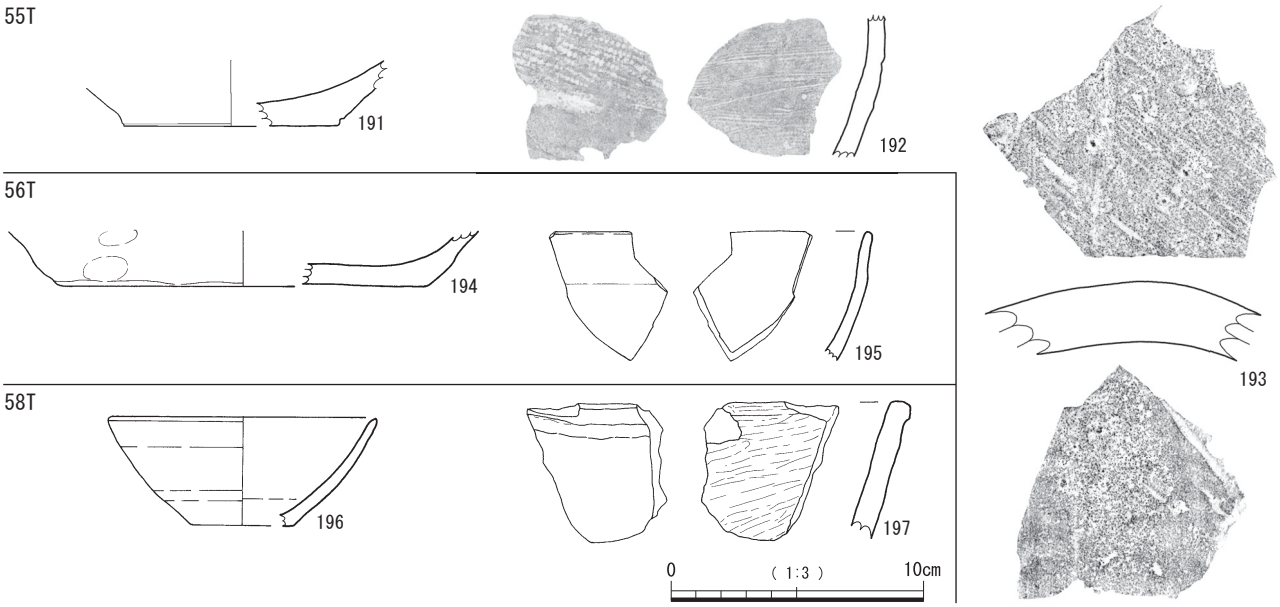
小規模の堀切を跨いで34トレンチを設定した。堀切の南側には小規模の土塁（高まり）があり，Ⅲ層上面では不定形の土坑やピット，溝状遺構と思われる遺構が検出された。また南側のトレンチの溝状遺構の下面には硬化面が確認された。

曲輪の南側（分水路側）に35トレンチを設定した。Ⅱ層上面に近代・近世遺物とともに，硬化面が検出された。Ⅱ層中～下層からは土師器や中国陶磁器，瓦質土器が出土した。遺構検出面はⅢ層上面で，表土から約35㎝下で土坑やピット，焼土跡等の遺構が確認された。Ｅ地区の調査では，多くの炉跡が検出されていることから，焼土跡も炉跡に関連する遺構である可能性が考えられる。

また，Ｓ地区（松社城）とＥ’地区（中の城）間の大規模な堀切は曲輪を分断する役割を果たしているが，幅が約５ｍと狭いことから曲輪と曲輪の間に橋が架けられていた可能性が指摘されている（太田氏御教示による）。トレンチ調査では橋を架けた痕跡は確認できていないが，追加調査を行うことで何らかの痕跡が見つかる可能性を示しておきたい。

Ｅ’地区下の北側には，曲輪を廻る添曲輪に近い狭い平坦地がある。この場所はＴ地区とほぼ同レベルで繋がっている。この箇所に36トレンチを設定した。Ⅲ層は残存しておらず，Ⅴ層（入戸火砕流堆積物）で溝状遺構，隅丸方形の土坑，ピットが検出された。溝状遺構はサブトレンチを入れて一部掘り下げたところ，幅約15㎝，深さ約10㎝の南北に延びる溝であることを確認した。

なお，Ｅ’地区（中の城）の南西側（Ｎ地区）北東部には添曲輪がある。ここにはトレンチが設定できなかったが，Ｅ地区の南側を廻る大規模な空堀Ⅱの延長部



第 63 図　Ⅴ地区トレンチ出土遺物（55・56・58 T）

分であり，この添曲輪には空堀があることが想定される（県埋セ 2011）。さらにその１段下には沼地（水溜？排水施設？）があり，この添曲輪はＥ・Ｅ’地区（中の城）を構成する重要な施設があったと考えられる（『宮之城記』 には 「さゆみ瀬戸」 と記されている）。

また，空堀Ⅱの底面は通路として使用されていることから，添曲輪は空堀かつ城中央部を通る主要通路（本馬場）であった可能性もある（上田氏御教示による）。

（２）遺物

ア　縄文土器（第 40 図）

156～158は34トレンチ出土である。156は外面及び口縁部周辺部に押型文をもち，横位に楕円押型文が，157・158は山形押型文が縦位に施文される。

イ　中・近世遺物（第 43・47 図）

34Ｔ　159～163は青磁である。159・160は碗である。159は上田Ｄ類に比定される青磁碗で，160は見込みと高台内面を輪状に掻き取る。161～163は坏である。162はヘラ削りの蓮弁文をもつ。163は高台内面を輪状に掻き取る。164は中国陶器の壺である。外面は鉄釉が施釉され，内面は露胎する。胎土はやや赤味を帯び，φ１㎜程度の白色鉱物を多く含む。

165・166は瓦質土器の風炉である。いずれも内外面をミガキで仕上げるが，特に外面のミガキが丁寧で，表面は光沢をもつ。165は脚部で，透かし部分を削り出しで面取りしている。167は備前焼の擂鉢である。６条の擂目をもち，硬質で赤褐色を呈す。備前焼のⅢ期（間壁編年：14世紀前半）に比定されるものである。

168は薩摩焼の擂鉢で，外面に鉄釉が施釉される。169は土錘である。170～173は瓦である。171は桟瓦で，残りは平瓦である。

35Ｔ　174は青磁碗の胴部である。175・176は青花碗で，176は見込みに蓮華文，外面胴部に芭蕉葉文が描かれる。177は薩摩苗代川産の壺の胴部と思われる。178は近世陶器の甕で，花文のスタンプ文がみられる。179は管状土錘である。

36Ｔ　180は羽釜の鍔であり，下面に煤が付着する。

８　Ｔ地区（第 44 ～ 49 図）

（１）遺構（第 44 ～ 46，48 図）

Ｓ地区（松社城）の東部に沿った細長いＴ地区は，現在も登路となっている区域である。登路から川内川に向かって張り出す箇所が各所にみられることから，Ｓ地区（松社城）に付属する区域であったといえる。

登路沿いに37～40トレンチ，松社城東部の虎口付近の斜面に73トレンチ，Ｔ地区北部の川内川に張り出した平坦面に41・42トレンチを設定した。

いずれのトレンチでもⅡ・Ⅲ層は残存しておらず，やや水気を含んだⅤ層（乳白色）で遺構検出を行った。

37～39トレンチでは表土から５～10㎝下で硬化面が検出された。37・38トレンチでは硬化面にサブトレンチを設定して厚さを確認したところ約10㎝と厚く，存城時から継続して使用されていた登城路であったと考えられる。

39トレンチは硬化面と乳児頭大の円礫を敷き詰めた礫集中が確認された。敷礫は硬化面を切っている。39～41トレンチ間は，雨天後は非常にぬかるみ，水掃けが悪いところであるため，この敷礫は後世にぬかるみを防止に敷かれた可能性がある。

Ｓ地区（松社城）に登る虎口付近に設定した73トレンチは，平成20・21年度調査でレーダー探査を行った場所である。レーダー探査では大小の２つの高まりが確認さ

れている（県埋セ 2011）。トレンチでは，Ｖ層面でＳ地区に平行する溝を２条検出した。溝１は幅約90㎝，深さ約10㎝，溝２は幅約300㎝，深さ約100㎝のＶ字形の溝で深さ約90㎝で湧水した。溝１の埋土内から青花皿が出土している（第49図）。

北側の40トレンチは遺構等は確認されなかったが，張り出し部の41・42トレンチでは，溝状遺構やピット，土坑と思われる遺構を検出した。遺構埋土は，暗褐色土，黄褐色土，暗灰色土などがあり，時期差があるようである。ピット等は半截していないため，樹根の可能性もあるが，Ｓ地区（松社城）の北側にあり，曲輪を防御する良好な位置であったことから櫓もしくは監視場といった横矢掛けのような施設等であった可能性が考えられる。

なお，Ｔ地区の対面には「推込の瀬」と呼ばれる瀬がある。明徳４年（1393年）頃，虎居城を攻めた出水の大重悪四郎の軍勢が「推込の瀬」に追い込まれ，推し込められたという伝承が残っている。Ｔ地区の東側のＹ地区は，急崖な自然の切岸になっている。

以上のことから，Ｔ地区は城内の馬場（登路）であり，横矢掛けと思われる川内川に張り出した空間をもつＳ地区曲輪（松社城）に付随する防御的機能をもった区域であったと考えられる。

（２） 遺物（第 47 図）

41Ｔ　181～185は青花である。181～184は碗で，181は外面に葉，182は葉や花，183は花，184は唐草文が描かれる。185は小皿の口縁部で，外面に草花が描かれる。186は羽釜の一部と思われ，表裏にミガキの痕跡が残る。

42Ｔ　187～189は青花の碗である。188は外面に梵字文がみられる。189は饅頭心で，見込みに菊，高台内に「大明年製」の文字が描かれる。

遺構内遺物（第49図）

73Ｔ　190は漳州窯系の碗で，破損後，ニカワで接合した痕跡がみられる。染付の色はやや緑味を帯び，草花文が描かれている。

９　Ｕ地区（第 50・51 図）

（１）遺構

Ｓ地区（松社城），Ｑ地区（女中仮屋）の北側に位置する。Ｑ地区との間は堀切になっており，北側に堀切を挟んで土塁があるひょうたん形の独立した曲輪である。標高は約53ｍで，曲輪南側にはＴ地区の登路から入る虎口がある。

曲輪の平坦面には45・46トレンチを設定したが，遺構は確認されなかった。虎口部分に43トレンチを設定し，Ⅲ層上面で曲輪への登路と思われる硬化面を検出した。

Ｕ地区からＶ地区に下りる登路には，44・47・48トレンチを設定した。44トレンチは，43トレンチで検出した硬化面につながる硬化面をⅢ層上面，表土下５㎝で確認した。

47・48トレンチでは遺構等は確認されず，表土下はⅨ層（加久藤火砕流堆積物）の岩盤層であった。この部分の登路は後世に削平されて作られたもので，本来の登路はＵ地区西側にある曲輪に沿った腰曲輪にあったと考えられる。

10　Ｖ地区（第 50 ～ 63 図）

（１）遺構（第 52 ～ 62 図）

城の北端部に位置する曲輪で，曲輪を仕切る堀切が２つある。堀切に区切られた中央の平坦面が，『宮之城記』で「八女壇」と呼ばれる場所に相当する場所である。

東側堀切の細長い空間と中央部は標高約33ｍで，北側の堀切を超えた先端部の平坦面は標高約25ｍであり，北側の堀切を境に高低差が確認できる。

中央部と北側平坦面には，石塔とそれに伴う円礫の集石８基（集石１～８号）があることを確認した（第52～59図）。この箇所は当初51・52トレンチを設定予定だったが，現状保存の関係から石塔と集石群の測量を主として行い，トレンチ調査は集石に一部サブトレンチを設定して確認した。サブトレンチは集石１・６・８号に設定したが，掘り込み等は確認されなかった。集石１号にある石塔の地輪には「宝徳二年 義先仁公座□ 二月二十二□」と記銘が確認された（第65図）。

「八女壇」とは，長禄３年（1459年）に渋谷氏の息女が船遊びをしていたところ溺れてしまい，付き添いの女中７人とともに亡くなるという事故から由来するようである。この事故があった瀬は「八女の瀬」と呼ばれており，Ｖ地区の西側に位置する。八女壇の石塔・集石は事故で亡くなった８人の女性を弔った墓石塔といわれている。

実際には石塔に刻まれた宝徳２年（1450年）と長禄３年（1459年）と年代が一致しておらず，八女を弔った墓石塔であるという確実な成果はないため，伝承との関わりは断定することは現状ではできない。

この石塔は，本来は火輪・水輪まで乗った状態であったが，現在は倒壊している。どの時期に倒壊したのかは不明だが，2001年発行の『虎居城物語』では倒壊前の写真が掲載されている（第64図）。

石塔を含んだ集石は１～８号まであり，堀切に挟まれた平坦面に１～６号，北側堀切を超えた平坦面に７・８号が位置している。石塔の地輪や火輪が１～３号集石に円礫とともに散在しており，４～８号は円礫のみである。また，１～６号集石は約60～80㎝大の円礫と約10～20㎝大で構成されている。これらの円礫は城周辺の川内川の河床で多くみられるものであった。

調査上，便宜的に集石を８つ（１～８号）としたが，

第 64 図　倒壊前の石塔（宮之城文化懇談会編 1991）
平成元年撮影か

第 65 図　石塔記銘：「宝徳二年　義先仁公座〇　二月二十二〇」
（宮之城文化懇談会編 2001）現在も確認できる

石塔が散在する１～３号集石や４・５号集石はそれぞれ一連のものとみることもできる。これらの帰属時期については，明確な成果が得られていない。サブトレンチで，掘り込み等も確認されていないことから，原位置であるかも不明である。石塔の帰属時期は宝徳２年（1450年）ではあるが，後世今の場所に移された可能性もあるため，時期や性格については，より慎重な追加調査が必要である。

堀切を挟んだ場所にある７・８号集石も円礫の構成から，１～６号集石と一連のものであると想定されるが，１～５号集石同様，慎重な判断は必要である。

堀切の南北側の平坦面に，Ｖ地区には10カ所のトレンチを設定した。南側にある堀切を挟んだ細長い平坦面側に49・50・64・65トレンチを設定した。64トレンチではⅢ層の掘り込みを確認したが，土砂の流れ込みが多く，明確な堀跡とは判断できなかった。

平坦面の49・50・65トレンチでは，堀切に並行する硬化面が検出された。堀切に並行することから，「犬走り」の可能性も考えられる。

堀切の北側には，54～59トレンチを設定した。54・55は堀切に並行に設定し，56～59は北側平坦面に設定した。遺物等はⅡ層から少量確認されたが，遺構は確認されず，自然堆積の砂礫層の堆積があることが確認された。

（２）遺物（第 63 図）

55Ｔ　191は成川式土器の壺と思われる底部である。192は縄文中期の深鉢の胴部と思われ，外面に煤が付着する。193は丸瓦で，焼成は悪く，製作時についたとみられる線状の痕跡が残る。

56Ｔ　194は瓦質土器の擂鉢で，底部に擂目の一部が残存する。195は青磁の碗で，胴部が内側にやや屈曲する。

58Ｔ　196は古代の土師器坏である。197は縄文後期土器と思われる。口縁部には粘土紐の接合痕を明瞭に残す。内面は横方向のミガキで調整される。

11 Ｗ地区（第 50 図）

Ｖ地区（八女壇）の一段下がった細長い平坦面に53・60～ 63トレンチを設定した。53トレンチは，Ｖ地区北側の堀切近くに位置するが，堀跡等の痕跡は確認できず，表土下は，土砂堆積層とＶ層が検出された。城郭の先端部に設定した 60トレンチは表土下10㎝で円礫層が検出された。表土は砂層であり，川内川の河川堆積物であった。61・62トレンチは約150㎝掘り下げたが，近年の河川堆積による砂層であった。よって，Ｗ地区は存城時の痕跡は認められなかった。

12 Ｘ・Ｙ地区（切岸）

城郭の東西に位置するＸ・Ｙ地区は自然の急崖の切岸部分である。対岸からは加久藤カルデラ由来の岩盤層が剥き出しになっている状態が確認できる。川内川の浸食によって形成された地形を残しており，川内川と急崖の切岸に囲まれた天然の要害となっている。

第４表　中・近世遺物観察表①（土師器・瓦質土器等）

挿図番号	掲載番号	地区	出土Ｔ	取上番号	層位	種別	器種	法量（cm）			調整		色調		備考
								口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面	
12	4	P	10T	33	Ⅱ	土師器	皿	－	－	－	回転ナデ	回転ナデ	橙	橙	灯明皿　煤付着　指頭圧痕
	7			29	Ⅱ	瓦質土器	火鉢	40.3	－	－	回転ナデ	回転ナデ	橙	橙黄	内面に煤付着
16	10	Q	11T	962	Ⅲ	土師器	皿	－	5.8	－	回転ナデ	回転ナデ	橙	橙	糸切底
	14		12T	399	Ⅲ	土師器	皿	7.2	5	1.7	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙	にぶい橙	灯明皿，糸切底
	15			1187	Ⅲ	土師器	皿	6.4	3.8	1.55	回転ナデ	回転ナデ	橙	にぶい橙	灯明皿，煤付着，·糸切底
	27		27T	851	Ⅲ	土師器	皿	7.3	5	1.8	－	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	
	37			597	Ⅲ	瓦質土器	捏鉢・擂鉢	－	－	－	回転ナデ	回転ナデ	灰白	灰白	
	38			612	Ⅲ	瓦質土器	擂鉢	－	－	－	ナデ	回転ナデ	淡黄橙	淡黄橙	肥前系・注口部
	40		28T	829	Ⅲ	土師器	坏	－	8.4	－	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	灰白	外面胴部煤付着，·糸切底
17	48	Q	29T	906	Ⅲ	土師器	坏	－	6	－	回転ナデ	回転ナデ	橙	浅黄橙	糸切底
	49			900	Ⅲ	土師器	坏	－	8.6	－	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	糸切底
	56			679	Ⅲ	瓦質土器	火鉢・風炉	－	－	－	ミガキ	ナデ	橙	橙	格子スタンプ文
	57			531	Ⅲ	瓦質土器	火鉢・風炉	－	－	－	ミガキ	ナデ	橙	橙	蓮弁スタンプ文・煤付着
	58			799	Ⅲ	瓦質土器	火鉢・風炉	－	－	－	ミガキ	ナデ	にぶい黄橙	灰黄褐	
	59			807	Ⅲ	瓦質土器	火鉢・風炉	－	－	－	ミガキ	ナデ	黒	褐灰	内外面イブシ
	67		31T	4	Ⅱ	土師器	坏	－	7.8	－	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	糸切底
	68			2，一括	Ⅱ	瓦質土器	塊	8.2	5.8	4.2	ナデ	ナデ	にぶい赤褐	にぶい橙	高台内面にハケメ痕
34	92	S	25T	1013	土坑	土師器	皿	11.6	7.2	2.5	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	糸切底
	93			991	埋土内	土師器	皿	12	7	2.4	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	糸切底
36	94	S	70T	54	溝埋土内	土師器	皿	－	4.6	－	回転ナデ	回転ナデ	橙	にぶい橙	糸切底
	95			－		土師器	皿	－	7.6	－	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙	黄灰	煤付着
	96			56		土師器	皿	－	5.6	－	回転ナデ	回転ナデ	淡橙	橙	糸切底
37	101	S	18T	131	Ⅱ	瓦質土器	擂鉢	－	－	－	ナデ	ナデ	褐灰	浅黄	表面イブシ
	115		71T	一括	Ⅱ	土師器	皿	11.8	－	－	回転ナデ	回転ナデ	にぶい赤橙	赤褐	
	116			39	Ⅱ	土師器	坏	－	9.8	－	回転ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
	117			47	Ⅱ	土師器	皿	－	6.6	－	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	糸切底
	118			37	Ⅱ	土師器	皿	－	7.4	－	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	糸切底
	125			52	Ⅱ	土師器	メンコ？	－	－	－	ナデ	回転ナデ	橙	橙	糸切底
	126		67T	17	Ⅱ	土師器	皿	8.6	6.4	2.1	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	灯明皿（煤付着），糸切底
	127			一括	Ⅱ	瓦質土器	捏鉢	－	－	－	回転ナデ	回転ナデ	灰	灰	
	128			一括	Ⅱ	瓦質土器	焜炉	－	－	－	回転ナデ	回転ナデ	橙	橙	内面に煤付着
	133		25T	1283	Ⅱ	瓦質土器	火鉢	－	－	－	回転ナデ	ナデ	灰黄	灰黄	突帯あり
	137		26T	1344	Ⅱ	瓦質土器	捏鉢・擂鉢	－	－	－	ナデ	ナデ	黒褐	黄灰	
38	150	S	精査時	一括	Ⅰ	瓦質土器	火鉢	－	－	－	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	スタンプ文（巴文）
	151				Ⅰ	瓦質土器	擂鉢	－	－	－	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
43	165	E’	34T	1280	Ⅱ	瓦質土器	風炉	－	－	－	ミガキ	ミガキ	黄橙	黄橙	
	166			96	Ⅱ	瓦質土器	風炉	－	－	－	ミガキ	ミガキ	灰黄褐	にぶい黄橙	
47	180		36T	15	Ⅱ	瓦質土器	羽釜	－	－	－	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	鍔。下部に煤付着
	186	T	41T	1159	Ⅱ	瓦質土器	羽釜・火鉢	－	－	－	ミガキ	ミガキ	黒	灰褐	
63	194	V	56T	986	Ⅲ	瓦質土器	擂鉢	－	14.4	－	ナデ	ナデ	褐灰	浅黄橙	擂目が一部残存
	196	V	58T	662・668	Ⅲ	土師器	坏	10.7	4.2	4.3	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	古代

第５表　中・近世遺物観察表②（陶磁器等）

挿図番号	掲載番号	地区	出土Ｔ	取上番号	層位	種別	器種	法量（cm）			胎土の色調	釉薬の色調・種類	施釉部位	時期	分類	備考
								口径	底径	器高						
12	2	P	9T	35	Ⅱ	青磁	碗	－	－	－	浅黄	明緑灰	残存部全面施釉	14Ｃ～15Ｃ中頃	上田Ｄ類	
	3			一括	Ⅱ	青磁	碗	－	－	－	灰白	オリ-ブ灰	残存部全面施釉	14Ｃ～15Ｃ中頃	上田Ｄ類	
	5		10T	31	Ⅱ	青磁	碗	－	－	－	灰白	灰オリ-ブ	残存部全面施釉	14Ｃ～16Ｃ中頃	上田Ｂ類	線描蓮弁文
	6			33	Ⅱ	青磁	稜花皿	11.4	5.6	2.4	黄灰	オリ-ブ	高台内底面無釉	14Ｃ後半～	明代皿	高台内面中央に粘土付着
16	11	Q	11T	586	Ⅲ	青磁	碗	－	－	－	灰白	オリ-ブ灰	残存部全面施釉	14Ｃ～15Ｃ中頃	上田Ｄ類	
	12			105	Ⅰ	赤絵	碗	－	－	－	灰白	緑釉	内外面1部のみ	－	－	
	13			651	Ⅲ	朝鮮陶器	碗	－	－	－	灰白	透明釉	残存部全面施釉	14Ｃ～15Ｃ中頃	－	李朝期・白象嵌・黒象嵌
	16		12T	1184	Ⅲ	青磁	碗	21.2	－	－	灰白	オリ-ブ灰	残存部全面施釉	14Ｃ～15Ｃ中頃	上田Ｃ類	外面に雷文・蓮弁文
	17			415	Ⅲ	青花	皿	11.4	－	－	淡黄	透明釉	残存部全面施釉	15Ｃ後半～16Ｃ中頃	小野Ｃ群	漳州窯
	18			403	Ⅲ	青花	碗	－	5	－	淡黄	白釉	高台内底面無釉	－		漳州窯
	19			1110	Ⅲ	近世陶器	碗	－	3.8	－	にぶい黄橙	白釉	外面腰部～高台無釉	16Ｃ末～17Ｃ初頭	近世	唐津焼
	20			255	Ⅲ	近世陶器	小型瓶	7.2	－	－	黄灰	鉄釉	残存部全面施釉	－	近世	薩摩焼
	21			1101	Ⅱ	近世陶器	蓋	－	－	－	灰黄	褐釉	端部付近施釉	－	近世	
	22		13T	－	Ⅰ	青花	皿	－	6	－	灰白	透明釉	畳付釉剥ぎ	15Ｃ後半～16Ｃ中頃	小野Ｄ群	畳付砂付着，景徳鎮窯
	23		14T	357	Ⅲ	青磁	碗	－	－	－	灰白	オリ-ブ灰	残存部全面施釉	14Ｃ～15Ｃ中頃	上田Ｄ類	
	24			371	Ⅲ	青磁	坏	－	－	－	灰白	オリ-ブ灰	残存部全面施釉	－	－	蓮弁文，被熱痕あり
	25			362	Ⅲ	青磁	碗	－	5.4	－	灰白	オリ-ブ灰	高台内底面無釉	－	－	見込み部分無釉
	26			191	Ⅱ	磁器	皿	－	3.8	－	灰黄	透明釉	残存部全面施釉	－	－	肥前系
	28		27T	734	Ⅲ	青磁	碗	－	－	－	灰	オリ-ブ灰	残存部全面施釉	14Ｃ初頭～後半	太宰府Ⅱ類	鎬蓮弁文
	29			836	Ⅲ	青磁	碗	－	－	－	灰白	灰オリ-ブ	残存部全面施釉	－	－	
	30			845	Ⅲ	青磁	碗	－	4.8	－	灰白	灰白	高台内底面無釉	－	－	
	31			916	Ⅲ	青磁	碗	－	5.8	－	浅黄橙	明黄褐	高台内底面無釉	15Ｃ以降	－	高台内底面に赤色顔料
	32			726	Ⅲ	白磁	多角坏	－	－	－	淡黄色	透明釉	腰部無釉	15Ｃ前半～中頃	森田Ｄ群	
	33			348	Ⅲ	赤絵	皿	－	－	－	白	透明釉	残存部全面施釉	－	－	
	34			731	Ⅲ	青白磁	蓋	－	－	－	白	瑠璃釉	内面無釉	－	－	
	35			720	Ⅲ	中国陶器	天目碗	－	5	－	にぶい黄橙	鉄釉	外面腰部以下無釉	－	－	
	36			499	Ⅲ	中国陶器	壺	－	－	－	黄灰	褐釉	外面施釉	－	－	全体摩滅
	41		28T	812	Ⅲ	青磁	碗	－	－	－	灰白	灰オリ-ブ	残存部全面施釉	14Ｃ～16Ｃ中頃	上田Ｂ類	細描蓮弁文
	42			469	Ⅲ	青磁	坏	－	－	－	灰白	オリ-ブ	残存部全面施釉	－	－	

第５表　中・近世遺物観察表②（陶磁器等）

挿図番号	掲載番号	地区	出土T	取上番号	層位	種別	器種	法量（cm）			胎土の色調	釉薬の色調・種類	施釉部位	時期	分類	備考
								口径	底径	器高						
16	43	Q	28T	702	Ⅲ	青磁	坏	－	－	－	黄灰	浅黄	残存部全面施釉	－	－	
	44			477	Ⅰ	青磁	碗	－	－	－	灰白	オリーブ灰	残存部全面施釉	15C以降	－	
	45			701	Ⅲ	白磁	皿	12	－	－	灰白	透明釉	残存部全面施釉	15C後半～16C	森田E群	
	46			817	Ⅲ	中国陶器	大甕	－	－	－	浅黄橙	鉄釉	内面無釉	－	－	
	47			828	Ⅲ	陶器	擂鉢	－	－	－	にぶい赤褐	自然釉	－	－	－	備前，注口部
17	50	Q	29T	801	Ⅲ	青磁	碗	－	－	－	灰	灰オリーブ	残存部全面施釉	－	－	片彫の草花文
	51			786	Ⅲ	青磁	碗	－	－	－	浅黄	オリーブ灰	残存部全面施釉	14C～15C中頃	上田D類	
	52			804	Ⅲ	青磁	碗	－	5.4	－	灰白	オリーブ灰	見込み･高台内底面無釉	－	－	
	53			633	Ⅲ	青磁	坏	－	－	－	灰白	オリーブ黄	残存部全面施釉	14C後半～15C後半	上田E類	
	54			430	Ⅱ	白磁	皿	－	7.7	－	灰白	透明釉	畳付釉剥ぎ	15C前半～中頃	森田D群	
	55			428	Ⅲ	青花	碗	－	－	－	灰白	透明釉	残存部全面施釉	15C後半～16C中頃	小野C群	漳州窯，外面に芭蕉葉文
	60			630	Ⅲ	中国陶器	壺	－	－	－	灰褐	－	－	－	－	
	61			798	Ⅲ	陶器	甕	－	－	－	浅黄	-	-	－	－	備前
	62			441	Ⅱ	陶器	水注	－	－	－	にぶい橙	鉄釉	残存部全面施釉	－	－	薩摩苗代川，近世
	64		30T	574	Ⅱ	白磁	皿	－	－	－	灰白	透明釉	口唇部釉剥ぎ	13C中頃～14C初頭	大宰府区類	口禿
	65			580	Ⅱ	白磁	皿	9.8	－	－	灰白	透明釉	残存部全面施釉	15C後半～16C	森田E群	
	69		31T	一括	Ⅰ	青磁	碗	－	－	－	灰白	灰オリーブ	残存部全面施釉	14C～16C中頃	上田B類	細描蓮弁文
	70			6	Ⅱ	青磁	坏	－	－	－	灰白	オリーブ	残存部全面施釉	－	－	
	72		63T	298	Ⅱ	青磁	碗	－	－	－	灰白	オリーブ灰	残存部全面施釉	14C～16C中頃	上田B類	細描蓮弁文
	73			291	Ⅲ	青磁	稜花皿	11.2	－	－	浅黄	オリーブ黄	残存部全面施釉	－	－	
21	81	R	15T	1330	Ⅲ	青磁	皿	－	4.4	－	灰白	透明釉	高台内露胎	15C後半～16C中頃	小野C群	漳州窯，内面赤色化
	82			187	Ⅲ	青花	碗	－	－	－	灰白	透明釉	残存部全面施釉	15C後半～16C中頃	小野C･D群	
	83			一括	Ⅰ	青花	碗	－	－	－	灰白	透明釉	残存部全面施釉	15C後半～16C中頃	小野C･D群	
	84			1343	Ⅲ	青花	碗	－	－	－	灰白	透明釉	残存部全面施釉	15C後半～16C中頃	小野C･D群	
	85			171	Ⅲ	青花	碗	－	－	－	灰白	透明釉	残存部全面施釉	14C後半～15C中頃	小野B群	
	86			183	Ⅲ	青花	碗・皿	－	5.2	－	灰白	透明釉	畳付は釉剥ぎ	－	－	
	87			352	Ⅲ	陶器	碗	－	3.6	－	灰褐	灰釉	外面底部以下無釉	16C末～17C初頭	－	唐津焼
	88		16T	152	Ⅱ	青磁	碗	－	－	－	灰白	オリーブ灰	残存部全面施釉	－	－	
36	97	S	70T	一括	溝	青花	皿	－	－	－	灰白	透明釉	残存部全面施釉	14C後半～15C中頃	小野B群	
	98			一括	埋土	陶器	合子	3.0	2.5	1.0	灰白	ー	－	－	－	内面底部に赤色顔料付着
	99			57	内	中国陶器	壺	－	－	－	褐灰	褐釉	残存部全面施釉	－	－	
37	103	S	20T	1242	Ⅰ	白磁	皿	－	3.1	－	灰白	透明釉	高台内底面無釉	15C前半～中頃	森田D群	
	104			1243	Ⅰ	磁器	筒形碗	－	3.4	－	灰白	透明釉	畳付釉剥ぎ	18C後半	－	肥前系
	107		72T	一括	Ⅱ	陶器	蓋	14	－	－	灰褐	鉄釉	上面施釉	18C後半	－	薩摩苗代川
	108		66T	一括	－	青磁	碗	－	－	－	灰白	オリーブ黄	残存部全面施釉	14C～16C中頃	上田B類	
	109			53	Ⅱ	青磁	碗	－	5.4	－	灰白	灰オリーブ	高台内底面無釉	ー	ー	
	110			一括	Ⅰ	陶器	天目碗	－	－	－	灰黄	鉄釉	残存部全面施釉	－	－	
	111		23T	1392	Ⅲ	白磁	皿	11.4	－	－	灰白	透明釉	残存部全面施釉	15C後半～16C	森田E群	
	112			1053	Ⅱ	青花	皿	－	7.2	－	灰白	透明釉	畳付釉剥ぎ	16C末期～17C初頭	小野B群	見込みに玉取獅子
	113			1353	Ⅱ	陶器	壺	－	－	－	褐灰	－	－	14C代	－	備前
	114			一括	Ⅱ	陶器	壺	－	－	－	褐灰	－	－		－	備前
	119		71T	42	Ⅱ	青磁	碗	－	－	－	灰白	灰オリーブ	口唇部外面釉剥ぎ	14C～15C中頃	上田D類	
	120			40	Ⅱ	青磁	坏	－	－	－	灰白	オリーブ灰	高台内底面無釉	14C後半～	明代皿	削り出し蓮弁文
	121			51	Ⅱ	青磁	坏	12	－	－	浅黄	灰白	残存部全面施釉	－	－	
	122			－	Ⅱ	青磁	盤	26.8	－	－	浅黄橙	オリーブ黄	残存部全面施釉	14C後半～	明代盤	
	123			38,41	Ⅱ	陶器	擂鉢	－	－	－	にぶい橙・褐灰	－	－		－	備前
	130		25T	1004	Ⅱ	青花	碗	－	－	－	灰白	透明釉	残存部全面施釉	－	－	
	131			1008	Ⅱ	青花	皿	－	6.8	－	灰白	透明釉	畳付釉剥ぎ	16C末～17C初頭	小野B群	
	134		26T	1260	Ⅱ	青磁	碗	－	－	－	灰白	灰白	残存部全面施釉	－	上田C類？	
	135			1022	Ⅲ	中国陶器	壺	－	－	－	灰黄	褐釉	内面無釉	ー	－	
	136			1259	Ⅱ	中国陶器	壺	－	－	－	にぶい黄橙	褐釉	内面無釉	－	－	
	138			1346	Ⅲ	磁器	碗	10.0	－	－	灰白	透明釉	残存部全面施釉	－	－	肥前系，外面菊文
38	139	S	精査時	一括	Ⅰ	青磁	坏	19.2	－	－	灰白	灰白	残存部全面施釉	14C～15C中頃	上田D類	
	140			一括	Ⅰ	青磁	碗	－	－	－	黄灰	灰オリーブ	残存部全面施釉	14C～16C中頃	上田B類	
	141			一括	Ⅰ	青磁	碗	－	－	－	灰	オリーブ黄	残存部全面施釉	14C～16C中頃	上田B類	
	142			一括	Ⅰ	青磁	碗	－	5.2	－	灰白	灰オリーブ	高台内底面無釉	14C～16C中頃	上田B類	高台内底面輪状に釉剥ぎ
	143			一括	Ⅰ	青花	碗	13	－	－	灰白	透明釉	残存部全面施釉			
	144			一括	Ⅰ	青花	皿	－	5	－	灰白	透明釉	高台内側畳付露胎	－	－	漳州窯
	145			一括	Ⅰ	青花	皿	－	6	－	灰白	透明釉	畳付釉剥ぎ	－	－	
	146			一括	Ⅰ	青花	皿	30	－	－	灰白	透明釉	残存部全面施釉	－	－	大皿
	147			一括	Ⅰ	中国陶器	壺・甕	－	17	－	灰黄褐	褐釉	内底面無釉		－	
	148			一括	Ⅰ	陶器	大甕	－	－	－	褐灰	黄褐色釉	外面施釉	－	－	備前，自然釉
	149			一括	Ⅰ	陶器	甕	－	－	－	褐灰	黄褐色釉	外面施釉	－	－	備前
43	159	E'	34T	28	Ⅱ	青磁	碗	－	－	－	浅黄	オリーブ灰	残存部全面施釉	14C～15C中頃	上田D類	
	160			6	Ⅰ	青磁	碗	－	6.2	－	灰	灰白色	見込み･高台内底面無釉	－	－	
	161			17	Ⅱ	青磁	坏	11.8	－	－	浅黄	オリーブ黄	残存部全面施釉	ー	ー	
	162			92	Ⅱ	青磁	坏	13	－	－	灰白	オリーブ灰	残存部全面施釉	ー	ー	
	163			87	Ⅱ	青磁	坏	－	4.6	－	灰白	灰オリーブ	高台内底面無釉	ー	ー	高台内底面輪状に釉剥ぎ
	164			1076	Ⅱ	中国陶器	壺	－	－	－	にぶい橙	鉄釉	外面施釉	－	－	
	167			95	Ⅱ	陶器	擂鉢	－	－	－	赤褐	－	－	14C前半～	間壁Ⅲ期	備前，6条の擂目
	168			93	Ⅱ	陶器	擂鉢	－	17	－	にぶい橙	鉄釉	胴部外面施釉	18C前半	－	薩摩苗代川
	174		35T	一括	Ⅱ	青磁	碗	－	－	－	灰白	オリーブ灰	残存部全面施釉	－	－	
	175			一括	Ⅱ	青花	碗	－	4.4	－	灰白	透明釉	畳付高台内底無釉	15C後半～16C中頃	小野C群	蓮子碗

第５表　中・近世遺物観察表②（陶磁器等）

挿図番号	掲載番号	地区	出土Ｔ	取上番号	層位	種別	器種	法量（cm）			胎土の色調	釉薬の色調・種類	施釉部位	時期	分類	備考
								口径	底径	器高						
43	176	E’	35T	一括	Ⅱ	青花	碗	－	4.8	－	灰白	透明釉	畳付釉剥ぎ	15Ｃ後半～16Ｃ中頃	小野Ｃ群	蓮子碗
	177			一括	Ⅱ	中国陶器	壺	－	－	－	灰黄	鉄釉	残存部全面施釉	近世	－	薩摩苗代川
	178			一括	Ⅱ	陶器	甕	－	－	－	黄灰	－	－	近世	－	刻目突帯，花文スタンプ
47	181	T	41T	1164	Ⅱ	青花	碗	13.2	－	－	浅黄	透明釉	残存部全面施釉	15Ｃ後半～16Ｃ中頃	小野Ｃ群	外面草文，漳州窯
	182			1166	Ⅱ	青花	碗	12	－	－	灰白	透明釉	残存部全面施釉	15Ｃ後半～16Ｃ中頃	小野Ｃ群	
	183			1168	Ⅱ	青花	碗	12.4	－	－	灰白	透明釉	残存部全面施釉	15Ｃ後半～16Ｃ中頃	小野Ｃ群	内面櫛文と十字文
	184			1174	Ⅱ	青花	碗	－	－	－	灰白	透明釉	残存部全面施釉	15Ｃ後半～16Ｃ中頃	小野Ｃ群	
	185			1167	Ⅰ	青花	皿	－	－	－	灰白	透明釉	残存部全面施釉	－	－	外面に草花文
	187		42T	1252･1256	Ⅱ	青花	碗	12.4	－	－	灰白	透明釉	残存部全面施釉	－	－	184と同一？
	188			1250	Ⅱ	青花	碗	－	－	－	灰白	透明釉	残存部全面施釉	15Ｃ後半～16Ｃ中頃	小野Ｃ群？	外面に梵字文
	189			1248	Ⅲ	青花	碗	－	4.4	－	灰白	透明釉	畳付釉剥ぎ	16Ｃ中頃～後半	小野Ｅ群	高台内に「大明年製」
49	190	T	73T	一括	Ⅰ	青花	碗	11.3	5.2	3	灰白	透明釉	内面見込み・外面腰部下露胎	－	－	ニカワによる接合跡？
63	195	V	56T	988･989	Ⅳ	青磁	碗	－	－	－	灰白	オリーブ灰	残存部全面施釉	－	－	

第６表　中・近世遺物観察表③（瓦）

挿図番号	掲載番号	地区	出土Ｔ	取上番号	層位	種類	法量		胎土の色調	備考
							長さ	幅		
17	66	Q	30T	565	Ⅱ	平瓦	－	－	灰白	焼成甘く，土師器質
21	89	R	16T	154	Ⅱ	平瓦	－	－	灰白	縄目?
37	105	S	21T	1234	Ⅰ	平瓦	－	－	灰	
	106		69T	一括	Ⅱ	平瓦	－	－	にぶい黄橙	イブシ
	132		25T	992	Ⅱ	平瓦	－	－	灰白	イブシ
43	170	E’	34T	118	Ⅱ	平瓦	－	－	灰白	
	171			一括	Ⅰ	桟瓦	－	－	灰黄	
	172			83	Ⅱ	平瓦	－	－	にぶい黄橙	
	173			1274	Ⅱ	平瓦	－	－	灰白	
63	193	V	55T	1040	Ⅱ	丸瓦	－	－	灰オリーブ	

第７表　中・近世遺物観察表④（鉄製品・土製品等）

挿図番号	掲載番号	地区	出土Ｔ	取上番号	層位	器種	法量（cm）			備考
							長さ	幅	厚さ	
12	8	P	10T	32	Ⅱ	滑石製品	3.9	2.4	0.95	石鍋再加工品
	9		10T	26	Ⅱ	古銭	2.2	2.2	0.1	寛永通寶
16	39	Q	27T	599	Ⅲ	土錘	3.9	1.4		胎土：にぶい黄橙色
17	63	Q	29T	436	Ⅱ	貝片	2.3	2.3	0.1	夜光貝？
	71		31T	1	Ⅱ	土錘	3.5	1.6		胎土：灰白色
21	90	R	16T	一括	Ⅲ	煙管	5.1	1	0.15	青銅製，吸口
	91		16T	1310	Ⅲ	鉄釘	8.4	1.3	0.7	
36	100	S	70T	55	溝埋土内	鉄釘	5.1	1.2	0.6	長さは残存部のみ
37	102	S	19T	1215	Ⅱ	鉄釘	4.95	2.2	0.7	
	124		71T	一括	Ⅰ	鉄釘	4	1.2	0.8	長さは残存部のみ
	129		70T	一括	Ⅰ	轡	－	－	－	鉄製
38	152	S	精査時	一括	Ⅰ	鞘の羽口	－	－	－	先端に鉄滓付着
	153		20T	一括	Ⅰ	鉄釘	4.3	1.6	0.7	
	154		精査時	一括	Ⅰ	煙管	18.4	0.85	－	青銅製
	155			一括	Ⅰ	轡	－	－	－	鉄製
43	169	E’	34T	1083	Ⅱ	土錘	3.9	1.2		胎土：浅黄色
	179	E’	35T	一括	Ⅱ	土錘	3.1	1.1		胎土：灰黄色

第８表　縄文・古墳時代遺物観察表

挿図番号	掲載番号	地区	出土T	取上番号	層位	器種	部位	調整(文様)		色調		胎土						備考（時期）
								外	内	外面	内面	石英	長石	雲母	角閃石	砂粒	小粒	
40	156	E’	34T	2,4,14	Ⅲ	深鉢	胴部	ナデ	ナデ	にぶい褐	灰黄褐	○	○		○	○	○	楕円押型文（縄文早期）
	157			9	Ⅲ	深鉢	胴部	ナデ	ナデ	暗黄褐	にぶい黄褐	○			○		○	山形押型文（縄文早期）
	158			29	Ⅱ	深鉢	胴部	ナデ	ナデ	暗褐	暗褐	○	○		○	○	○	山形押型文（縄文早期）
63	191	V	55T	1042	Ⅱ	壺	底部	ナデ	ナデ	橙	暗黄灰		○		○	○	○	古墳(成川式)
	192		1038	Ⅱ	深鉢	胴部	貝殻条痕	ナデ	にぶい黄褐	黄褐	○		○			○	縄文中期～後期	
	197		58T	665	Ⅱ	深鉢	口縁部	ナデ	ミガキ	灰	にぶい橙	○		○	○		○	縄文後期

第９表　石器観察表

挿図番号	掲載番号	地区	出土Ｔ	取上番号	層位	器種	石材	法量(cm)			重量	備考
								長さ	幅	厚さ	（g）	
8	1	N	表採	一括	Ⅰ	砥石	砂岩	22.6	9.6	9.6	4000	使用痕跡は2面，金床石再利用
18	74	Q	11T	956	Ⅲ	打製石鏃	黒曜石	1.7	1.3	0.3	0.5	
	75		12T	423	Ⅲ	磨石・叩石	軽石	7.5	6.2	3.7	42	
	76		27T	626	Ⅲ	砥石	天草陶石	3.5	8	1.5	63	中央部に凹み，天草砥石
	77		27T	605	Ⅲ	打製石斧	頁岩	4.1	6.1	1	26.5	刃先のみ残存
	78		28T	821	Ⅲ	磨石	凝灰岩	7	6.6	3	205.5	側面に敲打痕
	79		29T	795	Ⅲ	叩石	凝灰岩	12.9	12	4.6	1054	正面・側面に敲打痕
	80		29T	638	Ⅲ	調整薄片	黒曜石	2.1	1.6	0.6	1.5	

第４章　自然科学分析

虎居城跡における放射性炭素年代（AMS測定）

（株）加速器分析研究所

１　測定対象試料

虎居城跡は，鹿児島県薩摩郡さつま町宮之城屋地に所在する。測定対象試料は，炭化物3点である（第10表）。

２　化学処理工程

（１）メス・ピンセットを使い，根・土等の付着物を取り除く。

（２）酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後，超純水で中性になるまで希釈し，乾燥させる。AAA処理における酸処理では，通常1mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い，0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」，1M未満の場合は「AaA」と第10表に記載する。

（３）試料を燃焼させ，二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

（４）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

（５）精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し，グラファイト（C）を生成させる。

（６）グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め，それをホイールにはめ込み，測定装置に装着する。

３　測定方法

加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し，^{14}Cの計数，^{13}C濃度（$^{13}C/^{12}C$），^{14}C濃度（$^{14}C/^{12}C$）の測定を行う。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

４　算出方法

（１）$\delta^{13}C$ は，試料炭素の^{13}C 濃度（$^{13}C/^{12}C$）を測定し，基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（第10表）。AMS装置による測定値を用い，表中に「AMS」と注記する。

（２）^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は，過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され，1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には，Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C年代は$\delta^{13}C$によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第10表に，補正していない値を参考値として第11表に示した。^{14}C年代と誤差は，下1桁を丸めて10年単位で表示される。また，^{14}C年代の誤差（±1σ）は，試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

（３）pMC（percent Modern Carbon）は，標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。pMCが小さい（^{14}Cが少ない）ほど古い年代を示し，pMCが100以上（^{14}Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値も$\delta^{13}C$によって補正する必要があるため，補正した値を第10表に，補正していない値を参考値として第11表に示した。

（4）暦年較正年代とは，年代が既知の試料の^{14}C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ，過去の^{14}C濃度変化などを補正し，実年代に近づけた値である。暦年較正年代は，^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり，1標準偏差（1σ＝68.2%）あるいは2標準偏差（2σ＝95.4%）で表示される。グラフの縦軸が14C年代，横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は，$\delta^{13}C$補正を行い，下一桁を丸めない^{14}C年代値である。なお，較正曲線および較正プログラムは，データの蓄積によって更新される。また，プログラムの種類によっても結果が異なるため，年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは，暦年較正年代の計算に，IntCal13データベース（Reimer et al. 2013）を用い，OxCalv4.2較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については，特定のデータベース，プログラムに依存する点を考慮し，プログラムに入力する値とともに参考値として第11表に示した。暦年較正年代は，^{14}C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

５　測定結果

試料の測定結果を第10・11表に示す。

試料の^{14}C年代は，１が410±20yrBP，２が680±20yrBP，３が340±20yrBPである。暦年較正年代（1σ）は，１が1444～1472cal ADの範囲，２が1280～1379cal ADの間に2つの範囲，３が1495～1632cal ADの間に３つの範囲で示される。

試料の炭素含有率はすべて50%を超え，化学処理，測定上の問題は認められない。

文献

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55(4), 1869-1887

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, Radiocarbon 19(3), 355-363

第10表　放射性炭素年代測定結果（δ ^{13}C補正値）

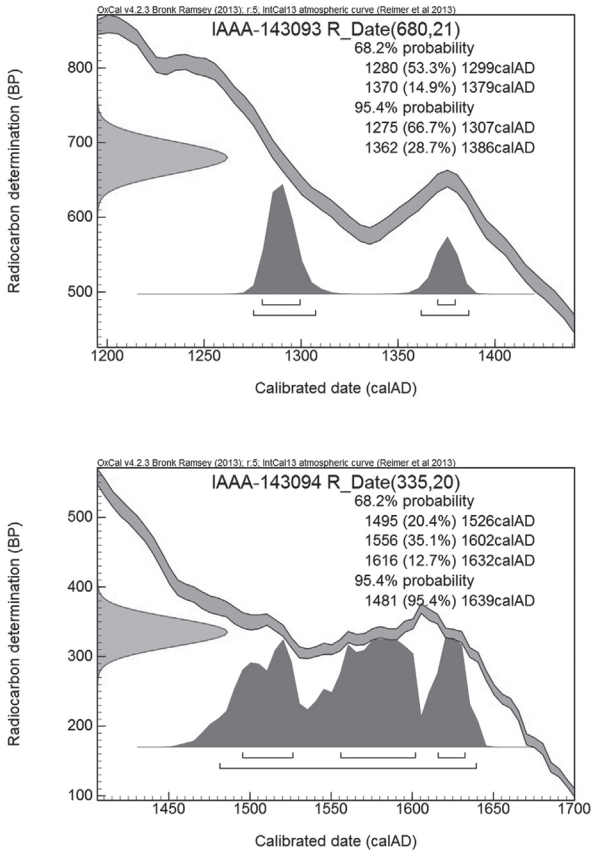
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ ^{13}C (‰) (AMS)	δ ^{13}C補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC (%)
IAAA-143092	1	取上No.934(28TⅡ層)	炭化物	AAA	**-27.31 ± 0.27**	**410 ± 20**	**95.02 ± 0.25**
IAAA-143093	2	取上No.944(27TⅡ層)	炭化物	AAA	**-26.94 ± 0.27**	**680 ± 20**	**91.88 ± 0.25**
IAAA-143094	3	取上No.1294(12TⅡ層)	炭化物	AAA	**-27.15 ± 0.30**	**340 ± 20**	**95.91 ± 0.24**

［#7148］

第11表　放射性炭素年代測定結果（δ ^{13}C未補正値，暦年較正用 ^{14}C年代，較正年代）

測定番号	δ ^{13}C補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-143092	450 ± 20	94.57 ± 0.24	410 ± 21	1444calAD - 1472calAD (68.2%)	1436calAD - 1496calAD (90.4%) 1601calAD - 1615calAD (5.0%)
IAAA-143093	710 ± 20	91.51 ± 0.24	680 ± 21	1280calAD - 1299calAD (53.3%) 1370calAD - 1379calAD (14.9%)	1275calAD - 1307calAD (66.7%) 1362calAD - 1386calAD (28.7%)
IAAA-143094	370 ± 20	95.49 ± 0.23	335 ± 20	1495calAD - 1526calAD (20.4%) 1556calAD - 1602calAD (35.1%) 1616calAD - 1632calAD (12.7%)	1481calAD - 1639calAD (95.4%)

［参考値］



第 66 図　暦年較正年代グラフ

虎居城跡における放射性炭素年代（AMS測定）

（株）加速器分析研究所

1　測定対象試料

虎居城跡は，鹿児島県薩摩郡さつま町宮之城屋地に所在する。測定対象試料は，炭化物4点である（第12表）。

2　化学処理工程

（1）メス・ピンセットを使い，土等の付着物を取り除く。
（2）酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後，超純水で中性になるまで希釈し，乾燥させる。AAA処理における酸処理では，通常1mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い，0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」，1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
（3）試料を燃焼させ，二酸化炭素（CO_2）を発生させる。
（4）真空ラインで二酸化炭素を精製する。
（5）精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し，グラファイト（C）を生成させる。
（6）グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め，それをホイールにはめ込み，測定装置に装着する。

3　測定方法

加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し，^{14}Cの計数，^{13}C濃度（$^{13}C/^{12}C$），^{14}C濃度（$^{14}C/^{12}C$）の測定を行う。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

4　算出方法

（1）δ^{13}C は，試料炭素の^{13}C 濃度（$^{13}C/^{12}C$）を測定し，基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（第12表）。AMS装置による測定値を用い，表中に「AMS」と注記する。
（2）^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は，過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され，1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には，Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C年代はδ^{13}Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第12表に，補正していない値を参考値として第13表に示した。^{14}C年代と誤差は，下1桁を丸めて10年単位で表示される。また，^{14}C年代の誤差（±1σ）は，試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
（3）pMC（percent Modern Carbon）は，標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。pMCが小さい（^{14}Cが少ない）ほど古い年代を示し，pMCが100以上（^{14}Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値もδ^{13}Cによって補正する必要があるため，補正した値を第12表に，補正していない値を参考値として第13表に示した。
（4）暦年較正年代とは，年代が既知の試料の^{14}C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ，過去の^{14}C濃度変化などを補正し，実年代に近づけた値である。暦年較正年代は，^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり，1標準偏差（1σ＝68.2%）あるいは2標準偏差（2σ＝95.4%）で表示される。グラフの縦軸が^{14}C年代，横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は，δ^{13}C補正を行い，下一桁を丸めない^{14}C年代値である。なお，較正曲線および較正プログラムは，データの蓄積によって更新される。また，プログラムの種類によっても結果が異なるため，年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは，暦年較正年代の計算に，IntCal13データベース（Reimer et al. 2013）を用い，OxCalv4.3較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については，特定のデータベース，プログラムに依存する点を考慮し，プログラムに入力する値とともに参考値として第13表に示した。暦年較正年代は，^{14}C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

5　測定結果

試料の測定結果を第12・13表，第67図に示す。

試料の14C年代は，No.1が330±20yrBP，No.2が350±20yrBP，No.3が520±20yrBP，No.4が340±20yrBPである。暦年較正年代（1σ）は，No.1が1498～1633cal ADの間に3つの範囲，No.2が1485～1630cal ADの間に2つの範囲，No.3が1411～1430cal ADの範囲，No.4が1492～1631calADの間に3つの範囲で示される。

試料の炭素含有率はすべて68%を超え，化学処理，測定上の問題は認められない。

文献

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360

Reimer,P.J.et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(4), 1869-1887

Stuiver M.and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, Radiocarbon 19(3), 355-363

第12表　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C補正値）

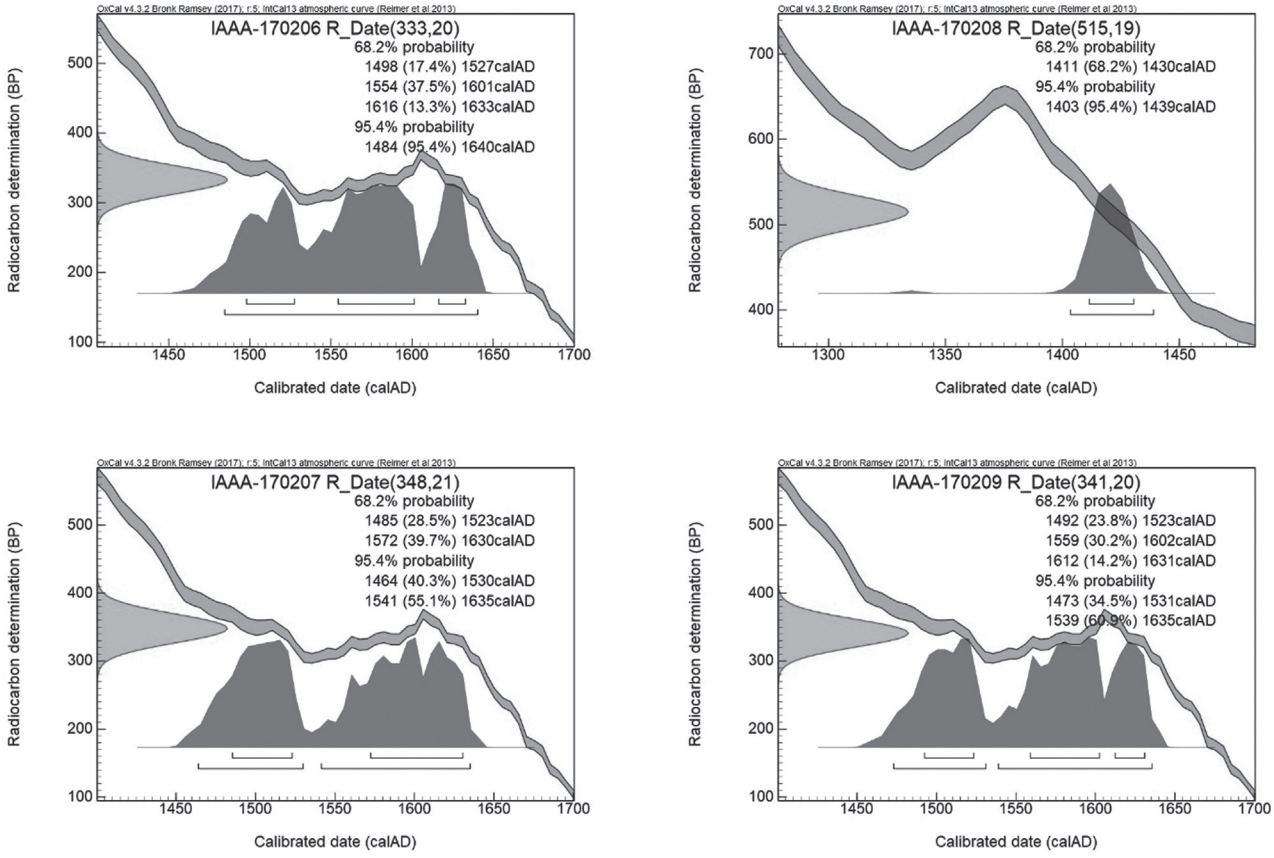
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C (‰) (AMS)	δ^{13}C補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
	No.1	70T　溝　埋土内	炭化物	AAA	**-28.66 ± 0.13**	**330 ± 20**	**95.93 ± 0.25**
IAAA-170207	No.2	71T　北側サブトレンチ	炭化物	AAA	**-28.64 ± 0.28**	**350 ± 20**	**95.75 ± 0.26**
IAAA-170208	No.3	71T　拡張部　Ⅱ層下面	炭化物	AAA	**-27.82 ± 0.17**	**520 ± 20**	**93.79 ± 0.23**
IAAA-170209	No.4	35T　Ⅱ層	炭化物	AAA	**-29.18 ± 0.15**	**340 ± 20**	**95.84 ± 0.24**

［#8542］

第13表　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C未補正値，暦年較正用^{14}C年代，較正年代）

測定番号	δ^{13}C補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC （%）			
IAAA-170206	390 ± 20	95.21 ± 0.25	333 ± 20	1498calAD - 1527calAD (17.4%) 1554calAD - 1601calAD (37.5%) 1616calAD - 1633calAD (13.3%)	1484calAD - 1640calAD (95.4%)
IAAA-170207	410 ± 20	95.03 ± 0.25	348 ± 21	1485calAD - 1523calAD (28.5%) 1572calAD - 1630calAD (39.7%)	1464calAD - 1530calAD (40.3%) 1541calAD - 1635calAD (55.1%)
IAAA-170208	560 ± 20	93.24 ± 0.22	515 ± 19	1411calAD - 1430calAD (68.2%)	1403calAD - 1439calAD (95.4%)
IAAA-170209	410 ± 20	95.02 ± 0.24	341 ± 20	1492calAD - 1523calAD (23.8%) 1559calAD - 1602calAD (30.2%) 1612calAD - 1631calAD (14.2%)	1473calAD - 1531calAD (34.5%) 1539calAD - 1635calAD (60.9%)

［参考値］



第 67 図　暦年較正年代グラフ

第５章　総　括

１　調査の成果

（１）縄文時代・古墳時代・古代

縄文早期～古代の遺物包含層は山城の構築時に全体的に削平または攪乱されているため，出土量もごく少量で，遺構は確認されなかった。

Ｅ’地区では縄文早期の押型文土器が数点出土した。Ｑ地点では，打製石鏃や磨石等が出土している。Ｖ地区では，縄文後期相当の土器が２点，古墳時代の成川式土器が１点，古代の土師器坏が１点出土している。

（２）中世・近世（第 68 図）

Ｎ～Ｖ地区では存城時の中世遺物がⅡ層から出土して¥いる。陶磁器の編年からみると16世紀中～後半の遺物が主体であり，渋谷氏後期から島津歳久～本郷氏の時期に相当する。渋谷氏前半期の遺物としては，Ｑ地点で14世紀後半～15世紀前半の遺物が少量ながら出土している。また，築城されたといわれる12世紀後半段階の遺物・遺構は確認されなかった。

遺物の出土量は土師器・中国陶磁器が最も多い。土師器皿は口縁部に煤が付着した灯明皿のほか，溶融した金属滓や錫玉が付着した坩堝・取鍋の転用品と考えられる個体も小片だが確認されている。鍛冶関連の遺物は，鉄滓のほか輔の羽口や釘等の鉄製品も出土している。Ｑ地区は炉跡や鉄滓が多く出土していることから，鍛冶関連遺構があったと考えられる。また，Ｒ・Ｓ・Ｅ’地区で炉跡が検出されていることから，曲輪内に竈や鍛冶関連の施設が配置されていたことが窺える。

陶磁器類は，15～16世紀代の中国陶磁器が主体で青磁・青花の碗・皿（食膳具）が多く，中国陶器・備前の甕（貯蔵・運搬具）や備前・瓦質土器の摺鉢（調理具）など，中世山城で出土する一般的な遺物は概ね確認できる。Ｅ’地区では風炉，Ｑ地区で李朝青磁碗，Ｓ地区で天目碗等の茶道具も少量ながら確認できる。

Ｅ地点（中の城）は，他の曲輪と比して優品が多く，重臣のクラスの曲輪であった可能性が指摘されている（上田2014）が，同じ曲輪のＥ’地区では優品の出土は確認できなかった。主郭のＳ地区曲輪（松社城）でも主郭に相当するような遺物は出土しておらず，確認調査では各曲輪の性格を示すような遺物の差異や出土傾向は確認できなかった。

検出された遺構の詳細な帰属時期・性格については，基本的に検出のみに留めたため不明な点が多い。年代測定を実施した遺構（12Ｔ炉跡・70Ｔ溝状遺構・71Ｔコの字状遺構）は，概ね15世紀中頃～17世紀中頃（南北朝期～近世初頭）の分析値が得られていることから，検出された遺構も同時期の範疇に収まると推測される。

いずれの地区にも近世遺物が少なからず出土している。肥前系磁器や薩摩焼等の陶磁器類のほか，瓦，寛永通寶，煙管などが出土している。近世の島津領下において，中世山城は元和の一国一城令で廃城になった後も城跡の開発が禁止され，麓の郷士によって維持・管理されていたことが指摘されており（堂込2003，若山2004），虎居城も近世遺物の出土や遺構の残存状況が良好なことから，廃城後も人が出入りし，大幅な地形改変はせずに城跡を利用・管理していたことが窺える。

なお，近世以降については，近現代の遺物が表面精査時に発見されている。

（３）遺構等の残存状況

虎居城跡の城域全体は約280,000㎡で，確認調査対象地が約90,000㎡（公園整備対象地），平成20・21年度の分水路建設に伴う記録保存調査範囲が60,000㎡，現宮之城中学校周辺地が約130,000㎡である。城内中央部の60,000㎡は分水路建設によって消滅しているが，城域の７割は残存している。宮之城中学校周辺地の現在は宅地になっており，残存状況は未調査のため不明である。

確認調査対象地については表面精査を行い，残存状況の確認を行った。調査対象地は，曲輪の形状や堀切，土塁，石塁，虎口などの表面遺構および石塔・集石が良好に残存していることが明らかとなった。また，遺物包含層・遺構も存城時のものが良好な状態で残存しており（第68図・第14表），全体的に地形の大幅な改変を受けずに存城時の状態が保たれている。

２　曲輪構成・施設の配置

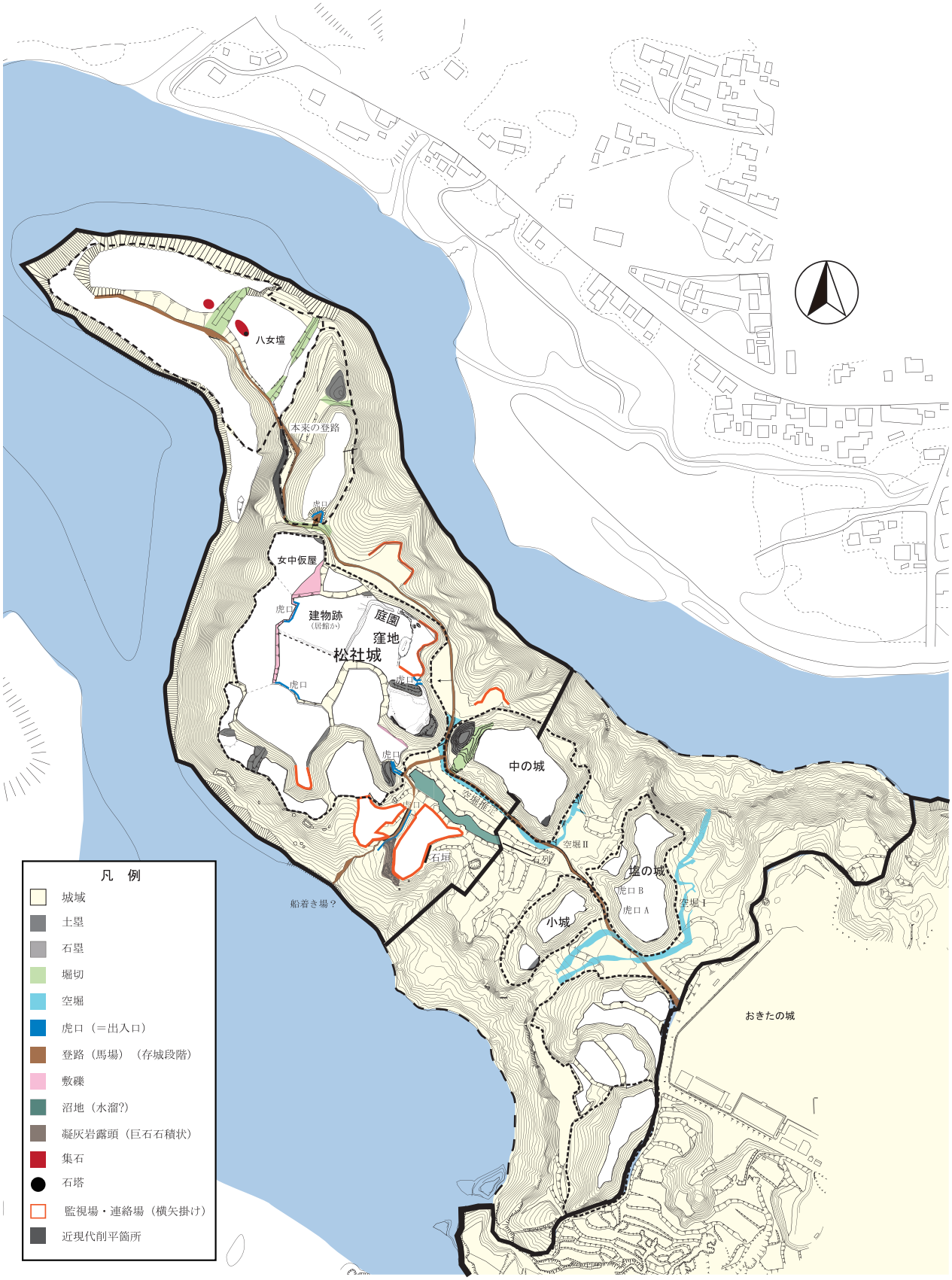
（１）曲輪の構成

虎居城は空堀や堀切を挟んだ小島状の連なる曲輪で構成される群郭式城郭である。

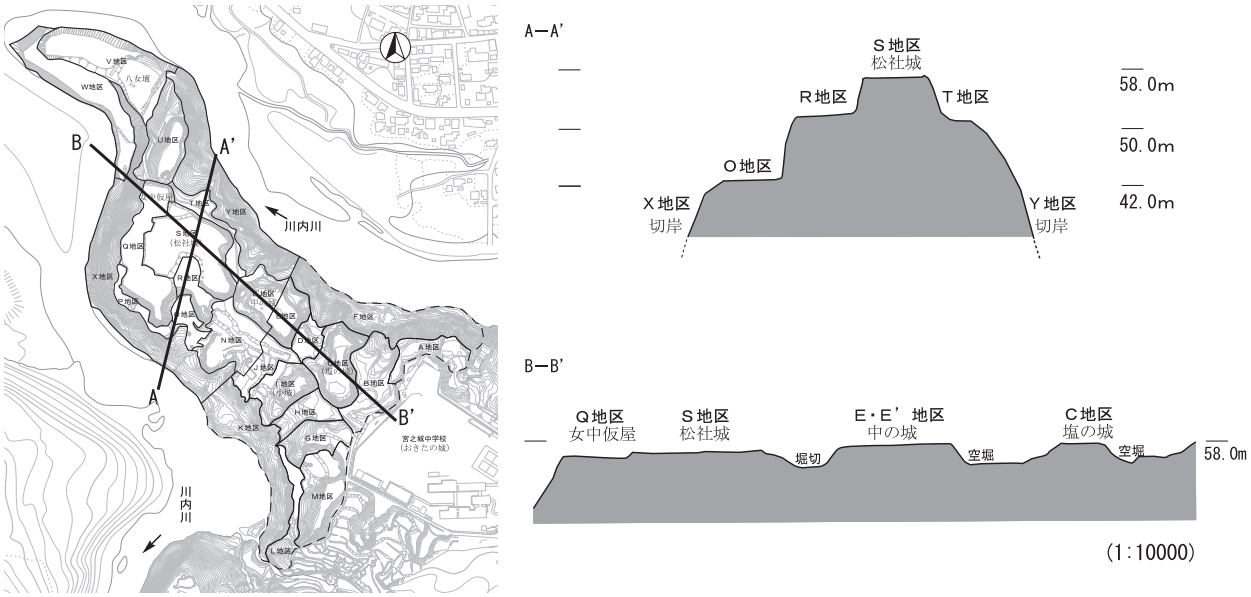
主郭以南の曲輪群（Ｅ’地区：中の城～Ｃ地区：塩の城）は，曲輪の周囲に空堀を巡らし，各曲輪が独立して並列する。曲輪の地形断面図（Ｂ－Ｂ’）をみると，塩の城～中の城～松社城が同レベル（約58m）の標高で曲輪の平坦面を造成しており，各曲輪間が並立的な構造であることがわかる（第69図）。

群郭式城郭の並立的な曲輪構造については，曲輪ごとに重臣が屋敷として使用した屋敷の集合体（千田1990・1993）ととらえるか，必ずしも家臣との主従関係（権力構造）を示すものではない（三木2000，中井2012）とする考えなど群郭式城郭の曲輪構成や機能については未だ未解明な点が多い。

群郭式城郭は並列した曲輪群のまとまりで主郭を不明瞭にする傾向があるが，虎居城は主郭の縄張りが明瞭



第 68 図　調査成果による遺構および縄張り（ S＝1：4000）



第 69 図　曲輪地形断面図（鹿埋セ 2011 を改変）

で求心性が強く，重要視されていたことがわかる。このことから，虎居城は南九州に特徴的な群郭式曲輪群（並立的）と主郭を取り巻く広大な縄張りの曲輪（求心的）を合わせもつ中世城郭といえる。

（２）曲輪の成立時期

南九州における群郭式城郭の成立時期は 14世紀後半～15世紀中頃とされている（上田2014）。虎居城跡の主体となる遺物時期は15～16世紀後半が主体を占める。Ｅ地区の南側を巡る空堀Ⅱの帰属時期は13世紀後半～16世紀前半に位置づけられており，13世紀後半には空堀が存在した可能性が指摘されている（鹿埋セ 2011）。空堀・曲輪の構築時期については今後の検討が必要だが，群郭式の曲輪群の基礎は渋谷氏の時期に築かれたと考えられる。渋谷氏以降は改修等を行われていたようだが，宮之城中学校周辺まで縄張りとなったのは本郷氏以降で，近世期には現在の市街地（屋地付近）に中心地は移行していく。

（３）多彩な施設

城内には，土塁・堀切といった防衛施設が複数箇所に配置されていることが明らかとなった（第68図）。

土塁　虎居城では曲輪南部に意識的に土塁を築造・配置している。Ｃ（塩の城）・Ｅ（中の城）・Ｉ（近藤屋敷）地区でも曲輪南端部に土塁が配置されており，Ｐ・Ｑ・Ｓ地区曲輪も同様である。特に主廓のＳ地区曲輪は，南部に三方に土塁を配置しており，他の曲輪と比べ防御性が高いことが窺える。城の三方は川内川が自然の堀として機能し，Ｃ・Ｅ地区南側に２つの空堀で曲輪間を強力に遮断する防衛線が張られていることから，陸続きの東・南部からの侵入を意識した土塁の配置になっている。

堀切　曲輪間を堀切で遮断することで，曲輪間を分断し，独立性と防御性の役割を果たしている。堀切を挟んで曲輪間に橋が架けられたといわれる市来鶴丸城の事例があり（松田・川崎訳1987），調査では確認されていないが，Ｓ地区曲輪とＥ’地区曲輪間は堀切の幅が狭いことから曲輪間に橋が架けられていた可能性がある。

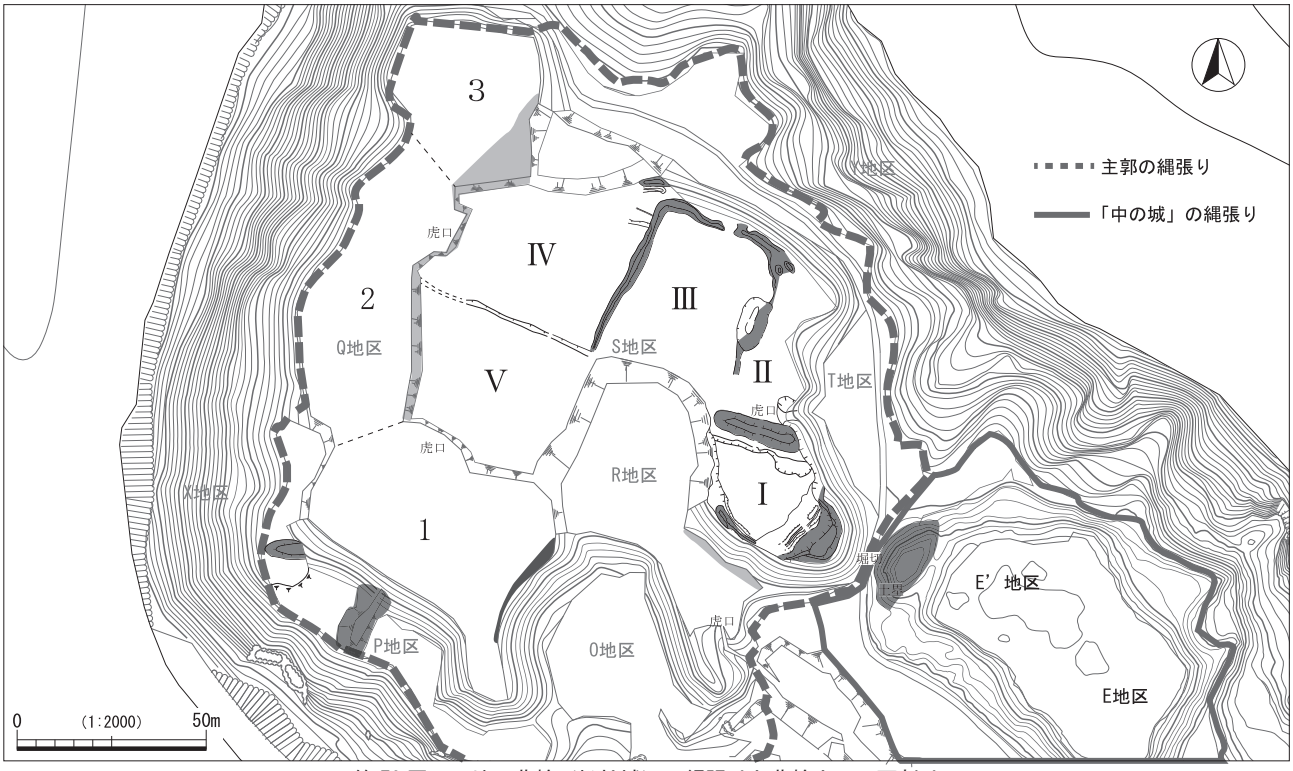
また，Ｓ地区とＵ地区曲輪間，Ｕ地区北部，Ｖ地区にも堀切が設けられている。特にＶ地区曲輪の堀切に挟まれた平坦面には石塔・集石があることから，防御的な機能をもつものではなく，聖なる空間として空間を仕切るための堀切であったと考えられる。

横矢掛け　城内には横矢掛けと思われる舌状に張り出した場所が東・西側に確認できる。谷状地形を生かした防衛施設として，監視場としての役割をもっていたと考えられる。凝灰岩を基盤とするＮ地区曲輪も西部の防御を意識した横矢掛けと同様の機能をもつ曲輪であった可能性が高い。

虎口　Ｎ地区曲輪とＯ地区曲輪に挟まれた川内川西際から城内への登城路やＲ地区曲輪の南部，Ｓ地区曲輪東・北部に曲輪に入る虎口がある。Ｓ地区曲輪東部虎口には敷石が確認された。虎口の敷石（踏み掛け・土留め石?）は塩の城や知覧城跡（蔵之城）にもみられ，近世期に改修された可能性がある。

Ｓ地区曲輪北部の虎口周辺には敷石の広がりを確認されており，敷石は土留めもしくは装飾的な機能をもつものと想定される（太田氏御教示による）。さらに，虎口は幅が広く，防御性が低いことからもＱ地区改修時に築造されたものと考えられる。Ｒ地区曲輪の虎口は，桝形を成しており，Ｅ’地点の添曲輪（馬場）からの出入口であると推測される。

馬場・沼地　Ｅ’地区曲輪の南西側には添曲輪は，Ｅ地



第 70 図　S地区曲輪（松社城）の縄張りと曲輪内の区画割り

点の南側を廻る空堀の延長部分に位置する。ここには空堀と城内の主路（本馬場）であった可能性が高い（上田氏御教示による）。さらに，添曲輪の１段下には沼地があり，空堀と併せてE’地区曲輪を構成する施設であったと考えられる。

（４）織豊系城郭の影響

城内には前述したような様々な施設が築造されているが，桝形虎口や横矢掛けのような織豊系城郭の要素の導入がみられる。

着目すべきは，これらの要素を純粋に採用はせずに，南九州的な城郭を基本として，意識的に織豊系城郭の要素を採用するという独自の取り入れ方をしている点である。また，それらは主郭周辺部に集中している。

九州諸大名の居城には，地方の築城技術を残して織豊系のパーツだけ導入する例も多い（木島 1992）。虎居城の曲輪構成は，織豊系城郭の影響を本格的に受ける以前の南九州の中世城郭の在り方と戦国期～織豊期～近世にかけての城郭の築城技術の変遷を示すものといえる。

３　主郭（S地区曲輪：松社城）の縄張り

（１）文献上の松社城（松社之館）

『宮之城記』では松社城について，「*良重は永禄九年正月十五日に城のうち松社之館に帰城す‥*」，「*宮之城の松社は良重の死地なりと*」という記述がみられる。

永禄９年（1566年）正月に渋谷良重が城の中の松社之館に帰城し，酒宴後に松社城で殺害されたとされており，「館」と記されていることから領主居館があったことが推測される。慶長年間（1600年～）の島津忠長のときには「*指宿冶部入道猶存が居城は松社の地なり*」と記されている。1600年以降（宮之城島津氏期）は廃城になり城主居館ではなく，家臣が居住したとされる。よって，文献上では渋谷～本郷氏までは城主居館をもつ主廓であったと推測される。

（２）曲輪の縄張り・改修

主郭の松社城に付随する曲輪としてO～R地区まで含んだ縄張りは，地形断面図（A－A’）でみると，主郭のS地区曲輪を中心とした階段状の曲輪が形成されており，防御性を意識した縄張りになっている（第69図）。

また，Q地区曲輪（腰曲輪）は，他の曲輪と比して包含層が厚く，出土遺物量も多量であった。現在はS地区曲輪（松社城）とQ地区曲輪（腰曲輪）の高低差はあまりないが，Q地区の遺構検出面（Ⅲ層）が表土から約２ｍあったことから，築城時はS地区曲輪（松社城）とQ地区曲輪（帯曲輪）は約１ｍ以上の高低差があったと想定される。Q地区曲輪に設定した27～29トレンチでは16世紀中～後半の遺物が主体だが，①Ⅱ層下面に14世紀末の遺物が出土していること，②Ⅱ層出土炭化物の年代測定で27トレンチが「1275calAD － 1307cal」，28トレンチは「1436calAD－1496calAD」の分析結果が得られていることから，Q地区曲輪は複数回改修されている可能性がある。

よって，S地区を中心とした縄張りは築城時とは異なり，渋谷氏～島津氏（織豊期～近世）の時期に普請・改修され，現在確認できる縄張りになったと推測される。

第 71 図　トレンチ配置図

第 14 表　各地区のトレンチ調査成果

地区	N地区				O地区		P地区				Q地区（女中仮屋）										
	虎口・監視場				虎口・腰曲輪		帯曲輪・土塁２基				腰曲輪										
トレンチ	1T	2T	3T	4T	5T	6T	7T	8T	9T	10T	11T	12T	13T	14T	27T	28T	29T	30T	31T	32T	63T
層位 Ⅰ	40cm	60cm	5cm	5cm	未調査（要追加調査）		5cm	10cm	5cm	23cm	5cm	5cm	5cm	5cm	5cm	5cm	5cm	5cm	15cm	10cm	10cm
層位 Ⅱ	35cm	50cm	10cm	50cm			×		30cm	155cm	55cm	55cm	30cm	70cm	130cm	130cm	140cm	65cm	42cm	10cm	30cm
層位 Ⅲ	×						地山		地山		地山										
層位 Ⅸ	地山						×				×										
遺構検出面掘削終了面	Ⅸ	Ⅸ	Ⅸ	Ⅸ			Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ
遺物	×	×	×	×			×	△（表土）	△	◎	○	◎	△	◎	◎	◎	◎	○	○	×	○
遺構	×	×	×	×			×	×	溝 礫群	土坑 ピット	×	炉跡 溝	集石 土坑 ピット	×	炉跡	炉跡	×	段差（曲輪分断）	焼土跡 硬化面	砂礫（敷礫？）	石列 土塁
面積	5㎡	10㎡	20㎡	5㎡			5㎡	5㎡	5㎡	5㎡	5㎡	5㎡	5㎡	10㎡	5㎡	5㎡	5㎡	5㎡	5㎡	5㎡	10㎡
備考	虎口 監視場						帯曲輪 監視場	帯曲輪 土塁横	帯曲輪 土塁横	帯曲輪	腰曲輪	腰曲輪	腰曲輪	腰曲輪	腰曲輪	腰曲輪	腰曲輪	腰曲輪	腰曲輪 女中仮屋	腰曲輪 女中仮屋	横矢掛け

地区	R地区			S地区（松社城）															E'（中の城）		
	腰曲輪			【主郭】土塁・石塁・庭園・建物跡・虎口など															【曲輪】		
トレンチ	15T	16T	17T	18T	19T	20T	21T	22T	23T	25T	26T	66T	67T	68T	69T	70T	71T	72T	33T	34T	35T
層位 Ⅰ	5cm	5cm	5cm	5cm	10cm	5cm	5cm	10cm	5cm	5cm	5cm	10cm	10cm	10cm	5cm	5cm	10cm	10cm	20cm	5cm	5cm
層位 Ⅱ	130cm	60m	35cm	40cm	30cm	35cm	40cm	30cm	50cm	25cm	90cm	30cm	30cm	30cm	100cm	25cm	50cm	20cm	130cm	20cm	30cm
層位 Ⅲ	地山			地山															地山	20cm＋ 地山	地山
遺構検出面掘削終了面	Ⅲ	Ⅳ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅴ	Ⅳ	Ⅲ
遺物	○	◎	×	△	△	△	△	×	○	○	○	○	○	△	△	○	◎	△	△	◎	◎
遺構	×	炉跡	×	土塁	炉跡 土坑	土塁	溝２条 ピット	砂礫	石塁 土坑 ピット 溝	土坑 土師器埋納	×	ピット群 土坑	ピット 溝	巨石（庭石?）	石塁 掘り込み	微勾配 溝	コの字形遺構 巨石	石塁 溝	堀	土塁 土坑 ピット 溝	硬化面（Ⅱ） 焼土跡 ピット 土坑
面積	5㎡	10㎡	10㎡	10㎡	10㎡	10㎡	5㎡	10㎡	5㎡	5㎡	5㎡	10㎡	5㎡	5㎡	5㎡	5㎡	25㎡	5㎡	10㎡	20㎡	10㎡
備考	腰曲輪	腰曲輪	腰曲輪 虎口	主郭 土塁	主郭	主郭 土塁	主郭	主郭（横矢掛け）	主郭 区画溝	主郭 虎口周辺	主郭 西部	主郭 掘建柱建物	主郭	主郭 庭園遺構	主郭 窪地	主郭 区画溝	主郭 焼土集中	主郭 石塁	堀切	堀切	炉跡

地区	E'地区	T地区							U地区						V地区（八女壇）						
	【曲輪】	登路（馬場）・横矢掛け							【曲輪】虎口						【曲輪】石塔・集石・堀切						
トレンチ	36T	37T	38T	39T	73T	40T	41T	42T	43T	44T	45T	46T	47T	48T	49T	50T	51T	52T	53T	54T	55T
層位 Ⅰ	20cm	5cm	10cm	5cm	5cm	5cm	5cm	5cm	10cm	5cm	5cm	3cm	12cm	8cm	25cm	6cm	石塔・集石群 集石群に部分的にサブトレンチ（周辺には未設定）		63cm	5cm	10cm
層位 Ⅱ	20cm	×	30cm	×	25cm	40cm	35cm	30cm	10cm	×	20cm	15cm	23cm	20cm	10cm	14cm			×	30cm	60cm
層位 Ⅲ	×		×		×	×	×	×	地山		地山	地山	×		×	地山				地山	40cm＋
層位 Ⅳ																					地山
層位 Ⅴ	地山	地山											Ⅸ		Ⅸ						
遺構検出面掘削終了面	Ⅴ	Ⅴ	Ⅴ	Ⅴ	Ⅴ	Ⅴ	Ⅴ	Ⅴ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅸ	Ⅸ	Ⅸ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅴ	Ⅳ	Ⅳ
遺物	△	×	×	×	△	×	△	△	△	×	×	△	△	×	×	△	×	×	×	×	△
遺構	土坑 ピット 溝	硬化面	硬化面	硬化面 敷礫	溝２条	×	土坑	土坑 ピット	硬化面	硬化面	焼土	×	×	×	硬化面	硬化面	集石 石塔		堀切		
面積	5㎡	5㎡	5㎡	5㎡	5㎡	5㎡	5㎡	5㎡	10㎡	5㎡	5㎡	5㎡	5㎡	5㎡	5㎡	5㎡	1500㎡		5㎡	10㎡	15㎡
備考	横矢掛け	登路（馬場）	登路（馬場）	登路（馬場）	S地区虎口下	登路（馬場）	横矢掛け		曲輪 虎口	登路（馬場）	曲輪	曲輪	登路（馬場）	登路（馬場）	登路（馬場）	堀切	八女壇 石塔記銘 宝徳二年＝1450年		土砂堆積	堀切	堀切

地区	V地区（八女壇）						W地区		
	【曲輪】石塔・集石・堀切						腰曲輪		
トレンチ	56T	57T	58T	59T	64T	65T	60T	61T	62T
層位 Ⅰ	5cm	20cm	20cm	20cm	10cm	5cm	100cm＋	200cm＋	120cm＋
層位 Ⅱ	20cm	30cm	40cm	60cm	10cm	10cm	河川氾濫堆積物		
層位 Ⅲ	40cm＋	40cm＋	30cm	20cm					
層位 Ⅳ	地山		20cm＋	40cm	地山				
層位 Ⅴ				40cm					
遺構検出面掘削終了面	Ⅳ	Ⅳ	Ⅳ	Ⅵ	Ⅴ	Ⅴ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ
遺物	△	△	△	×	△	×	×	×	×
遺構	×	×	×	×	堀切	硬化面	×	×	×
面積	10㎡	10㎡	10㎡	20㎡	10㎡	5㎡	5㎡	10㎡	5㎡
備考	先端部 砂礫層	先端部	先端部	先端部	堀切	犬走か	先端部 河川氾濫堆積物	先端部 河川氾濫堆積物	先端部 河川氾濫堆積物

凡　例

遺物包含層

遺構検出面

地山

遺物量　小：△　中：○　多：◎

参考：基本土層

層位	色調	内容等	層厚
Ⅰ層	黒色	表土	10cm
Ⅱ層	暗茶褐色		20cm
Ⅲ層	黄橙色	アカホヤ火山灰	20cm＋α
Ⅳ層	灰白～黒色	砂礫層	—
Ⅴ層	灰白～黒色	入戸火砕流堆積物	—
Ⅵ層	灰白～黒色	礫混粘質土	—
Ⅶ層	黒色	阿多火砕流堆積物	—
Ⅷ層	灰白～黒色	砂礫層	—
Ⅸ層	灰白	加久藤火砕流堆積物	—

松社城のように主郭が求心的かつ恒常性の高い群郭式城郭は例はなく，南九州中世城郭を考える上で貴重な事例となろう。

（３）曲輪内の区画

松社城は馬蹄形の曲輪で石塁や土塁，溝などによって曲輪が５つに仕切られていた（第70図）。

区画Ⅰは土塁で三方を囲まれた空間で，曲輪内における防御施設・作業場（炉跡）としての機能をもつ。区画Ⅱは，虎口と張り出した空間（横矢掛け）が設けられており，防御的な役割が強い。

石塁に囲まれた区画Ⅲは，窪地や区画溝，庭園遺構，コの字形遺構など多彩な施設が設けられており，曲輪内でも他の空間と比べ特殊な空間であったことが窺える。

特に石塁は高さが低く，礫を土塁上に丁寧に張り付けている。防御性が低いことから，仕切りや結界的な役割をもつものと考えられる。また，単なる曲輪の仕切りとしての役割だけではなく，①庭園や景観形成のために配置されたもしくは，②宗功寺に対面に配置された宗教的な意味をもつ施設として築造された可能性がある（太田氏御教示による）。

区画Ⅳは北側に広い虎口が設けられた曲輪内で一段高くなった空間である。曲輪内でピット群の広がりを確認できたのは区画Ⅳのみであり，建物（居館か）が設けられた空間であったと推測される。礎石建物等の痕跡は確認されていないため，ピット群の広がりを確認する必要がある。また，合わせ口土師器の埋納遺構（地鎮か）も検出されており，特別な空間であった可能性は高い。

区画ⅤはⅣとの境の区画溝と南側虎口以外には，遺構などは検出されておらず，空間の機能については今後の課題である。なお，曲輪内の仕切りは，溝で曲輪の東西を仕切った塩の城（Ｃ地区）でも確認されている。

松社城の区画が構成された時期や遺構については，追加調査が必要だが，遺構の年代測定では 15世紀前半～17世紀前半の測定結果が得られており，渋谷氏後期～島津忠長の代までの範疇に収まると考えられる。

またＱ地区曲輪も精査により微勾配が確認され，３つの区画に分断されていたようである。仕切りラインは微勾配のみで，明瞭な仕切りとはいえないが，各空間の仕切りや機能差については追加調査が必要である。

（４）庭園遺構

文献および石組手法から枯山水様式庭園であったと推測される。検出された大石は「かませ石」が検出されたことから，城外から持ち込まれた庭園の石組の可能性が高く，松社城には庭園があったと考えられる。

中世城館における庭園の事例は国内でも多く，県内では霧島市留守氏館跡や姶良市花園寺跡で枯山水様式庭園や築山などが確認されている。山城の主郭の庭園については『上井覚兼日記』に宮崎城の主郭の作庭に関する記述があるが，中世山城の庭園は調査事例がないため松社城の庭園遺構は貴重な調査成果となった。今後，庭園の帰属時期・規模などの詳細については，周辺調査を慎重に行う必要がある。

４　今後の取り扱い

自然地形を生かして築城された特性をもつ山城は，地形そのものが城郭としての遺構である。

調査の結果，良好な状態で残存していることが明らかとなった。各地区のトレンチ調査で得られた遺物包含層・遺構検出面の層厚は第14表に示す。Ｏ地区の５・６トレンチのみ未調査であるが，どの地区も表土が約10～20㎝と薄いため，今後整備を進めていく上で留意する必要がある。また，包含層及び遺構がない箇所についても，遺構・遺物の有無を確認する必要がある。

公園化整備は山城の特性を活かして，地形改変を極力せずに，現地形を残しつつ，盛土等で地下遺構を保護することが望ましい。

【参考文献】

頴娃町教育委員会 2007『頴娃城跡』頴娃町埋蔵文化財発掘調査報告書7
上田 耕 2014「南九州の城郭―群郭式の曲輪配置と近世麓集落の連続性」『中世城館の考古学』高志書院
鹿児島県教育委員会 1987『鹿児島県内の中世城館跡調査報告書』
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2011『虎居城跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 162
木島孝之 1992「九州における織豊系城郭」『中世城郭研究』6
児玉幸多・坪井清足監修 1979『日本城郭大系』18，新人物往来社
小島摩文（編）2011『新薩摩学―中世薩摩の雄　渋谷氏―』南方新社
下鶴　弘 2013「薩隅における群郭式城郭の登場と展開」『平成 25 年度南九州城郭談話会・北九州中近世城郭研究会合同研究会資料集』
千田嘉博 2000「南九州における戦国期権力と城」国立歴史民俗博物館研究報告 103
千田嘉博 2004「戦国期の城下町構造と基層信仰」国立歴史民俗博物館研究報告 112
知覧町教育委員会 2006『知覧城跡（３）』
堂込秀人 2003「中世山城と近世遺物」『研究紀要 縄文の森から』1 東京大学史料編纂所編 1991『上井覚兼日記』（上巻）岩波書店
中井 均 2012「志布志城」『本郷』102，吉川弘文館
奈良文化財研究所（編）1998『発掘庭園資料』
隼人町教育委員会 2001『留守氏館跡』
松田毅孝・川崎桃太（訳）1987「豊後篇Ⅰ」『フロイス日本史６』中央公論社
村田修三 1987「城の分布」『図説中世城郭事典』３，新人物往来社
三木靖 1987「研究資料によりみた本県の中世山城跡」『鹿児島県内の中世城館跡調査報告書』
三木靖 2000「中世城郭と住民」『南九州城郭研究』22
宮之城文化懇談会編 2001『虎居城物語』 宮之城文化懇談会
宮之城町史編纂委員会 2000『宮之城記』『祁答院記』，別冊資料編『宮之城町史』
八巻孝夫 1991「日向国都城の曲輪の屋敷割」『戦国史研究』22
山鹿市教育委員会 2009『隈部館跡Ⅳ（総括集）』山鹿市文化財調査報告9
若山浩彰 2004「近世から見上げた城館」『2003年度鹿児島国際大学生涯学習センター特別講演会報告書』

写 真 図 版

①虎居城跡全景（東から，左は推込分水路），②S地区石塁（北から）